
正しい魔王の育て方

宗像竜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しい魔王の育て方

【Nコード】

N16490

【作者名】

宗像竜子

【あらすじ】

イオス大陸有数の港町マリオーゾ。

かつて魔王を倒した勇者を崇める聖主教会の総本山を有する為に、他よりも封建的な風土を有する場所の中で、唯一開放的な雰囲気をもつ街にて起こる、一つの事件。

教会関係者に育てられた少年・エミリオは、最近謎の宗教団体に絡まれて困惑していた。

エミリオを『王』と呼ぶ彼等は、果たして何者なのだろうか……？
元HP5周年記念小説にして、『ライトファンタジー』をテーマに

した作品です。

プロローグ

> i 1 2 4 2 3 — 1 4 5 8 <

昔むかし、この世界は恐ろしい魔王によって支配されていました。その本質は、『悪』。

世の正しいと言われるもの全てをその存在一つで否定する彼は、非常に強大な力を有し、眷属けんぞくである魔族達を従え、あらゆる生き物を虐げしいた、恐怖させました。

魔王君臨せし、闇の時代。

後の世にてそう語られる暗黒の時代は、あらゆる生き物の苦痛、悲哀を飲み込んで、いつまでも続くかに見えました。

…が。

世の流れとは不思議なもの。

希望など欠片もないと誰もが思っているようなそんな時代にありながら、それを良しとせず、立ち上がる者がいたのです。

歴史にこそその名は残されてはいませんが、『勇者』や『救世主』などと呼ばれ、現在では神格化されて『聖主』として広く人々に崇められていく人物こそがそれです。
あが

当然ながら、その道のりは長く険しいものでした。

いくつもの苦難の前に、幾度も挫折そくそうになりながらも、彼は幾人かの仲間と共に魔王を目指したのです。

…それがどのようなものであったかは、語る必要はないでしょう。彼の働きにより、世界に平和と平穏が齎もたらされ、今日があるのは知つての通り。

誰もが一度は耳にする英雄譚ですからあなたもご存知でしょう。それから実に千年以上にも渡り、光の時代は続いています。

もちろん、その間に争い事がなかった訳でも、不幸がなくなった訳でもありませんでしたが、理由なく命を失う子供は減り、老齢まで生きる人の数は増えてゆきました。

生活も比べようもない程に豊かになり、人々の顔には笑顔が浮かぶようになっていきます。

このまま日々が過ぎて行くのだと、人々は信じて疑いませんでした。

確かに魔王が死した後にも魔族は滅びず、時としてその牙を向けてはきました。

ですが魔王がいない今、彼等の力は当時の十分の一程のものよりも更に弱く、人の手でも十分対抗出来る存在に成り果てていました。何処にも、今の平和を取り上げる事が出来る存在はいないのです。そして実際、そうなるはずでした。

人が増えすぎなければ。

人々は豊かになればなる程、努力を忘れ、自重を忘れ、快樂ばかりを追い求めるようになっていきました。

それは決して悪い事ではなく、それまでの苦難の日々を考えれば自然の流れと言えるでしょう。

ですが止まる事を知らないその欲望は、世界の片隅に一度は失われたはずの闇を生み出し、時間がその闇を育てて行きました。

人と人の心の隙間という目に見えない場所で生まれたそれは、誰にも知られずにゆっくりと成長して行きました。

当然、中には愚かな人々の行いを正そうとする者もいましたが、その数は時が経つに連れ、次第に減って行きました。

それはそうです。誰だって、楽な方がいいに決まっています。

彼等もまた『人』だったのですから、そちらに傾いてしまう事を責める事は誰にも出来ない事ですしょう。

そして気が遠くなるような時を経て、凝り固まったその闇はつい

に形を取ったのです。

それは一人の赤ん坊。

人々の欲望を母として生まれたそれは、周囲に影響を与えるほどの力は持っていませんでしたが、魔王が倒された時から今まで、影に追いやられていた魔族にははつきりとその誕生がわかりました。何故ならそれは彼等の王。再びこの世界を彼等の元へ取り戻してくれる、魔王となるべき存在だったのですから。

新たな『魔王』の誕生だ！！

すぐさま世界中から魔族が集まり、それは歓喜をもって迎えられました。

そして彼等の力によって、まだ確かな肉体を持っていなかったそれは、器となる肉体を得、この世の存在として生まれ出たのです。魔族達は一刻でも早く、かつてのような魔王へ成長を遂げさせなければ、と考えました。

生まれたばかりの魔王は、人の欲望を元に生まれた為か、限りなく『人間』の赤ん坊に近い存在だったからです。

光ではありませんが、完全な闇というにはあまりにも純粹。

そこで彼等は話し合い、魔族よりも下等な魔物を生み出す『黒き母』の長に委ねる事にしました。

黒き母は、魔族の中でも低俗な存在とされていましたが、闇の子を産む為に悪徳に満ちた人間を食べる事を特に好む種族。

彼女達の身近にいるだけで、その無垢な身は血と恐怖、悪徳、その全てを知る事が出来る。そう考えたからです。

残念ながら、絶えず魔物を産む身体故に、黒き母はその場には一人もおらず、仕方なく一人の選ばれた魔族がもつとも闇の力が増す新月の晩に、魔王をつれて黒き母達のいる場所へと旅立ちました。

それが、運命の分かれ道。

その後、魔族達は今か今かと魔王覚醒を待っていました。が、どんなに待ってもそれらしき兆候もなく、魔王を連れて行った魔族の消息もまた、不明のままでした。

一年が経ち、二年が経ち 五年が過ぎた頃。

いくら何でもおかしいと、痺れを切らした魔族達は黒き母達の元へと押しかけ、魔王はどうした、と問い質しました。

黒き母の長は、ふくらんだ腹を撫でながら、小首を傾げました。
そして答えたのです…誰もが予想していなかった答えを。

「まおう…何ソレ？ アタシ知らないわあ、そんなの」

その問題発言により、魔族達はようやくとんでもない事態が起こっていた事を知ったのです。

我々を導いて下さるはずの魔王が行方不明！？

しかも、五年間もの長い間です。

迂闊^{うかつ}と言えば迂闊ですが、それを悔いた所で何かが変わるわけはありません。

彼等は世界中に散らばる眷属という眷属を動員して、魔王探索を始めました。

仮にも魔王となる者です。

生まれた時ですらすぐにわかったように、五年経ってもまたすぐに見つかると思っていました。

いくら『人』に近かろうと、その本質は『悪』のはず。人に紛れていようとすぐにわかるに違いない、と。

…が。

やがて彼等はその認識が甘かった事を思い知る事になりました。彼等は結局、それから更に五年もの月日に渡り、魔王を見つけ出す事が出来なかったのです。

これも仕方がないと言えば、仕方がない事でした。むしろ、見つけ出せた事が幸運だったとも言えるでしょう。

というのも、魔王がいたのは彼等の盲点中の盲点とも言える場所だったのですから。

ある聖女の手記

聖界歴1307年、秋、記す。

巡礼中に立ち寄った山村、サル二にて魔族が出現。

聖主の教えと御霊を伝える者として、その浄化に参加。

サル二の聖所には御高齡の聖父様しかおらず、僭越せんえつながら一晩の宿をお借りした恩義を返す為にも、我が手により執り行う。

今では非常に珍しい中級魔族の上に新月であつた為、少々梃子摺ていすつてしまったが、数刻後に調伏を完了。

多少ながらも被害を出してしまい、我が身の未熟さを不甲斐なく思う。

被害状況は軽傷者が数名、魔族出現点の側にあつた農家の納屋が全壊、調伏点となつた聖所の塀が半壊、及び前庭が半径3シン（1シン＝約5メートル）、高さ1シン弱の規模で陥没した模様。

幸いにも死傷者は出なかった。

この時、この魔族は赤子を抱えており、最後まで手放そうとしなかった。恐らく何処かから奪い、食料にでもする心算だつたのだらうと推測する。

見た所、まだ生後数月ほど。健康な男児である。

浄化中は恐怖の余りか、魔族に何らかの術でもかけられたいたのか泣きもせず、魔族の腕の中で身動き一つしなかったが、現在は元氣を取り戻し、旺盛な食欲を見せて時折ひどく暴れる始末である。

聖父様の厚意に甘え、そのままサル二に預けても構わなかったのだが、もしかするとこれから立ち寄る村や街に親がいるかもしれないと考え、身柄を預かる事とする。

この身は若輩にして巡礼中の身であるが、これもまた聖主の与えたまえし試練に違いない。

人間の赤子は流石に育てた事はないが、家畜ならば過去に幾度も

世話をした事がある。何とかなるだろう。

名がないと不便なので、仮の名として『エミリオ』と名付ける。
尊敬する我が師の名を一部頂いた。万が一親がこのまま見つからなくとも、師のように強い人間に育つよう祈りを込めて。

世に光を齎したまいし聖主よ。

この憐れな赤子に祝福を与えたまえ。その行く末に幸多からん事を。

エミリオ少年の悩み（１）

イオス大陸有数の港町、マリオージ。人も物も、イオス大陸のあらゆるものがここへ集まると言われている。

その南西に広がるは、穏やかな海流を誇るエンテ海。

南国特有の少し強めの陽射しの下では、まるで宝石をばら撒いたかのような眩^{まはゆ}さで煌^{きやう}いている。空は青く澄み渡り、そこに漂^{まよ}う雲の白さを際立たせていた。

道を行く人々は明るい表情で、陽気で大らかな性質はその街の豊かさを象徴していた。

その日焼けした身に纏^{まと}うのも、色鮮やかで解放的なデザインのもが多く、マリオージ特有の自由な気風がよく表れている。

長旅を経てこの町へと辿り着いた人間が、町の入り口でその活気に満ちた様子を目の当たりにし、呆然と立ち尽くす事がこの町でよく見られる光景になって久しい。

というのも、マリオージに満ちる明るく解放的な空気も、肩や腕を剥き出しにするような服装も、イオス大陸の他の場所では、まず見かける事がないものだからだ。

他に存在する大陸と異なり、このイオス大陸は特に聖主信仰^{あつ}が篤い地である。

聖主とは、古の時代に世界を支配していた魔王を倒し、世に希望と平和を齎^{もたら}した人物を神格化したもので、聖主信仰は後世に名を残さなかったその人物の偉業を讃える内に宗教となったものだ。

その苦難の人生を不屈の精神で乗り越えた偉大なる人物。その人物を讃える宗教は、とかく規律が厳しい事で知られている。

肌は必要以上見せてはならない、暴力はいかなる理由があろうとも働いてはならない、質素を常とし贅沢^{けんざん}は慎め、日々研鑽^{けんざん}努力すべし。などなど。全てを挙げるのも面倒なほど。

もっとも、その全てを守ろうとすると実生活に支障が出る為、実

行しているのは聖職者の中でも特に敬虔な信者のみだが、その教えは一般の民にまで浸透している。

なにしろ、イオス大陸の北東にその総本山が存在しているのだ。そんな背景もあり、イオス大陸全体が聖主信仰を基本宗教とし、結果として世界的な目で見ると昔かたぎの封建的な風土の土地が多いのだった。

人々の多くはそうした生活に満足し、そのまま生まれた地の土へと還るのが常だ。刺激を求める一部の人間だけが大陸の外へと出て行き、大抵そうした人々は二度と戻って来る事はない。

マリオーゾは、そんな一部の人間が目指す最初の『外』への出口の一つなのだった。

+ + +

その日もまた、マリオーゾの町は新たな旅人を迎え入れた。

大人と子供の二人組 マリオーゾにやって来る旅人の中でも、少々珍しい組み合わせだ。

その二人は他の旅人同様、入り口の辺りで立ち尽くしていた。

…ただし、驚いて立っていたのは子供の方だけで、大人 二十歳前後の女性 はその顔にも態度にも、一切驚いた様子を見せていなかったが。

立ち尽くす子供を見守る彼女は、女性にしては背が高く、真っ直ぐに伸びた姿勢が印象的だった。

邪魔にならないようにか、濃い灰色の髪をきつちりと結い上げた彼女が身に着けているのは、厚手のマントに男物の旅行服で、どちらかと言うと丸みの欠けたその瘦身も相まって、遠目では性別がわかりにくい。

顔立ちもどちらかと言うと中性的で、冷やかな薄茶の瞳が余計にそれを際立たせている。

一方、連れの子供は見た所では四、五歳ほど。金髪に碧眼の、ま

さに可愛い盛りの少年である。だが、可愛いだけでなく利発そうな雰囲気とその大きな瞳に漂っていた。

二人は親子にしてはあまりにも共通点が見当たらず、傍目ではその関係がわかりにくい。実際、二人の間に血縁関係というものは存在していなかった。

「…すっげー……！」

ようやく子供の口から興奮した声が零れ落ちる。

マリオゾの町を前に頬を紅潮させ、口をぽかんと開けている様子は、子供らしくて微笑ましい。やがてその顔に全開の笑みを浮かべると、少年は実に嬉しそうに言い放った。

「人がカレハカクレ虫みたいにいっぱいいるー！」

カレハカクレ虫とは、枯葉の下に卵を産んで越冬する虫で、春になるとわらわらと湧き出してくる虫である。その湧いて出る様は決して見て気持ちの良いものではなく、生理的嫌悪感を抱く者が大半を占める。

人が群れ集っている様子をそんなものに喻えた少年の感性に頭痛を覚え、連れの女性は胸の内で育て方を間違ってしまったかもしれない、と不安を感じた。

少年と彼女の間に血縁こそないが、少年が赤子の頃から今まで育てて来たのは彼女である。

育ての母としては幾分経験が足りてなかった事是否めないが、人として最低限の事は教えたつもりだ。…が、それ以外の情緒面に関しては自信がない。

何しろ彼女自身、感情を人に曝^{さら}す事を苦手に行っているし、必要最小限の会話を好む方だからだ。

確かに今までずっと人口の少ない山間部を主に旅してきた為、一度にこれ程の人間を目の当たりにする事などなかった。

その事を思えば、人が多いだけで感動する事自体は不思議な事ではなかったが、喻えに素で虫が出て来るのは人としてどうか。

自分の隣でそんな事を養い親が思い悩んでいるとは夢にも思っ

いない様子で、少年は次に地面をタスタスと踏み、興奮気味に報告してくる。

「すっげー、道が土じゃない！！ 何だろこれ、石かな！？」

エンテ海もかくやの澄んだ青い瞳をキラキラと輝かせての一言に、彼女はくらりと眩暈を感じた。もちろん、その笑顔の眩しさに対してではない。

確かに田舎ばかりを旅して回ったのは事実だ。事実だけでも。

道を煉瓦で舗装された街は、封建的なイオス大陸でも決して珍しいものではなく。

今までマリオーゾに来た旅人の中で、その景観や開放的な雰囲気ではなく、たかが道にそこまで感動した者はいないに違いない。

「…デイス？」

何の反応も示さない保護者に不思議そうな目を向けてくる少年に、彼女はぎこちなく微笑みかけ、彼の偏りまくった一般常識を早めに矯正せねば、と心に誓った。

「さあ、もういいですか？ そろそろ移動しますよ」

「…何処に？」

自分の報告に、彼女が大して反応を返さなかった為か、それともここからまだ移動したくなかった為か。心なしかムツとしたように眉を寄せての問いかけに、彼女は澄ました顔で答えた。

「これから私達が暮らす所へですよ。言っておいたでしょう。今日で旅は終わりなのですよ？」

「あ、そっか！！ そうだった！！」

最初は驚き、次に嬉しさを隠さずに笑顔になる少年を微笑ましく思いながら、横に置いていた荷物を抱え上げる。

そう、今日からはもう各地を流離^{さすらい}う事なく、このマリオーゾで日々を営むのだ。

この地には彼女が師と仰ぐ人物がいる。彼と顔を合わせるのも実に八年ぶりだ。

最初こそマリオーゾで暮らす事にすっきりしない思いを抱いてい

たものの、今は楽しみにすら感じていた。この街の解放的な空気が、頑なな所のある彼女の心にも作用したのかもしれない。

彼女が先に歩き出すと、すぐに小走りで少年が追い着いてくる。そして横からわくわくした表情で矢継ぎ早に確かめてきた。

「じゃあさ、じゃあさ、今日からは野宿とかしないでいいんだ？」

「ええ、そうです」

「雨漏りがする納屋とか、物置の片隅とかで寝たりしないんだ？」

「…ええ、そうです」

「朝起きたら馬糞に囲まれてたりしないんだ？」

「……」

確かに馬小屋に泊まった時は彼女も閉口したものだ。

その時の事を思い出してげんなりとなりつつも、彼女は良心を失わなかった。

「エミリオ、ろくに路銀を持たない私達に、親切にも一夜の宿を貸して下さった方々が誤解されるような事を口にするのはやめなさい」

「はい。でも本当の事じゃん……」

ぶつぶつと言いながらも、すぐに好奇心の塊は次の興味の対象を見つけ出す。

「あつ、あれなんだ!？」

小さな指で指し示す方へ目を向けると、そこには多くの露店が軒を連ねるバザールがあった。

喧々囂々（けんけんごうごう）と商人と客がやり取りする声が、少し離れた場所にまで聞こえてくる。間違いなくこのマリオーゾでも一番の賑わいを見せる場所だろう。

「あれはバザールですよ」

「嘘だ! あんなに人がいっぱいいるし、食べ物じゃないし、うるさいじゃないか!」

常識の偏った少年だが、その言葉に間違いはなかった。ただ、今まで見てきた田舎のバザールとマリオーゾのバザールの性質が違い

過ぎるだけだ。

地方では農作物や食料品が主で、元々の相場が安い為に値切る交渉など滅多になく、所によっては物々交換だったりするもので、そもそも目的が違うのだ。

彼女はすかさずその知識に補足してやる事にした。

「これもそうなのですよ。このマリオゾには他の大陸からの品も入ってきます。ほら、この街の人は他とは違う染めをした服を着ているでしょう？ あれも海の向こうから伝わったものという話です。ここでは宝石や衣類、薬草　ここにはないものばかりが売られています。だから各地の商人がわざわざここまで買い付けに来ているのですよ」

地方からマリオゾに出て来るのには、相応の時間と路銀が必要になる。その結果、可能な限り安価で良い物を仕入れようと値切りの交渉は非常に白熱する訳だ。

少年はその説明に納得したのか、ふうん、と相槌を打つと、今度は食い入るようにその目をバザールのやり取りに向けた。

口を動かすばかりではなく、次から次へと商品を並べて行く手際も見事だし、口では激しくやり取りしながら、片手では買い取った商品を整理し、あるいは算盤を弾く器用さはまるで手品だ。

それを面白そうに見ている少年に、先を急かす代わりに彼女はからかい半分で問いかけてみた。

「商人になってみたくなりましたか？」

幼い子供の事だ。面白そうな職業を見て、それに憧れを抱くのは実に普通の心の動きだろう。

その問いかけにぱつと顔を彼女の方に向けた少年は、しかし予想に反してその首を横に振った。

「んーん、ならない。あれも面白そうだけど、もうなるものは決めるから！」

「えっ？」

ずつと側にいたのに養い子がそんな事を考えていたとは思わず、

彼女は驚き、そして月日の流れる速さを思った。

夜泣きをするような子ではなかったし、基本的に聞き分けの良い子だったが、苦勞がなかった訳でもない。

ほんのりと胸の奥が熱く感じるのは何故だろう。世の母親も子の成長を前にこのような気持ちになるものなのだろうか……。などと密かに感激しつつ、彼女は少年へ好奇心から尋ねてみた。

「では、何になりたいのですか？」

元よりまともな答えは期待してはいなかった。年よりしっかりしている子ではあるが、むしろこの年でまとも過ぎてもちよっと嫌である。

問われた少年はその一言を待っていたかのように、その顔にさながら天使のように純真無垢な笑顔を浮かべると、胸を張って誇らしげに言い放ったのだった。

「大金持ち！」

その瞬間、彼女は自分の育て方を激しく後悔したという……。

エミリオ少年の悩み（２）

マリオーゾが新たな住人を迎えて五年。

なりたいものはと育ての母に問われて、堂々と『大金持ち』と答えた少年　　エミリオは現在十歳。まるでそこで生まれ育ったかのように、すっかりマリオーゾの生活に染まりきっていた。

何処にどんな店があるのかも、入り組んだ道の奥まで知らない事はほとんどない。

健康そのもので病気一つした事もなくいつも元気いっぱいの際は、陽気なマリオーゾの人々と馬が合った。何処に行っても声をかけられるし、天真爛漫で裏表のない性格は人々に愛された。

エミリオもまたマリオーゾの人達が大好きだったし、ずっとここで暮らしてゆくのだと信じて疑いもしていなかった。

毎日は楽しく、朝はすぐに夜になり飛ぶように過ぎてゆく。彼はその頃、間違いなく幸せの中にいた。

が。

そんな彼にも現在、一つ悩みがあった。それは……。

+ + +

「……げ」

頼まれ物を済ませた帰り道、『それ』を目の当たりにしたエミリオは、あからさまにその幼い顔を引きつらせた。

その視線の先にいるのは、いかにも怪しげな風貌の人々。

ただでさえイオス大陸の南端に位置するマリオーゾは、一年を通じて温暖で、秋口でも昼間は汗ばむ程だ。にもかかわらず、彼等は全員、頭から足の先まで黒尽くめなのである。

しかも顔にはご丁寧に季節外れのカーニバル用の派手な仮面を被

っ
ていて、どう好意的に見ても変な人達である事是否定出来ない。
だが、それだけならエミリオも『人の趣味はそれぞれだ』と片
付けられる。マリオージの住人はエミリオだけでなく、イオス大陸
の街では特異的なほどあらゆる事に関して寛大なのだ。

しかしそう出来ないだけでなく、『げ』などと嫌そうな声を上げ
たのには、当然ながら理由があつた。

…と言うのも。

「おお！ 皆の者、いらつしゃったぞ！」

「いやゝ、数刻待ち続けた甲斐がありましたな！」

「ご機嫌麗しゅうございます、我が王」

「ワシはここ最近、毎日ご尊顔を拝謁せんはいえつと眠れんで……」

「そうでしょうとも、そうでしょうとも…我らの生きる希望ですか
らなあ……！」

「今日こそは我々の願いをお聞き届け下され！」

などと、口々にエミリオが理解不能（理解したくないだけとも言
う）な事を言いながら、わらわらとそこから、正に虫のように
湧き出て来るのだ。

そして、前後左右からエミリオの方へ歩み寄つて逃げ道を塞ぐと、
最後は決まって口を揃えてここのたまうのだった。

「さあ、我等の王よ！ 今日こそは共にこの世を闇に沈めましよう
ぞ……！」

年端も行かない、十歳の子供を取り囲んでいう台詞ではな
い。

しかも困つた事に、己に陶醉しきっているらしい彼等は、何を言
つてもこちらの言い分に耳を貸さないのだった。

彼等が姿を見せるようになったのは、今から十日ほど前の事だ。

非常に蒸し暑い日で、普段通らない少し薄暗い裏通りを通つていた時のこと。突然、何処からか『王だ!』と声が上がって、何だろ」と立ち止まったのがいけなかった。

気がつくと目の前に仮面を被った黒尽くめの人々がいて、何が何だかわからない内に道を塞がれていたのだ。

いくら他者に寛容であつても、いきなり見知らぬ人々に立ち塞がれば身の危険くらいは感じる。

思わず身構え、何者かと尋ねようとした時 いきなり彼等の

一人が、『王よ!』と叫んで、感極まったように抱きついて来た。それが切つ掛けだった。

あれよあれよと言う間に取り囲まれ、勝手に歓喜号泣し始めた時は、振り払う事も忘れてどうしていいのかわからずに途方に暮れたものだ。

確かにこしばらく、秋口だというのに異様に暑い日が続いていた。その暑さに頭をやられてしまったんだろつか、と気の毒に思つていると、その内にそのまま何処かへ連れて行かれそうになった。

いくら何でも、そのまま黙って誘拐される訳には行かない。我に返り、慌てて抱きかかえた人間に蹴りを入れてその日はなんとか難を逃れたのだが。

それがいけなかったのか、それとも別に理由があるのか。

彼等はそれから毎日毎日、欠かさず彼の前に姿を見せて変な勧誘のようなものをしてくるようになったのだった。

やれ、『一緒に世界を闇に沈めるのです!』やら『今こそ世界を我らの手に取り戻す時!』など、あまり穏やかでない言葉に違和感を感じはしたものの、他の大陸では聖主信仰とは異なる宗教を信仰する人々が信者を増やすべく活動をしているという。

その話はエミリオも聞いたことがあつたので、おそらくそうした人々なのだろうと想像はついたが、まさか自分がその当事者になるとは。

最初は身の危険を感じた為とは言え、初対面で蹴りを入れるなど

というとんでもない乱暴をしたという意識があつたので、『そういうのお断りしてるんでー』とか『布教大変なんですねー』とか適当に口先でかわして逃げていたのだが、いくら（自称）温厚篤実なエミリオも我慢の限界だった。

「……だああああッ！！ 鬱陶しいつ、鬱陶しいんだよアンタらああああ！！ 行く先々で湧いて出るんじゃないやねえ、イカレ野郎どもッ！！！！」

ついにキレて口汚く怒鳴りつける。

普段こんな物言いをしたなら、後で育ての母にしばき倒されるとわかってるので（エミリオがどんなに隠していても、何故か伝わっているのだ）口にしないが、今までの鬱憤^{うづぶん}が溜まりに溜まっていた。

何しろ、彼等に付きまとわれるせいで、約束の時刻に遅れる事数回、お使いの買い忘れが数回、その度に無実の罪で叱られるのである。

毎日通る道を変えているのに必ず姿を見せる彼等は、ある意味健気なのかもしれないが、当事者にとっては気味悪いを通り越して鬱陶しい以外の何物でもなかった。

そうでなくても、すでにその見た目が暑苦しいというのに！！

「宗教勧誘なら余所行つてやれっ！ 余所で！！」

今日という今日は許せない、と怒り心頭で発した言葉は、しかし逆に彼等を喜ばせるだけだった。

「ややっ、お怒りになられた……！！」

「おお、幼いながらも何と言う迫力！！」

「身体が震えました！！」

「流石は我等の王……素晴らしい！！」

「……痺れるわ……」

もつやだ、こいつ等。

口々に好き勝手な事をいう変質者の集団に、心底げっそりとなつてエミリオは肩を落とした。

逃げても駄目、怒つても駄目（というか喜ぶし）。怪しい宗教勧誘（？）だけならともかく、絶対に精神的にとっか変だ。

人を偏見で見えてはいけないと言われているが、きつと誰が見てもこの集団は変だろう。

（…っかさー、ここで足止めされてる訳にはいかないんだってば！）

すでに太陽は傾きかけて、地面に伸びる影が長くなっている。

今日は彼と、現在身を寄せている所の家主の二人が食事当番の日なのだ。

将来一人でも生きて行けるよう、自分の食事くらい自分で作れるべき、という養い親の教育方針の元、日没の鐘が鳴る頃には夕食の準備に入っていなければならない。

今日のメニューは、羊の肉の煮込みに木の実のソースをかけるマリオーゾの名物料理だ。簡単な割りに美味しく、男の手料理でも失敗が少ない料理の一つでもある。

自分に厳しく、他人にも厳しく、ついでに時間や約束事にも厳しい養い親の顔を思い浮かべ、ぞくりと背筋に悪寒が走った。

目の前の変質者よりも、養い親の怒りの方がずっと恐ろしい。

（付き合つてられっか！！）

きつ、とまだ何か感動に浸っているらしい人々を睨みつけると、すうつと息を吸い込んだ。そして。

「道を、開けろつてば

ッ！！！！」

呼吸を余す所なく使つて、先程の比ではない程の大声で怒鳴りつける。

もちろん、怒鳴った所で先程と同じような事になるのは予測済だ。狙いは別の所にあった。

ざわざわと遠くで聞こえている喧騒の中から、一つ二つとエミリオの知った声が聞こえてくる。

なあ…今、エミリオの声がしなかったか？

ああ、聞こえたぞ。何か叫んでいるようだったが。

何かあったのかもしれないよ、見てきてやんな！

そうよ、もう日暮れが近いし…人攫いだったら大変だわ！

顔の広いエミリオは、この周辺にも顔見知りか山のようにいた。結果として彼の大声を聞きつけた人々が、どうしたどうしたとこちらに向かって来る。

その気配を感じたのだらう、黒尽くめの集団は我に返ったように慌てて姿を隠し始めた。

「皆の者、姿を隠せ！ 人が来るぞ！！」

「今日こそはと思っていたのに……」

「我が君、また会いましょう！！」

何も逃げ隠れせずとも、と思うが、彼等はこんなに目立つ格好をしているのに、人目につく事を殊更避けるのだ。

その逃げっぷりは見事としか言いようがなく、人々が到着する頃には一人も残っていないかった。

「エミリオ？ どうしたんだ、こんな所で一人で」

やがてやって来た顔見知りの男に、エミリオは心底疲れ果てた顔を向けた。

「いや、ちよつと変な人達に絡まれて……」

「何だと！？ 大丈夫だったか！？」

「この辺りにもそんなのが出るようになったのかい。世も末だねえ」

よしよし、と宿屋の女将さんに頭を撫でられ、エミリオはようやくほつと肩から力を抜いた。

これで今日はもう出て来ないだらう。変な所で律儀な彼等は、一

度姿を見せるとその日二度は現れない。

それにしても 彼等は一切、何なのだろう？

少年の悩みは深まるばかりだった。

エミリオ少年の悩み(3)

ようやく帰り着いた時、丁度頭上で日没の鐘が鳴る所だった。

見上げると鐘楼^{鐘楼}に人影が見える。おそらく家主のリオー二に違いない。日の出と日没の鐘を鳴らすのがこの家主の数少ない仕事の一つなのだ。

何とかぎりぎりで間に合ったエミリオは、早速家の中に入る事にした。

家と言っても、他の一般家庭とはちよつと違う。鐘楼がある事もだが、ここには人々が祈りを捧げる祈祷所^{きとう}もあり、そうでなくてもやたらと敷地が広いのだ。

というのも、そこはこのマリオーゾ唯一の聖所　　聖主を奉る聖職者達が暮らす教会だからだ。

もつともこの教会には、その規模に反して聖父が一人しかおらず、またその補佐をする聖女も一人しかいないのだが。

「ジカンゲンシュ、ジカンゲンシュ、ケケケツ」

正面からは入らず、そのまま庭を抜けて裏口に回ると、木戸の横にある木に止まっていた極彩色の鳥がそんな声を上げた。

全体的な色彩は鮮やかな赤。後は目の周りや飾り羽、尾羽の辺りに黄色や青、あるいは白が入っている。

色彩の鮮やかさだけでなくその姿も何処か優美で美しい。鳥類の収集家が見たなら、おそらく手に入れたいと切望する事だろう。

「今日は遅れてないだろ、フレイア。失礼なヤツ！」

ここよりも更に南方にある大陸で生まれたとされる『フレイア』という名のこの鳥は、ここ有家主、すなわち聖所を預かるリオー二が以前何処かで拾ったものらしい。

とても賢く人の言葉を覚えて喋るが、何故か人の神経を逆なでにする言葉をタイミング良く喋る為、口うるさい感じがしてエミリオはあまり好きではなかった。ちなみに性別はメスらしい。

「コワイ、コワイ、チビ、コワイ、ギャー」

まだまだ成長期はこれからだが、確かにエミリオはどちらかと言うと小柄な方だった。

これから育つさ、と多くの人が言ってくれるし、中にはリオニのように『チビ』を愛称代わりに言う人もいる。おそらくフレイアは飼い主の言葉を覚えたのだろう。

それにしても普段人に言われるのは特に気にもならないのに、鳥に言われると無性に腹が立つのは何故だろうか。

「チビ言うなって!!」

むきになって言い返した所で、ばたんと目の前の扉が開いた。

「…そんな所で何をしてるのですか？ エミリオ」

「デイ、デイス……!」

現れたのは彼の養い親にして、この聖所に勤める唯一の聖女、デイスティエルだった。

鳥の戯言に真面目に言い返している姿は、実の親でも見られたいものではない。エミリオは慌てて居住まいと正すと、その顔にぎこちない笑顔を貼り付けた。

「た、ただいま!」

「お帰りなさい。…今日はちゃんと遅れずに帰って来たようですね」
よろしい、と微笑まれて、何かすつきりしない気持ちになりながらも、エミリオはデイルティエルに続いて中へと入った。

大体、いつも遅れる気はさらさらないのだ。あの集団に絡まれさえしなれば。

(…なんか、理不尽な気がしてきた)

一応、言い訳をするのは男らしくない行為だと思っているので、今までは遅れたり忘れた事を謝りはしたが、その理由までは語らなかった。

だがこうも連日になると、自分だけの責任で片付けるのは少々無理がある気がする。

気をきかせてか、それとも気にならないだけなのか、デイスティ

エルもリオー二も突っ込んで理由を聞いて来ないが、今はむしろ聞いて欲しいくらいだ。

二人とも、一応は迷える信者の悩みを聞く事を仕事の内にしているのだから、たまには身内の相談も受けたって罰は当たらないのではなからうか？

そんな事を考えながら、背中に斜め掛けしていた布袋から、先程バザールで仕入れてきた食材を取り出して調理台に並べていると、鐘楼から降りてきたリオー二が教会に続く扉からのそりと入ってきた。

「おう、チビ。今日は間に合ったか」

にやりと笑う顔は浅黒い。年の頃は三十代半ば。一つの教会を預かる聖父にしては若い部類に入るだろう。

短く切った髪は緑を帯びた黒で、瞳は薄い水色。長身の上に全体的にがっしりとしたその体軀には、聖父の正装である白い礼服が気の毒なくらいに似合っていないかった。

もっとも似合わないと言えば、同様に聖女の礼服を着たディステイエルも似たようなものだが。

「ディステと同じ事言わないでよ」

うんざりした気持ちで言い返すと、リオー二はおや、と片眉を持ち上げる。

「そんなに気を悪くするな。一応、お前の事を心配していたんだからな？」

言いながらかまどの様子を確かめているディステイエルの方へ、視線をちらりと意味ありげに流す。

心配とはすなわち、遅れた場合にエミリオが被^かつたであろう、人的被害の事についてらしい。

なるほど、と納得したエミリオも倣^{なら}うようにディステイエルに視線を向け、軽く肩を竦めた。

エミリオもリオー二も、ディステイエルには頭が上がらない。

エミリオにとっては今まで育ててくれた育ての母だし、リオー二

にとつては仕事の上では頼りになる部下であり、また私生活でもかけがえのない存在だからだ。

というのも、彼女がいなければこの教会の衣食住の管理は、とつくに破綻していたに違いないからである。

マリオーズに辿り着き、少し街外れにあるこの教会に到着した時の、デイスティエルの凍りついた表情を、エミリオは今でも忘れられない。

普段、沈着冷静で滅多に動揺を見せない彼女が茫然とするのをその時初めて見た。信仰心の高いデイスティエルには、その荒れ果てた様子は余程ショックだったのだろう。

当時、信じがたい事にこの広い教会にリオーニしかおらず、しかも彼はあらゆる管理方面の才能が不自由だった。

その結果、庭は荒れ放題、壁には蔦が^{つた}多い繁り、中も至る所に物が散乱し　一見しただけでは聖所とはわからない程、実にひどい有様だったのだ。

その様はまさに廃屋一歩手前。実際、エミリオはリオーニと顔を合わせるまでそこに人が住んでいるとは信じられなかった。

今の状態は、正にそれ以降のデイスティエルの努力の賜物というより他はない。むしろよくぞここまで人の住める場所になったものだと思う。

「…どうしたんです、二人とも。何か？」

二人の視線に気付いてか、怪訝そうにデイスティエルがこちらに目を向けてくる。エミリオは慌てて作業を再開し、リオーニはとつてつけたかのように仕事の話を始めた。

（…危なかった……）

デイスティエルには二人とも感謝の念は抱いているが、その厳しさには同様について行けないのでいるのだった。

だが、その厳しさも根拠のない無理のあるものではないから、エミリオも黙って受け入れる。

これでもリオーニが言うには、デイスティエルは^{あまた}数多存在する聖

父・聖女の中でも、まだ頭が柔らかい方らしいが　一番身近な聖職者がこの二人である上、今までろくに教会関係者とは接した事がないので、事実関係は不明である。

それはさておきだ。

丁度二人揃った事だし、自分に降りかかっている問題を相談するのに絶好の機会ではないだろうか。

それによく考えれば、いくらマリオーズが他の街と違っていても、聖主信仰が基本宗教である事は変わらない。何か問題になる前に話を通しておいた方がいいに決まっている。

よしと心に決めると、早速エミリオはまだ何やら話している二人に声をかける事にした。

エミリオ少年の悩み（４）

「デイス、おっちゃん。話があるんだけど」

声をかけると同時にぴたりと話すのをやめた二人は、すぐに何事かとエミリオの方へと目を向けてくる。

「何だ、チビ。腹でも痛いのか？」

「リオーニ聖父と呼びなさい。失礼でしょう」

いつまで経っても小さな子ども扱いの抜けないリオーニと、細かい所にこだわるデイスティエルの反応にうんざりしつつも、エミリオは話を切り出した。

「あのさ。オレ…この頃、帰りが遅れるのには訳があって」

その言葉におや、という風に二人が目を軽く見開く。

「どうした、何かあったのか？」

「てつきり友達と遊んでいるのかと思っていたら違ったのですか」

「うん…その、変な宗教団体みたいなのに付き纏まとわれてるんだ。いっつも帰る途中に現れて、足止めされてさ。この間なんて攫さらわれかけたし。すごく迷惑してるんだけど、何か良い解決策ってない？」

困惑している事は言葉と表情で伝わるものの、出来るだけ言い訳めいた言葉にならないように言葉を選んだ結果、その内容ほど深刻さを感じない口調になったからだろうか。

エミリオの言葉に一度顔を見合わせた二人は、特に驚いた様子も焦った顔も見せず、うーん、と同時に腕組みした。

聞いた話だと、デイスティエルとリオーニは元々師弟関係にあつたらしいが、こういうちょっとした事での反応を見ると確かに息がぴったりだ。

しばらく考え込んだ二人は、やがて渋い顔でそれぞれの所見を口にしたのだが。

「ついにうちのシマでも、そういう輩やからはいかいが徘徊するようになったか…

…」

「困りますね。うちには身代金を払える程の余裕なんてまったくありませんのに」

どちらも仮にも養い子が拐^{かどわ}かされそうになっている状況で言う台詞ではなかった。

(…オレの心配はしないんだ……?)

頭では予想していた反応だったが、本当にそうなるとやはり少し傷付く。

もちろん、二人が自分をどうでもいいと思っている訳ではない事は、それなりの付き合いの長さからわかっている。単に仕事熱心で、必要以上に現実的ただけなのだ。

だが、やさぐれた気分になるのは止めようがない。そんなエミリオの少し荒んだ表情で、はっと我に返った二人は慌てて弁解した。

「ち、違うからな!? チビ、お前が連れて行かれてもいいと思っている訳じゃなくてだな……っ」

「そうですとも、誤解はしないで下さいよ!？」

「…ふーん……。本当かなあ？」

わざと捻^{ひね}くれた言葉を返すと、リオーニもディスティエルも、大げさなくらいに真剣な顔で頷いた。

「本当だとも。大体お前、見も知らない人間にほいほいついて行く程、分別のないガキじゃないだろうが？」

「むしろ、年の割りにしっかりし過ぎです。隙がないのは良い事ですが」

「…まあ、いいけど」

あまり褒められてはいない気もするが、つまりそれだけ信頼してくれているという事だ。

元々、どちらも子供だからと必要以上に甘やかす人達ではない。基本的に放任主義なもの、それだけの理由があつての事なのだ。

実際、エミリオは同世代の子供と比べると大人びているというか、しっかりしていると言えた。同じ年頃の友達よりも、大人の友人の方が多いからかもしれない。

善悪の区別はつくと思なしているから、リオー二もディステイエルも、エミリオの自主性に任せているのだ。

「それで…チビ。その宗教団体みたいな奴等って、どんな奴等なんだ」

一応はマリオゾの聖所を任されている身だからか、リオー二が興味深そうに尋ねてくる。

「どんなって…簡単に言っと、全身黒尽くめにカーニバルの仮面をつけた集団、かなあ」

「…何だそりゃ」

宗教団体と言うよりは、仮装行列のような表現にリオー二の眉が寄る。ディステイエルさえも呆れた表情を隠さない。

「まだ暑いのに、ご苦労な事ですな」

「同感だ。陽射しが和らぐにはまだ間があるのに黒尽くめとは……。気合が入っていると見えなくてもないが、そうでなければただの阿呆としか思えんな」

聖父のくせに結構失礼な事を口にするリオー二に、エミリオも同調する。

「だよな？ オレも遭遇した時に暑くないのかって聞いたんだけど、『心配御無用！ 黒は我等を象徴する色ですから！』とか何とか言ってる。よくわからないけど、そういう宗教なんじゃないの？」

その時の事を思い出しながら言っと、リオー二は軽く目を見開いた。

「…象徴……？ 黒が、か？」

「え、うん。自信満々に言ってたから、聞き間違いじゃないと思うけど」

「…他に何か変な所はないか？」

「え？ そうだな…あ、何でか知らないけど、人目を避けてるよ。人が来たらすぐに逃げるし。だから余計に怪しいんだけどさー」

「ほう、そうか」

感心したのか、呆れたのかよくわからない事を呟いて、するりと

顎を撫でる。

それはリオ―二が何か考え事をしている時の癖だ。彼等の奇行にどんな思ふ所があったのかはわからないが、何事か気になる事があったのだろう。

こつという時は正面から何だと問い質しても、のらりくらりとかわされるのがオチである。何事も豪快なリオ―二だが、重要な事は意外なほど秘密主義なのだ。

怪訝に思いながらも、ディステイエルもエミリオも追求はしなかった。明言出来ない段階で発言を避けても、知らせる必要があると思えば必ず話してくれる。リオ―二はそんな人だ。

「ともかく、そんな妙な連中に絡まれているとは穏やかじゃないな。チビ、これから外を出歩く時は、必ず人のいる所を選んで歩くようにするんだ。わかったな？」

「いいけど、でも町の人に迷惑じゃない？」

変な宗教団体だと頭から信じているエミリオは、あの妙な布教が周囲に及ぶのを心配して、むしろ抜け道のような場所ばかりを選んで歩いていて。

ずっとここで生まれ育ったような感覚で日々を暮らしていても、心の何処かで自分が『新参者』という意識があるのだ。出来れば、自分の事でマリオーゾの人達に迷惑をかけたくはない。

そんな行動を見透かしたのか、ディステイエルが疲れたような顔をして突っ込む。

「遠慮なんてしている場合ですか。今は他人よりも自分を心配しなさい」

「その通りだ、チビ。…と言うかだな、お前に何か起こる方が迷惑だろうが。ここの連中は揃いも揃って、妙に情に厚い奴等ばかりなんだぞ。もし、目と鼻の先でお前が攫われてでもしてみろ」

「そっか、責任感じるか」

マリオーゾの知り合いの顔を思い浮かべ、エミリオは納得した。確かに彼等は皆、情に厚い、否、熱い。マリオーゾのような規模

の街で、隣近所レベルを超えて住人同士がやたら連帯感を持っている場所もそうそうないだろう。

特にバザールを仕切る商人連は、鉄壁の連帯を誇っている。何処かで問題が起こっても、すぐさま対応出来るのが彼等の自慢だ（単に地獄耳だという話もあるが）。

「本当は当然出歩かない方がいいんだろうけどな。いつもうるちよろしているお前の姿が見えないと、今度はすわ病気か、怪我かと人が押し寄せかねんし」

「それ以前に一箇所に閉じこもっていられる性格じゃないですしね」「だよなあー」

やれやれ、とため息をつく保護者達に、少々ムツとしつつも、エミリオはその言葉を否定出来なかった。

実際、無期限で閉じこもれと言われても出来そうにない。別にこの居心地が悪い訳ではないが、動き回っている方が性に合うのだ。ともかく、具体的な解決策はなかったが、相談した事で気は楽になった。何だかんだ言いつつも、今後二人とも周辺の異変に気を配ってくれるはずだ。

何かあった時、この二人がとても頼りになる事をエミリオはよく知っている。

他の街と比べれば、マリオージはとてもではないが信心が篤いとは言い難いものの、やはり教会はそれなりに影響力を持っている。

そんな彼等が睨みを効かせるようになれば、きっとあの妙な集団も活動しづらくなるだろう。

この日、話はこれで一段落し、エミリオとリオーニは夕食作りにデイスティエルは庭の手入れに向かった。

…そこで話は終わったと、彼等は信じて疑いもしてなかったのである。

第113093回魔族会議

教会にて血の繋がらない三人が就寝前にのんびりと団欒だんらんしている頃。

夕闇に紛れるようにして、一つ、二つと闇よりも濃い影が、人ひと気の減ったマリオーズの一角へと集まりつつあった。

今宵は新月。

闇の力が最も濃くなるこの日、世界中の魔族が集う魔族会議が開かれようとしていた。

魔王亡き後に行われるようになって、今回で実に113093回を数えるこの会議では、ここ数年同じ事ばかりが議論されていた。

「…フツ、今日も駄目じゃったな……」

「一体何が良くないのでしょうかねえ。我々は誠心誠意を込めて語りかけているのですが」

「うむう……」

「それにしても、今日の怒鳴り声はステキだったわー。流石は魔王様ね！」

「本当よねー 子供なのにあの迫力！」

…そう、千と数百年もの長い年月の果てに誕生した新たな魔王についてである。

最初は生まれたばかりの魔王の教育方針から始まり、次に魔王成長後の補佐をどうするかを話し合い、やがて行方不明である事が発覚してからはその行方の探査にと内容は推移していった。

現在は、ようやく見つけた魔王をどうやって本来の場所に帰ってもらうか、である。

「おのれ、聖主の犬めが！ よくも我等の王を……！！」

「あのような穢けがれがあつては、我々の言葉も届かぬだろう。困った

事だ」

行方不明だった魔王発見の報告が齎もたされた時は、彼等はそれこそ泣いて喜んだのだが、所在地が判明した瞬間、衝撃が走った。

よりにもよって、魔王は敵の最たるものである、聖主を崇める教会に保護されていたのだ！

当事者がいない状況でその経緯を知る事は出来なかったが、想像する事は簡単だった。

魔王を黒き母の元へと届けるはずだった彼等の同胞が、教会によって討たれ、連れていた魔王は教会の者が『人間の子供』として保護したのだと彼等は勝手に結論付けた。

結果として代表となった魔族は、魔王を守り切れなかったものの、聖職者と勇敢に戦って散った者と一部魔族に英雄視される事となったが、事実は少々違った。

彼はあえて教会関係者がいないような辺境を選んで進んでいたし、戦った末に敗れ去った訳ではなく、村の近くを通りがかった所をたまたま村人に見咎められ慌てて逃げていた所を、その場にいた某聖女に一方的に調伏されてしまったに過ぎない。

彼にとってその遭遇は不運としか言いようがない。反撃もろくに出来なかったのも仕方がない事だった。

何しろ、いくら魔王と言っても人の赤ん坊と変わらない存在を抱えた状態だったのだ。魔王に万が一の事があれば大変である。

普通の人間相手でも赤ん坊を庇いながら、一体どれだけ戦えたものか。しかし無駄に自尊心の高い魔族達は、その可能性を最初から黙殺した。

それはさておき。

結果として黒き母の元で魔王として育つはずだったものが、よりにもよって教会の聖職者によって『清く正しく』育てられてしまった訳だ。

彼等はそのせいで自分達の元へ戻って来ないのだと信じて疑っていないかった。

そこが魔族の悲しさというべきだろうか。人と常識の異なる魔族故か、彼等自身の胡散臭さが原因だとは、誰一人思いもしていなかった。

やがて血気に逸った者が吼える。

「今のやり方は手ぬるい！ もつと本能に訴えかける手段にすべきではないか！？」

「そうだ！ いっそ、この街を焼いてしまつてはどうだ？」

「住民を皆殺しにするのは」

「呪いをかけるか？」

「狂わせてしまつのもいいわね……」

いい加減に鬱憤^{うつぶん}が堪りつつあった彼等の多くが、すぐに賛同の声を上げる。だが、高まつた熱を冷ますような一喝が彼等の一角から上がった。

「ならぬ！ 取り返しのつかぬ事になつても良いのか！？」

その声の主は、一際年老いた魔族だった。

その場にいた魔族の視線が、一斉にその小さな姿に集まる。

「何故だ！！ 我等の言う事に王が耳を貸さぬのは、自分が人間と同じだと思い込んでいるからではないのか！！」

即座に噛み付く言葉に、その魔族は険しい顔のまま首を振った。

「ならぬ。人と思つていらつしやるからこそ、そのような手段は出来ぬのじゃ」

「どういう意味です、老？」

「そうよ、訳わかんない。その辺の宗教団体みたいな扱いされるの、もうアタシ、耐えらんないわよう！！」

「皆殺しだ！ 血の匂いに触れれば、魔王も目が覚めるに違いない！！」

「そうだそうだ！！」

魔王が生まれ、ようやく世界の覇権を取り戻せると思つた矢先に、見失つてから数年。その間に降り積もつた不安は、魔王が見つかった事で解消されたはずだった。

だが、いざ迎えに行けば適当にあしらわれ、こちらに戻るような様子がないばかりか気の毒そうな目を向けられた事は、彼等を追い詰めるのに十分な出来事だった。

彼等にも、自尊心というものがある。

かつては人に恐れられ、姿を見ただけでも逃げ惑うのが普通だった。それが、今では逆にこちらが逃げねば、最悪駆逐されてしまう。それがいかに屈辱的な事か。

魔王さえ、いれば。

長い事、彼等はそればかりを考えていたのだ。魔王さえいれば、また元のように闇の世界を取り戻せると。

実際には力を合わせれば、今でもマリオージ程度の街ならを一夜にして滅ぼす事も不可能ではない。

そうした事をしなかったのは、教会側との全面対決になった時、彼等の方が圧倒的に不利である事がわかってからだった。

まだ、世界は光の方へ傾いている。すなわち、世界そのものが彼等の敵なのだ。

かつての力の十分の一程の力しか持たない彼等は、結局の所、自分の身を守る事で精一杯だった。

「魔王さえ目覚めれば、教会も恐れるものではない!!」

「殺せ! 殺せ!!」

その場は異様な熱気を帯びた空気に包まれ始める。だが、やはり年老いた魔族はそれを制したのだった。

「やめておけと言っておるだろう。よく、考えてみい。今の王は、まだ覚醒しておらぬのだぞ?」

「わかっている! だからこそ、人の血で……」

「最後まで聞け。まだ目覚めておらんという事は、人間と変わらんという事だろう。精神だけでなく、身体もな」

「……!??」

ようやく何を言わんとしているのか理解した他の魔族達は、ぎよつと息を飲んだ。

つまり、今の魔王はあらゆる意味で非力という事なのだ。見境なく彼等が暴れた場合、その余波で怪我を負う可能性もあるし、最悪命に関わる事もあるという訳だ。

さあつと頭から水をかけられたように青褪めた同胞達をぐるりと見回し、老いた魔族はふむ、と頷いた。

「しかも、あのように教会の人間がすぐ側にいては、我等が赴いてお守りする事も出来ん。下手にあの方が魔王である事を勘付かれても面倒だろう。この街程度、滅ぼすのはさして難しい事ではないが、その事を忘れてはなんののでは？」

「だが…、では老はどうしたら良いと考えているのだ」

困惑を隠せない魔族の一人が尋ねると、老いた魔族はニイつとその口を歪めるようにして笑った。

「そうさなあ…まあ、やはり自覚していただく事から始めるべきではないか？」

「…自覚？」

「今の王は人と変わらぬ。ならば、人を墮落させる方法を試してみるのだろうか」

「確かに…今の王はその辺の人間の子供と変わらんが……」

「おいたわしい……」

彼等は深くため息をつく、本来いてはならない場所にいる彼等の王を想い、今度こそはと固い決意を固めるのだった。

+ + +

一方、その頃彼等の王は。

「あはははは！！ 世界が回ってる！！ 八八八八八！！ 面白れ〜ッ！！」

「リオーニ聖父！？ 子供に何を飲ませてるんですかー！！」

「え？ ……酒？」

「…逝つて来い、この腐れ聖父がー！！」

「うおおー！？ お、落ち着け、メリーー！！ チビが寝付けないって
いうからだな…っ、」

「問答無用！ 第一、メリーじゃありません！！ いい加減、その
名を呼ぶのはやめて下さいと何度も言っておいたはずですよー！！」

「アハハハハハ！！ おっちゃん、ファイトーー！！」

「笑い事じゃねえ、チビー！！ ちょ、ま、待てっでメリー…っ、ぎゃあー！！」

リオーニに寝酒を飲まされて高笑いをしていた。

エミリオ少年の困惑（１）

翌朝。

今日もマリオーズは雲一つない快晴だった。

窓からカーテン越しに降り注ぐ清浄な朝日の中、寝台の上で呻く（うめ）エミリオの姿があった。

（うゝゝあゝゝゝ……あ、頭、痛えゝゝゝゝ）

頭の中がグラグラする。もう起きねばならない時間なのに、どうしても起き上がれない。

（き、気持ち悪い……何なんだ、これ……？）

キリキリと痛むこめかみに、むかつく胃。妙に咽喉が渇くし、身体もだるい。

あまりの苦しさに、自然と眉間に皺が寄る。

言うまでもなく二日酔いの症状だったが、わかる人間には一発でわかるそれも、十歳の少年にわかるはずもなく。

（オ、オレ……もしかしたら何か命に関わる病気！？）

いまだ嘗てない苦しみに、突拍子もなくそんな結論に達したエミリオは、かっと目を見開きぶるっと身を震わせた。

（い、嫌だ、そんなの……！！）

今までも、祝い事などでワインを少し口にする事はあったが、寝酒にするような酒精の強いものを飲んだ事はなかった為、それが原因だとまでは思いつけないエミリオだった。

ついでに軽く記憶も飛んでいて、いつベッドに入ったのかさえも覚えていない。

「いやだ……」

口に出して呟き、ぎゅっと敷布を握り締める。

冗談ではなかった。まだ、十年しか生きていないのに。第一、まだ自分はやりたい事がたくさんあるのだ。

（そうだよ……、まだオレ、世界一の大商人になってないじゃんかー

！)

五年の月日を経て、幼い夢はさりげなくスケールアップしていったらしい。

その時、すぐ近くからリンゴーンと大音響の鐘の音が鳴り響き、エミリオは頭を抱えてぐお、と呻く事になった。

リオーニが日の出の鐘を鳴らしているのだ。

エミリオの部屋は宿房（聖所とは区別してこう呼ばれる）の三階、元々物置だった屋根裏の為、鐘楼に比較的近い。

いつもならうるさいだけの鐘の音が、今は凶器と化していた。

朝は八回、夜は六回。二回分多いだけ、その鳴り響く時間は長い。鐘が余韻を漂わせながら鳴り終わった頃には、エミリオは悶絶寸前だった。

（…あ、あたま、が……われそう……）

ぐらぐらする頭を抱え、頭痛と戦う事しばし。次はコンコン、とドアを叩く音がした。

「…エミリオ、朝ですよ。起きなさい」

廊下から聞こえてきたのは、ディスティエルの落ち着いた声。

いつもならとつくに起き出しているはずの自分が起きて来ないので、起こしにきてくれたのだろう。

聖所の朝は忙しい。

リオーニ一人だった頃は聖所として機能していなかった所だが、ディスティエルの働きにより機能するようになった。

その為、今ではマリオーゾでも特に信心深い人々が、わざわざ聖所まで朝の祈りを捧げに来るようになっていた。

その数は決して多くはないが、疎^{おろそ}かに出来るはずがない。

何より、マリオーゾ唯一の聖所の、やはり唯一の聖女であるディスティエルがそんな事を許すはずがなかった。

日の出の鐘が鳴ると同時に門扉を開き、信者達がいつ来ても良いようにした後は、聖主像を清め、聖水の用意をする。

求めがあれば、聖言を唱えて人々を祝福するし、懺悔を聞く事も

ある。

そんな慌しい中でわざわざ声をかけてくれたのだ。しかし、今のエミリオには反応を返す事が出来ない。反応がなければ寝ていると思うに決まっている。

ドンドンドンー！

今度は激しく扉を叩く音に襲われる事になった。ようやく先程の鐘の余韻から抜け出しそうだったのに、再び頭痛がぶり返される。

（あああああー！！ 頭がああああー！！）

頭を抱え込みながら涙目で扉を睨み、聞こえていると反論したい所なのに、咽喉がカラカラで声が出ない。

こうなると、いつそ起きろ！ と怒鳴り込んで来てくれた方が楽である。

「エミリオ！ もうとつくに日の出の鐘は鳴ったのですよ！？ さつさと起きなさいー！！」

叩く音に加えて、何処となく苛立ちと声量の増した声まで加わって、音の凶器は容赦なくエミリオを打ちのめす。

（わかってるって、デイス~~~~！！ だからもうちょっと、声を抑えてくれよ……）

うーうー、と寝台の上で呻きつつ、必死に耐えていると、ようやく痺れを切らしたデイスティエルがバン！ と一際大きく音を立ててドアを開いた。

「エミリオ！？ ……？」

柳眉を逆立てたデイスティエルが拳を固めて部屋に押し入ってくる。そこでようやく寝台の上で身悶えるエミリオの只ならぬ状態に気付き、その目を丸くした。

「…どうしたのです、エミリオ。具合でも悪いのですか？」

自分が悪化させたとは夢にも思っていない口調での問いかけに、エミリオはがつくりと頭を枕に沈ませた。

+ + +

「二日酔いだな」

「は……？ ふつかよ……？」

頭が痛い、気持ち悪いではよくわからないからと、午前中は寝ていても良いという許しを貰ったエミリオに対し、朝の勤めを終わらせたりオー二が下した所見はそんなものだった。

一体、どんな重病かと思っていたエミリオは、思いっきりその目を丸くした。

その病名（？）は聞いた事がある。聞いた事はあるけれども。

「……二日酔いって、酒飲みがなるもんじゃなかったっけ……？」

記憶が飛んでいるエミリオが、騙だまされるもんかと胡散臭そうな目で問い返すと、リオー二はけろりとした顔で答えた。

「だってお前、昨日飲んだじゃないか。舐める程度にしとけ、って言う前に、グラスでぐいっと」

「はあ？」

「……もしかして、覚えてないのか？」

明らかに記憶にございません、という顔をするエミリオに、リオー二は自分のした事を棚に上げて呆れた目を向けた。

「『酒は飲んでも飲まれるな』だぞ、チビ？」

「何を偉そうに子供相手に余計な説教をしているんです、リオー二聖父」

冷やかかな言葉に、リオー二の顔が引き攣る。

「メ、メリー！？ い、一体いつからそこに」

「たった今です。ついでに『メリー』ではないと昨日も言ったはずですが？」

リオー二の手が無意識に後頭部に向かう。そこには昨夜、麵棒に受けた一撃によるこぶがあった。

「そ、そんな事言っても、お前が俺の生徒だった時は『メリッサ』

だっただじゃないか」

「まだ聖名さえ頂いてなかった頃の話を、いつまで引き摺る気ですか！」

二日酔いに苦しむ子供の前で、どうでも良い事で口論し始める保護者達を呆れ顔で見つめ、エミリオは昨夜の事をぼんやりと思い返していた。

確か、寝台に入っても何だか寝付けなかった記憶がある。

何というか、ざわざわと落ち着かない気分というか、神経が昂ぶっているような　　そう、まるでカーニバルの後夜祭の後のような気分だった。

血が騒ぐとでも、言つのだろうか。

寝つきも寝起きも良い方なのに、何故そんな状態になったのかはよくわからない。

ごろごろと何度も寝返りを繰り返して、それでも一向に睡魔が訪れてくれなかったので、水でも飲むかと起き出して　　。

そうだ、まだ起きていたリオーニに眠れない、と話しかけた。

それならとリオーニが差し出したグラスに入っていた無色透明な液体を深く考えずに口にして　　そこから記憶が途切れている。

という事は。

「おっちゃんのせいかな!？」

思わず声を上げ、自分の上げた声でぐわんと頭に衝撃を受け、ぐううと寝台に沈み込む。

そんなエミリオの今更ながらの反応に、まだ何か言い争っていた二人がぴたりと口を閉じた。

「…えーあー、まあ、遠因はあると思うが」

やがてぼりぼりとこめかみを掻きながら居心地悪そうにリオーニが肯定すると、横から冷ややかにディスティエルが訂正を入れる。

「遠因?　原因の間違いでしょう。あんな強い酒を子供に勧める事自体間違っています。しかもグラスで」

「丁度飲んでいた所だったし、わざわざ別の入れ物を出す程でもな

いと思っただよ。それに、寝るにはあれが一番確實じゃないか！」「聖父ともあろう者が、自分の物差しを他人に押し付けるんじゃないやありません！」

再び言い争い始める二人の言動から、どのような状況だったかを推測したエミリオは、本当に自分を襲った苦痛が二日酔いである事を理解した。

話には聞いていたが、よもやこれ程のものとは。

教会が飲酒に関しては何故か特に制限を設けていない為、リオー二もよく飲んでいるのだが、彼はザルと言うよりは底なしで、二日酔いの醜態など全く見せない。

そのせいで、酒に対しての認識が甘かったエミリオは、もう二度と酒なんか口にするものかと心に誓った。

あと四、五年もすれば、子供から半人前に昇格して大人達の仲間入りをするが、こんなに苦しい思いをしてまで飲みたいとは思えない。

そんな風に十歳にして禁酒の誓いを立てたエミリオだが、後にそれがあっさりと覆される事になるのは また別の話である。

エミリオ少年の困惑（２）

二日酔いと言っても、それ程に重度のものではなかったのか、それとも若さ故の回復力か。エミリオはその日の午後には動き回れるようになっていた。

規模の割りにたった二人しか聖職者が存在しない為、雑用は基本的にエミリオの仕事だ。

雑用と言っても、生活を維持するのに必要な仕事である。今日もエミリオは、まだ微かに頭痛の残る頭のまま買出しに出かけた。

もうそろそろ祭壇用の蠟燭ろうそくがなくなる。数日前に磨きに出した燭台くたいを取りにも行かねばならないし、食材もいろいろ買い足しておかねばならない。

昨日の事もあるので、今日はひたすら人通りの多い場所を歩く事にしたが、頭痛が残っている状況で、知り合いに会う度に笑顔で応えるのはいささか億劫おっくうな事だった。

かと言って、調子が悪い様子など見せれば心配されてしまうのは目に見えている。

正直に二日酔いだと言えば、ただの笑い話で済む話かもしれないが、笑われる側はたまったものではない。それに下手したらこれから先、事あるごとに蒸し返される。

結果として、無意識に人通りの少ない方へと足が向かう。

最初こそは例の集団がいつ出て来るかと身構えていたが、今日に限ってその姿を見せず、エミリオの警戒は次第に薄れていった。

昨日の今日だから、教会側から何かあったとは思えない。おそらく流石の彼等も、子供の自分を勧誘するばかりしさに気付いたのだろつと軽く考える。

蠟燭を買い、燭台を受け取り　そこまでは順調そのものだった。しかし、次は食料とディスプレイに頼まれた薬草の苗を買いに行こうとバザールの方へ足を向けた時だ。

微かな呻き声うめのようなものが、何処からともなく聞こえてきた。
何だろうと声の聞こえた方へ反射的に目を向けると、建物の隙間
のような細い路地うすくまに、人が蹲うすくまっているのが見えた。

(…!!)

明らかに座り込んでいるのとは様子が違う。異変を感じ取り、大
変だとは思ったものの、その人物の格好が例の集団を連想させる黒
い布を被った姿である事に躊躇する。

しばし考え込み、エミリオはそのまま見なかった事にしようとし
かけた。このマリオーズで、黒い服自体滅多に見る事がないからだ。
…が、もしかしたら旅人かもしれない。それなら他と違う格好を
していても不思議ではないし、それに本当に気分が悪い人かもしれ
ない。そう思い返して足を止める。

困った人がいたら助けなさい ディスティエルから叩き込ま
れた道徳心（刷り込みとも言うつ）が疼うずいたからである。

それにもし、例の集団ならば例の派手な仮面をつけているだろう
し、そもそも一人きりという事はないはずだ。ざっと周囲を見回し
ても、その人物以外に怪しい人影は見当たらない。

自分も必ずしも元気いっぱいとは言えない状況だったが、エミリ
オはその人物の前に歩み寄り、驚かせないように注意を払いながら
声をかけた。

「あの…気分でも、悪いの？」

「…え、ええ……」

少し間を置いて返った来た声は、弱々しい若い女性のものだった。
よもやそんなに若い人間だったとは思わず、エミリオはぎょっと
驚き、慌てて身を屈めて顔を覗き込むと、布の隙間から見えた小造
りの顔は蒼白で唇も青褪めている。

その生気のないぐったりとした様子に、エミリオの方も青くなっ
た。

「お姉さん、だ、大丈夫!？」

見るからに大丈夫そうではないが、思わずそう尋ねてしまう程に

動揺したエミリオへ、女性は苦しそうな顔を微かに緩めて微笑んでみせた。

「あ、ありがとう…大丈夫、少し…胸が苦しいだけだから……」
答える声は弱々しい。エミリオはますます慌てた。

「で、でも…あ、医者呼んで来ようか!? この近くに一人いるから!」

見るからに大丈夫そうでない様子で、しかも胸と言えば心臓である。心臓と言えば、命に関わる程に大事な所で。

そこが苦しいなんて、きつと大変な事に違いないと考えたエミリオは、早速医者を呼ぶべくその場から駆け出そうとした。

よく考えると最寄の医者は外科が専門だった気がしたが、この際
いないよりはマシだろう。

ところがその前に今にも倒れそうな様子からは考えられない素早
さで、女性の冷たい手がエミリオの手首を掴んでいた。

「え? あ、あの…っ?」

「行かないで…本当に、大丈夫だから……」

「でも、あの、苦しいんじゃない?」

「本当に大丈夫よ…少し休めば治まるから……。一人でいる方が、
不安なの。ここ…人が通らないから……」

確かに大通りから少し外れたこの道は、昼間でも人通りが少ない。
苦しい時に一人ぼちなのは確かに心細いかもしれない、と納得
したエミリオは、そのまま女性の横に腰を下ろした。

逃げると思われているのか、単に不安なのか、しっかりと手首を
握られてしまっているからでもあったが。

流石に十歳にもなると、普通の子供でも母親と手をつなぐような
事は減ってくる。

ましてやデイスティエルはそうした並みの親子のようなスキンシ
ップを重要視するような人ではなかったので、手首を掴まれている
だけでもなんだか落ち着かない。

しばらく悩んだ末、エミリオは意を決して口を開いた。

「あの、お姉さん」

「……なあに……？」

「手、離してくれる？ そんなに心配しなくてもここにいるからさ」
「ああ、ごめんなさい……。行ってしまうかと思って、つい、必死で……」

素直に手が離れた事にほっと安堵したエミリオだったが、やがてまたその表情を困惑したものに変わる事となった。

いつの間にか、横にいる女性の身体が凭れもたかかってきているのだ。ふわりと、花とは違う甘い香りがする。重くはないが、さらに居心地は悪さは悪化した。

「あ、あの……お姉さん」

「どうしたの……？」

「何でそんなに、その、くっついて来るのさ？」

「あら……ごめんなさい、凭れていると楽で……。嫌だった？」

「……いや、いいけど」

弱っている人に楽だと言われたら嫌だとは言えない。

結局黙って凭れかかられるままになっていると、やがてエミリオは額に嫌な汗をかきながら眉間に皺を寄せる事になった。

「お、お姉さん……」

「なあに……？」

「……何でオレ、押し倒されかけてるのかな？」

「ふふふ……気のせいよ」

「気のせいじゃないって！」

声から先程までのか細さが消えた事で、ようやく今までの演技だったのだ、と気付いた時には、エミリオは路地の中に引きずり込まれ、女性に覆い被さられていた。

上から見下ろしてくる顔はまだ青白いが、どうやらそれが元々の顔色だったのだと黒目がちの瞳がまるで獲物を見つけた肉食獣のように爛々と輝いているのを見て気付く。

「大丈夫よ、怖くないから」

「いや、あの、十分怖いです」

「ふふ…最初は誰でもそう言うのよ」

（…最初ってナニ？）

自分が今、どういう状況にあるのか、これから何をされようとしているのか、幼い彼はいまいち把握が出来ていなかったが、目の前の女性が妙である事は十二分にわかる。

女に手を上げるのは最低な男のする事だ、と散々養い親二人に言われているのだが、こういう場合はどうしたら良いと言うのだろうか？何となく、このまま放置していたらよくない気だけはビシバシと感じているのだけれども。

エミリオが行動を迷っている間に、何がしたいのか、女性の指が勝手にエミリオの服を脱がせにかかる。冷たい指の感触にぞわりと鳥肌が立った。

（何がなんだかわからないけど、絶対にやばいと思う！！）

男相手だったら、殴るなり蹴るなりして逃げればいいだけの話だが、相手はデイスティエルよりも若い感じの女性なのだ。

それに振り払いたくても、絶妙な位置に押し掛かれて、手足の自由がうまくきかない。

心底困り果てていると、女性が顔を近づけて来る。至近距離で覗き込まれ、その瞳が人と何処か違う事にようやく気付く。

何が違うのかと思い、思わず見返すとそのまま視線が外せなくなつた。

まるで深い穴を覗き込んだような、吸い込まれそうな目。

恐怖感を感じて目を反らそうとしても、冷たい手で顔を持ち上げられて再び目を合わせてくる。

のしかかる体が妙に柔らかい事に気付き、視線を外そうとしたついでに何となく視線をそこに向けた彼は、そのままその目を点にした。

先程まで黒い布の下に隠されていた身体。それがいつのまにかはだけ、上半身が露になっている。やけに白い。

彼女は布の下に何一つ身に着けていなかった。

(……………えーと……………寒く、ないのかな?)

もう少し齢を経っていたなら別の感想が出てきただろうが、冷静に物事を考えられる状況にないという事もあり、そうした知識がろくはない彼にはそう思うのが精一杯だった。

ふと、過去にリオーニからこういう人物の話を聞いた事を思い出す。

もつとも、それは『世の中には人にはおおっぴらに言えない趣味の人間もいる。本人が誰にも迷惑をかけずに楽しんでいるならそつとしておいてやれ。人の幸せはそれぞれだから』という話だったのだ。

その流れで、『人に迷惑をかける一例』として聞いたのだ。ついでにその話では男の場合だったのだが、女性の場合もあるらしい。

確かそういう人々を撃退するには良い言葉があると、リオーニが言っていたような(そしてその後、ディスプレイに半殺しにされていた)。そう…あれは確か。

「『小さい』?」

「…ッ!」

単に思い出した単語を口にしたただけだったのだが、その言葉は目の前の女性に予想以上のダメージを与えたいらしい。

「ひ、ひどい! よりにもよって、『小さい』ですって!」

このアタシの胸が小さいって言うの!? 淫魔一の美貌と肢体の持ち主と言われたアタシの胸を小さいいいいい!」

「へ? えつと…………?」

思わぬ効果に呆気に取られているエミリオを涙目で睨みつけ、女性性は怒りか悲しみか、ふるふると身を震わせる。

そのままようやくエミリオの上を退いてくれたと思うと、ばばつと目にも留まらない勢いで再び身体を覆い隠し、すつくと立ち上がった。

そして。

「魔王様の、ばかああああ！！　もう頼まれたって何もしてあげないんだからーッ！！！！」

そんな謎の絶叫を残し、泣きながら明後日の方角へ走り去ってしまった。

後に残されたエミリオは、半ば脱がされかかった状態で呆然とそれを見送り、はて？　と首を傾げた。

「ええと…今の、何だったんだろう……。それにしてもおっちゃんって、実はすごかったんだなあー」

言っていた通り、あの言葉で変な人は去って行った。

何故あんな言葉が有効なのはさっぱりわからないが、伊達にマリオーゾの聖所を任されている訳ではないんだなと感心しつつ、エミリオも立ち上がり、乱れた服装を適当に直すと残りの買い物を終わらせる為に歩き出した。

エミリオ少年の困惑(3)

結局、謎の集団にこそ遭わなかったものの、謎の女性のせいで今日もぎりぎりに教会へと帰り着いたエミリオだった。

一体あれは何だったのかという疑問は残ったものの、それでも何とか予定通りの買い物は出来たし、時間にも間に合った事でほっとしながらいつものように裏へ回ると、フレリアの妙な言葉で迎えられた。

「ヒドイ、ギャー、アタシトイウモノガアリナガラ！、ギャギャー！」

「…フ、フレリア？ どうしたんだよ、一体」

「ウワキモノ、ウワキモノ、ケギャー！！」

ギャーギャーと叫びつつ、羽をバタつかせ、その大きな嘴で突付こうとする。鳥と言っても、フレリアは結構大型の鳥だ。その嘴で突かれては堪らない。

「ウワキモノ?? …それ、どういう意味だよ……!? ……つて、痛ッ、痛いつて、やめろつてばフレリア！！」

今日は厄日だろうか。目覚めからして最悪だったが、わけのわからない事が多過ぎる。

何とかフレリアの突付き攻撃から逃れる事に成功し、げっそりと疲れ果てた気分になりながら、いつものように食材を置きに厨房に向かう。

一体、どうした事か。口うるさくても、あんな風にフレリアが攻撃してくるなんて初めての事だ。

(行いは悪くないハズなんだけど……?)

首を捻りつつ厨房の扉を開くと、今日の当番であるデイスティエルが夕食の準備に取り掛かっている所だった。

「ただいま、デイス」

「ああ、エミリオ。お帰りなさい。もう頭痛は大丈……?」

鮮やかな手つきでじゃがいもの皮を剥きつつ、顔をこちらを向けたデイスティエルは、そのまま怪訝そうな顔になった。

「…デイス？　どうかした？」

「エミリオ…今日、何かありましたか？」

「は？」

今度はデイスティエルまで妙な事を言い出し、エミリオは面食らった。

「何かって　　どうしてそんな事を聞くのさ」

「…ちよつと気になっただけです。例の集団の事もありますし…何もなければいいのです」

「そんな事を言われたら、こっちが気になるってば！」

昼間の女性といい、フレイアといい、デイスティエルといい、今日は女難の相でも出ているのだろうか。

何かあったかと言われたら、確かにあったとしか言い様がないが、どう答えれば良いのかエミリオにはわからなかった。

見も知らない女の人に路地裏に連れ込まれ、押し倒されて服を脱がされそうになりました　　なんて、何となく言いづらい。

確かに真昼間から素裸で、例の『変質者を追ひ払う良い言葉』で（泣きながら）逃げて行っただから、変な人なのは事実に違いないのだけれども。

そんな事を心の内で思っていると、困惑が顔に出ていたのか、デイスティエルが小さくため息をつき、仕方がないという様子で口を開いた。

「　　エミリオ、自覚がないのかもしれませんが…妙に化粧臭いですよ？」

「…は！？」

言われて、慌てて自分の袖を嗅いで見る。よくわからない。

次に胸元の布を持ち上げ同様に嗅ぎ、デイスティエルの言う通りである事がわかった、そのまま呆然と立ち尽くした。

この妙に甘ったるい匂いは、あの女性のものだ。花とは違う、い

かにも作られた感じの匂い。こんな匂いをつけて、自分は歩き回っていたのか？

今まで気付かなかった事も不思議だったが、それ以上にこんな匂いをさせてバザールをうるついでにしまった事の方がエミリオには衝撃的な事だった。

行った先々で、特に変な顔をされたりはしなかったけれど、それが単に言わなかっただけである可能性が高い。

そして一人から発した噂話が一気に広まるばかりか、尾ひれで足りずに胸びれや背びれまでついてしまうのがマリオーゾである。

明日バザールに行った時、一体どんな事になっているのか

エミリオの額に嫌な汗がじつとりと浮かんだ。

「おう、無事に帰ったようだな。…どうした、チビ？ 何だか顔色が悪いようだが……」

そこに昨日と同様、鐘楼から降りてきたリオーニが顔を見せた。

今日は夕食当番ではないが、エミリオを心配してか珍しく厨房に足を向けたようだ。

「お、おっちゃん……！ た、ただいま」

不意打ちの声にはっと我に返り、帰宅の挨拶を述べつつも、何となく後ずさって距離を取った。

ディスプレイですら気付いたのだ、リオーニが気付かないはずもない。案の定、何かに気付いたように軽く目を見開き、じっとエミリオを凝視してくる。

しばし、沈黙。

やがてするりと顎を撫でたリオーニがゆっくりと口を開いた。

「…チビ、お前……」

「オレ、無実だからっ！！」

「へ？」

先手を打って自分が望んでつけた匂いではない事を述べようとしたのだが、焦った結果、意味不明のものとなってしまった。逆に怪しんで下さいと言わんばかりである。

面食らって思わず首を傾げたりリオー二は、エミリオのその様子から何かしら感じ取ったらしく、仕方ないなというような顔で微笑んだ。

「まー、そういう事にしといてやるか。いくらガキでもお前も男だからなあ。興味を持つ気持ちにはわからんでもないが…ちーとばかり行くには早いんじゃないか？」

「は？ 行くって…??？」

今度はリオー二が意味不明の事を口にする。

思いつきり目を点にするエミリオに対し、その言葉に反応したのはそれまで黙って二人のやり取りを聞いていたディステイエルの方だった。

「…リオー二聖父？ 今、何を考えました…?」
心なしか温度が下がっている言葉に、リオー二の顔が笑顔のまま強張る。

目だけをディステイエルの方へ向け、その顔が不自然な微笑みを浮かべている事に気づくと、傍目でも血の気が引いてゆくのがわかる位の勢いで青褪めた。

しばし、居心地の悪い沈黙が漂い。

黙っていても良くないと思ったのか、やがてリオー二はしどろもどろに言葉を紡ぎ出した。

「えーと、いや、その…だって、なあ？」

…が、出て来た言葉と言えば、全く訳がわからないものだった。しかし、恐るべき事にそれでもディステイエルには通じたらしい。

彼女は包丁片手に、見ているだけでも背筋が凍りそうな冷ややかな笑みを浮かべた。

「リオー二聖父。後ほど、ゆっくり二人きりでお話したいのですが宜しいですね？」

「い!？」

「お返事は？」

「…は、はい」

これではどちらか師なのかわかったものではない。だが、取り合えずこの匂いについてはこのまま不問に終わりそうだ。

ほっと胸を撫で下ろし、手早く買ってきた食材などを置くと、不自然な笑顔で微笑みあう二人を残してそそくさと退散する事にした。やがて厨房から激しい物音と言い争う（？）声が響き、今日の夕食がいつもより少々遅くなった。

+ + +

その夜、エミリオが夢の中にいる頃。闇に沈んだ聖所の祈祷所で、何事か考え込むリオーニの姿があった。

いつになく真面目な顔で見つめる先にあるのは、夜の闇。新月の翌日だけに、空にあるはずのその姿はまだ何処にあるのかもよくわからない。

「聖主の託宣、ねえ……」

やがてぼそりと呟き、顔を前方にある聖主像に向ける。

剣を胸に抱き、背にはその聖性を示す大きな一對の翼。瞑目した顔は何処か中性的で、青年というよりは少年と表した方が相応しい容姿だ。

何処の聖所にも置かれているその像を眺めながら、するりと顎を撫でる。果たして何を考えているのか。

「……そろそろ、この似合わない服にも飽き飽きしていたしな。」

まあ、頃合だ。お前もそう思うだろう？ メリー」

顔は聖主像に向けたままりオーニが声をかけると、いつからそこにいたのか、宿房に続く扉の前にデイスティエルが姿を見せていた。

「デイスティエルです、と何度言わせる気ですか？」

苦虫を噛み潰したような顔のデイスティエルに、懲りないリオーニはハハハ、と明るい笑い声を上げる。

「仕方ないだろう。俺にとっては、お前は今でも教え子なんだから」

「…聖名を名乗る資格はないと？」

「いや、そうじゃない。お前も『聖女』って柄じゃないだろ、という事だ」

「……」

反論を諦めたのか、それともその通りだと思ったからか、デイスティエルはその言葉には軽いため息で返した。

その内、デイスティエルもリオーニに倣うように聖主像に目を向ける。

「疑っていた訳ではありませんが…『託宣』は正しかったようですね」

次いで紡がれた言葉は、いつになく暗いものだった。対するリオーニもまた何処か神妙な顔になる。

「まだわからんさ。たとえ正しいとしても、元々それを阻止する為に、俺達はここにいるんだろう？」

「…そうですね」

頷きつつも、やはり浮かかない顔のデイスティエルに、リオーニは苦笑を浮かべた。

まだ彼女が彼の『教え子』だった頃を思い出す。

あの頃は世渡り下手で（これは今も変わらないようだ）、信仰心こそ高かったが口を開けば敵ばかり作り、そしてそれをまったく気にもかけないような少女だった。

それが、随分大人しくなったものだと思う。

十年という月日と、養い子の存在によるものに違いない。実際、エミリオという少年は頑固者の少女だった彼女を変えるだけの影響力を持っているように思われた。

少なくとも師として接していた頃、リオーニは頑なな彼女の笑顔を見る日が来るとは思っていなかった。マリオーゾで再会した時、養い子に向ける微笑みに心底驚かされたものだ。

素直で明るく、いつも元気で　だが、そんな彼にどうやらよくないものが付き纏いつつあるようだ。夕刻、エミリオがつけてき

た残り香。あれは化粧の匂いなどではない。

エミリオだけではない。このマリオゾの町自体に、暗い影が見え隠れしている。

(…だが、まだ尻尾が出ていない)

事が事だけに大々的に動くわけには行かない。それは教会の総本山側からもうるさく言われている事だ。つまり、今は待つしか出来ない。

「さあ、俺達もそろそろ寝よう。また明日も早いからな」

リオーニは座っていた椅子から腰をあげると、重苦しい空気を払うように殊更明るく口を開いた。

第113094回魔族会議

リオーニとディスティエルが、何やら神妙に話している一方で、今夜も魔族達はマリオーゾの片隅に集い、会議を開いていた。

暗闇に溶け込むように身を寄せ合い、話し合うのはいつも通り。だが、今日は会議というには少々殺伐としていた。

「やっぱり失敗だったじゃないか!？」

「だから言わん事じゃない」

「それで…当のグリディエーディは？ 姿が見えないようだ」

「『魔王様にあんな仕打ちをされたらもう生きてゆけない!』と言つて、泣きながら故郷に帰ってしまったみたいです」

「おお…何という事だ」

「…狙った獲物は百発百中で陥落させる淫魔の女王も、流石に魔王相手では駄目だったか……」

「何が『人を墮落させる方法を試してみるのはどうだ』だ! どう責任を取られる気だ、老よ!!」

…などと、今回の計画を持ち出した魔族を口々に糾弾する。きゆうたん

対する老いた魔族は、しかし特に気にした様子もなく、軽く首を傾げた。

「ぬう…おかしいのう? 色仕掛けなら変な警戒心も抱かせないと思うたのだが」

「おかしいのう、じゃないだろう! 老の計画で、一人の前途ある魔族が自信喪失してしまったのだぞ!? どう責任を取られる気だ!」

「だから最初から言っている!! 手ぬるいと!!」

実際には手ぬるい以前に、方法自体が間違っていたとしか言い様がないのだが、彼等にはその辺りの認識がなかった。

今の魔王の身体が人の子と変わらない状態だとはわかっているものの、その中身も同様に普通の十歳の子供に過ぎない事に気付いていないのだ。

何しろ、今の魔族の多くはかつて世を支配していた先代の『魔王』を直接知らない者ばかり。

新たな魔王が生まれ落ちたその時も、人の赤子にあまりにも近い事に疑問を感じはしても、積年の願いが叶った事ばかりを喜び、さしてそれを重要視してはいなかったのだ。

「やはり光の穢れが強すぎるのではないのか？　いつまでも我等の『言葉』をまともに取り合って下さらないのはそのせいでは？」

元々、魔族の『言葉』は人の言語とは異なる。

人に近い容姿を持つているものは極限られた一部でしかなく、大半は異形そのものの姿だ。当然、声帯も言語を話すようには出来ていない者もいる。

そんな異形同士でも言葉が通じるのは、彼等が『魔族』という共通点を持っているからだ。

魔族の言葉は魔族の耳があって初めて、明確な意志疎通が可能な言語なのだ。人型に近い魔族は人語を話す事が可能だが、特殊な波長をもつそれは信仰心が高いほどまともな言葉に聞こえない。

逆に言えば、そうした特殊な言葉だからこそ、使い方によって人間に恐怖心を植え付けたり、幻惑したり墮落へ導いたりする事も可能なのだが。

「おのれ、教会め……！！」

「やはりこの町を滅ぼしてしまうべきではないのか？　邪魔な人間どもさえいなくなれば我等の言葉にも耳を傾けて下さるに違いない」

「ああ、幸いこの街には聖職者は二名しかいないようだ。増援さえ来なければさして難しい事ではないぞ」

「だが、魔王様に余波が及ぶ可能性が……」

「そんな事を言っている場合か！！　仮にも魔王だ、むしろ身の危険が及べば、否が応にも魔王として目覚めるのではないか！？」

「おお、なるほど……！」

目の前にいるにも関わらず、なかなか彼等の方へと傾かない魔王に、彼等は苛立ちを隠せなくなりつつあった。

世界中を探し回り、やつとの思いで魔王を見つけ出してから、もう十日は過ぎる。

昨日が新月で、彼等の力が最も高まる日だった。月が確かに姿を見せる、明日以降にはまた力が弱まってゆく。

事を起こすならば、明日の夜までがぎりぎりという所だろう。もしくはまた新月が巡ってくるまで待たねばならない。かつてはそんな必要がなかった事実が、また彼等を追い詰める。

今まで待つていられたのだから、一月二月くらいは待てそんなものだったが、流石に千年を越す長さになると、もはや待つていられないらしい。

「ええい、離せ！　このような町、焼き尽くしてくれるツ！！人間どもの恐怖や苦痛で、魔王としての本能を目覚めさせるのだ！！」

「早まるな！　火など使つては、王の身にも危険が及ぶだろう！！」

今にも血氣逸はやった一部の魔族が飛び出してゆこうとする所を、周囲の魔族が何とか押し留める。しばらくあちらこちらでそんな押し問答が続く内に、一人の魔族がそうだ、と声を上げた。

「魔王様に危険が及ばなければ良いのだ！」

何を今更、という目が彼に集中する。

一瞬、その視線にたじろいだ彼は、しかしすぐに周囲にその思い付きを訴えた。

「同胞よ、この町を焼くのはしばし待つのだ！」

「待つのは構わんが……だが、もうまどろっこしい手段は面倒だぞ」

胡散臭そうなものを見る目を彼に向け、強硬派の魔族が呟く。すぐにその周辺でその言葉に賛同する声が上がった。

「訴えかけても駄目、誘惑も効かぬ　　本当に他に良い手でもあ

ると言うのか？」

「ある」

きっぱりとした言葉に、おお、とどよめきの声が上がった。その声に勇気付けられたように、まだ若い魔族は自身の考えを述べた。

「要は、魔王様の御身に危害が及ばねば良いのだろうか？　なら、話は簡単だ。魔王様の身の安全を確保してから、この町が滅ぶ様を見て頂けば良からう？」

「確保と言うが…どうやって」

「決まっている。　少々乱暴な手だが、元々考えていた手段を使えばいいのでは？」

「！！」

その言葉にその場にいた魔族達ははつと目を見開く。

一度失敗した事もあり、また覚醒は自発的なものが望ましいだろうという一部の意見から使わなかった手段　それは確かに今の状況には適していた。

「そうか、そうすれば」

「うむ、それなら魔王様の御身も安全だ」

「…決まりね」

ようやく意見の一致を見た彼等は、にたりと邪悪な笑みを交し合った。

今度こそ成功するに違いない。彼等の意気は一気に上昇する。

「　　見ているがいい、人間ども。明日は魔王復活の日だ……！」

くぐもった魔族達の不気味な笑い声がマリオゾの夜の闇に響き渡り、そして消えた。

+ + +

…一方、その頃彼等の王は。

「…むにゃ、さ、酒は嫌だつてば……！ うーんうーん」

魔族達がそんな計画を話し合っているなどつゆ知らず、何だか良くない夢を見て魔^{うま}されていた。

エミリオ少年の受難（１）

昨晚、酒瓶を抱えた人々に追いかけられるという、何とも微妙な悪夢を見たエミリオは、いつもより早く目を覚ました。

まだ日の出の鐘も鳴らされていないが、寝直す程ではない。エミリオはすっきりしない気分を振り切るようにぶるぶるっと頭を振ると、寝台から降りた。

「おはよう。デイス、おっちゃん……あれ？」

身支度を整え、洗顔を済ませるとエミリオは階下に降りた。そのままいつものように食堂に向かい、まだ火の気のない厨房の様子に首を傾げた。

もうとつくに起き出していると思っていた二人の姿がない。珍しい事もあるものだと思いつつ、取り合えずかまどに火を入れる。寝ぼけ眼のまま湯を沸かしていると、背後の扉が開く音がした。

「あ、おはよう……う？」

「おお、どうした？ 今日はずいぶん、チビ」

振り向きかけた体勢で、軽く驚いた顔をしたエミリオに笑いかけるのは、確かにリオーニだったのだが。

「……何、その格好」

彼が身に着けていたのは、いつもの白い聖父の正装ではなかった。全体的な色彩は黒。部分部分に白い縫い取りがある、少しくたびれた感じのある服だ。

良く言えば見た目よりも動きやすさを重要視した、悪く言えばどう見ても聖職者に見えない衣服は、聖父の服よりもずっとリオーニには似合っていた。

心なしかリオーニ自身も上機嫌に見える。今にも鼻歌でも歌いそうな様子で、エミリオに感想を尋ねてきた。

「ふふん、どうだ？ 似合うだろ？」

「うん。どうしたんだよ、おっちゃん。その格好……ついに聖父をク

ビになったの？」

正直に思った事をそのまま口にすると、たちまちリオ二の顔に凶悪な笑みが浮かんだ。そのまま拳骨で左右から頭をぐりぐりとされ、エミリオは朝っぱらから悲鳴を上げる羽目になった。

「イタタタ！ 痛いって、イテー！！」

「…テメエ、言っている事と悪い事の区別もつかんのか？ ん？」

「ご、ごめんってば！ だってさあ……！！」

「朝っぱらから、何を騒いでいるんですか」

やがてその場の空気を冷やす声が間に入る事で、ようやくエミリオは解放された。

「お、おはよう…デイス」

「おはようございます。…今日は随分と早起きですね、エミリオ」
「う、うん…ちょっとさ、夢見が悪くて」

涙目で答えつつ、念の為にさりげなくデイスティエルの姿も頭から足先まで観察する。こちらはいつも通り、似合うとは言いがたい白い聖女の服だ。その姿に何故かほっとする。

デイスティエルまでもリオ二のように普段と違う格好をしていたらどうしよう、と思ったが、それは杞憂きゆうに終わったようだ。

何故かと問われると非常に答えに困るが、この二人が揃って普段と違う事をし始めるのは、何だかいろんな意味でよくない事の前兆のような気がしたのだ。

「……。おはようございます、リオ二聖父」

「おう、おはよう。今日もいい天気だな」

そんなエミリオの心の内を知ってか知らずか、デイスティエルは朝の挨拶をしながら、まじまじと黒い服装のリオ二を見つめやがて呆れたような顔をして吐息をついた。

しかし、意外な事にその事に対しては特に何も言わず。

（な、なんで！？ なんでそこで何も言わないんだよ、デイス！？）

『聖父の身で、何故そんな格好をしているのですか？ 服装の乱れ

は心の乱れ。仮にも聖職者でありながら、そのような乱れた服装でいいと思っているのですか！』

などと、いつもならデイスティエルがそんな風に一言物申すはずだ。

何しろ、今のリオー二の姿は聖父らしい清潔さの欠片もなければ、腕まくりはしているわ、襟元も寛いでいるわと見事なまでに着崩しまくったものなのだ。

そんな有様なのに、あのデイスティエルが一言も小言が飛ばさな
いなんて。

（…て、天変地異の前触れ……？）

思わずそんな失礼甚だしい事を考えてしまう程、それは意外としか言えない出来事だった。

二言三言軽い会話を交わすとすぐにそのまま何事もなかったかのように、鐘楼あるいは聖所の門へと、それぞれの朝一番の仕事をしに行ってしまった二人を見送る形で、その場にはエミリオただ一人だけが取り残される。

しゅんしゅんとお湯が沸く音に気付いて薬缶は下ろしたものの、エミリオは朝っぱらからしばらく困惑する羽目に陥ったのだった。

+ + +

いつもと違う事は他にもあった。

信者達が帰っていった後、軽い朝食を摂ると、いつもはあまりこの聖所から出歩く事のないリオー二が出かけたのだ。

特に手荷物もなく、時期的にも数月に一度ある教会関係者の会合ではないのは確かだった。第一、相変わらず服装が聖父のそれではない。

聖所の中であらともかく、外出時ならなおさら口うるさく身なりを注意するデイスティエルは、やはりここでも呆れた顔はしながら

も何も言わなかった。

(…何なんだろう……。絶対、変だよ)

そうは思うのだが、朝は気付かなかったある事に気付き、服装については何とか納得出来る答えを見出す事が出来た。

リオー二の首の後ろ回り、立てた襟に白い刺繍を見つけたのだ。

大きなものではなかった上に、リオー二が長身の為、椅子に座った姿を見るまで気付かなかったのだが、十字に曲線を組み合わせた左右非対称のそれは、明らかに聖主教会のシンボルマークだった。

見た目的にはそのようには見えないが、その服装もまた私服ではなく教会関係者の身に着けるものなのだろうと見当付ける。だから、デイスティエルも何も言わなかったに違いない。

実際の所は直接尋ねてみなければわからないが、動きやすそうな所を見るに、作業着のようなものなのかもしれない。

何しろ、聖父や聖女の正装は、重いわ嵩張るわで、動きやすさにおいては非常に劣る部類に入る。

そもそも、聖父や聖女が動き回るような事自体、そうあるものではないので、そんな服装を日常的に身に着けても問題がないのだ。

まだマリオーズに来る以前、デイスティエルと共に各地を旅している時に、いくつかの聖所の世話になった。

幼い頃だったのでうつすらとしか記憶に残っていないが、確か余程辺境でない限り、何処も聖父(女性の場合は聖母)一人に対し、補佐となる聖父見習いや聖女が数名いたように思う。

決して少ないとは言えない日常の細かな仕事を捌くには、それだけの人数が必要なのだろう。

イオス大陸でも有数の港町であるマリオーズの聖所は他と比べれば大きい。何か理由があるのかもしれないが、その規模に対し、聖父と聖女が一人ずつしかない事がおかしいのだ。

逆にそれだけしかないのに、あの動きにくそうな正装のままで、さまざまな仕事を支障なくこなして行く二人(特にデイスティエル)が、一般と比べて尋常ではない。

そんな事をつらつら考えながら、やはり正装のまま、てきぱきと洗い物をするデイスティエルを覗き見る。

しばし聞くべきかどうか悩んだが、すっかりしないのはどうにも気持ち悪い。結局我慢できずに尋ねる事にした。

「デイス、おっちゃんは何処に行つたんだ？」

「リオー二聖父、でしょう。…変な所で似ているのですね、二人とも」

呆れ果てたため息をつきながら訂正を入れると、洗い物の手を休めてデイスティエルは知りませんよ、とあっさり答えた。

「え、知らないって……」

聖父の留守を預かる聖女がそんないい加減で良いのだろうか。

それ以前に、何事にもきっちりしているデイスティエルが、リオー二の行く先を聞いていない事が何より不思議だ。

その疑問が顔に出ていたのだろう。デイスティエルは更に口を開いた。

「リオー二聖父が何処に行ったかなど、いちいち詮索する事でもありません。日没までには戻って来るでしょうし、そうでないのなら一言、こちらに言つてゆかれるはずですから」

「それはそうだけど……。今日はいつもと違う服着てたし」

「ああ……。それが気になっていたんですか」

軽く眉を持ち上げて、ようやく気付いたと言わんばかりの顔になると、デイスティエルは少し考え込むように沈黙し、やがて何処かぎこちない様子で口を開いた。

「あれも…まあ、聖父の衣服です。見た目はそう見えませんが、一応正規のものですよ」

返つて来た言葉はある意味予想通りだったものの、そのぎこちない口調におやと首を傾げる。

「…作業着みたいなもの？」

鎌をかけるというよりは、助け舟を出すように尋ねると、デイスティエルは軽く目を見開いた。どうやら少し驚いたようだ。

「何故、そんな風に思ったのです？」

「え、だって…なんか動きやすそうだったから」

「そう……。まあ、そうですね。動きやすさを重要視はされています。…作業の為ではありませんが」

「???」

何だか訳がわからない説明だ。何事もきっぱり言い切るデイスティエルにしては、随分と齒切れが悪い。

一見した所、いつもと変わっていないように見えるデイスティエルだが、どうやらこちらもいつもと違うようだ。気のせいか、何処となく心ここに在らずと言うか。

昨夜のリオー二とデイスティエルの会話を知らないエミリオには、二人の言動の理由がわかるはずもなく。かと言って、これ以上に追求しても何も出て来そうではない。

すつきりしないままの気持ちを抱え、エミリオは何なんだ、とこっさりため息をついた。

エミリオ少年の受難（２）

午後になり、いつものように雑用を片付けるべく出かけようとしたエミリオは、更なる異変に遭遇した。

いつもは裏口の横の木の枝に止まり、出入りする度にギャーギャーと聞こえてくる声がなかったのだ。

静かなのはいい事なのだが、いつもあるのがないのは妙に落ち着かないものである。変だな、とそちらに目を向けたエミリオは、見慣れたフレイアの赤い姿がない事に気付いた。

「デイス！ 大変だ、フレイアがいない！！」

慌てて取って返し、祈祷所へ向かおうとしていたデイスティエルに報告すると、こちらはさして驚いた顔はせず、そうですか、と落ち着き払った答えが返って来た。

「そうですか、って…何でそんなに落ち着いていられるのさ！？」

確かに毎度毎度、『チビ』やらいろいろと気に障る事を言うてる鳥だが、彼女のような鳥がこのイオス大陸ではとても珍しく、場所によっては高額で取引されている事をエミリオも知っている。

いくらイオス大陸でも南方に位置付けられるマリオージでも、フレイアが本来生まれた場所に比べれば寒い気候に違いなく。

そうでなくても実際には室内、もしくは籠で飼うべきもので、いくら賢くて逃げたりしないとしても、このように外で放し飼いなどすべきではない鳥のはずなのだ。

余所よりも信仰心の低い事もあり、他からの流れ者も多いマリオージである。

なんだかんだと教会に一目を置いている元からの住人はともかく、そうした者の中には聖所に盗みに入るような罰当たりがないとは限らないではないか。

「もしかしたら、今頃捕まって売られたりしてるかもしれないじゃないか！！」

言いながら、籠の中で『タスケター』と助けを求めるフレリアの姿を想像してしまい、エミリオの言葉に更に熱がこもる。

だが、対照的にデイスティエルはそこまで言ってもまったく動揺を見せなかった。

思い返せば、デイスティエルとフレリアもあまり相性は良くはなく、どちらかというとフレリアがデイスティエルを苦手に行っている素振りを見せていた。

正しくは、飼い主であるリオーニ以外は彼女と友好的な関係を築けていない、とも言っ。

だが、だからと言っていなくなって清々する、などという感情までは抱かない。

デイスティエルが冷静なのはいつもの事だが、こんな時にまで落ち着いていなくなっていいではなからうか？　いくら鳥でも、仮にも今まで一緒にこの聖所で暮らした存在なのだ。

「何でそんなに落ち着いてるんだよ、デイス！　早く探さなきゃ……！」

「そちらこそ落ち着きなさい、エミリオ。気持ちわかりますが、心配は無用です」

「……え？」

勢い込んだ所を足元から掬すくうような言葉に、エミリオの目が丸くなる。

そんな様子に珍しく小さく笑い声を漏らすと、デイスティエルはもう一度言葉を繰り返した。

「心配は無用なのですよ、エミリオ。フレリアの行く先は大体予想がついていますから」

「え、ほ、本当に!？」

よもやデイスティエルからそんな言葉が出て来るとは思わず、彼女が嘘や冗談をつく性格ではないとわかっていっつも、つい確認を取ってしまう。

そんな彼にはっきりと頷いてみせると、デイスティエルはけれど、

と続けた。

「今は何処に行っているのか、教える事が出来ないのです」

「…何でさ」

思わず声に不満が出る。

心の中ではわかつているのだ。こういう風にデイスティエルやリオーニが隠し事をする時は、教会的に何か重要な事柄に関わっているという事は。

だが、教会と口うるさい派手な鳥というのは、どう組み合わせても不自然な気がしてならなかった。

「フレイアが教会に関係がある鳥だとか？」

エミリオにとっては、ちょっと珍しい鳥でしかない。第一、フレイアはイオス大陸の生まれでもないのだ。そうではない、という答えを期待しての質問だったが、デイスティエルは真面目な顔のまま頷く。

「ええ、実は」

「……ええと」

あまりにもあっさりと認められてしまい、返す言葉も咄嗟に出てこなかった。

「ですから心配しなくても良いのですよ。リオーニ聖父同様、フレイアもおそらく日没には戻ってきますよ、きっと」

鳥目でしょうから、という言葉をぼんやりと聞きながらエミリオは渋々引き下がった。

「…まあ、ならいいんだけど……」

そこまで言われたら、それ以上突っ込んで聞く事も出来ない。

追求を諦めて、気を取り直して再び買出しに行こうとするエミリオに、デイスティエルが声をかける。

「エミリオ、今日は出来るだけ早めに帰ってきなさい」

「え？」

デイスティエルがそんな風にわざわざ言う事は珍しい。

朝から続く珍事に首を傾げつつ振り返ると、デイスティエルは言

葉以上に真面目な顔をしてエミリオを見つめていた。

「…デイス？」

「変な人達に絡まれていると言っていたでしょう？ 今日のリオー

二聖父も不在ですから……」

「心配？」

「ええ」

「…うん、わかったよ。出来るだけ早めに帰る」

どうもただの心配だけのようには思えなかったが、エミリオは素直に頷くに留めた。

何かが裏で起こっている気がしてならない。けれど、教会の世話にはなっていない、今のエミリオはあくまでも『部外者』でしかないのだ。

聖主教会に正式に入信している訳でもなく、聖女によって育てられたとは言え、教会との繋がりは皆無に等しい。そんな状況で、突っ込んだ事情はとも聞けなかった。

このまま聖父などを目指さなければ、いずれこの聖所を出て一人立ちする事になる。二人も、エミリオに自分達と同じ道を勧めようとはしない。

やりたい事をするのが一番 リオー二もデイスティエルもそう言ってくれる。

もっと子供だった時は、そんな一線を引くような態度を少し淋しく思ったものだけれど、道を押し付けない事が彼等の最大の『養い親』としての愛情なのだと、今ではちゃんとわかっている。

確かな事は、裏に何があるかと二人とも自分を案じてくれているということ。

だから『早く帰るように』という言葉にも、何かちゃんとした意図があつてのものに違いない。ならば守るだけだ。

だが結局その日、エミリオは本来帰宅すべき日没の時刻に

なつても、聖所へ戻る事はなかった。

+ + +

西の空が赤く染まる。まるで空が燃えているようだ。

日没の鐘を鳴らした後、それを鐘楼から見下ろしていたリオーニは、ふと何かに気づいたように北の方へ顔を向けた。

…バササ……ッ

やがて力強く羽ばたく音が聞こえ、夕闇に紛れそうになりながら赤い鳥がこちらへ飛んでくるのが見えた。

このイオス大陸では珍しい極彩色を纏うその鳥　フレイアは、迷う素振りもなくリオーニが差し伸べた腕に舞い降りる。

「ご苦労だった、フレイア」

まるで人に対するように労いの言葉をかけると、フレイアはそのくちばし嘴を開き　。

「本当ヨ、鳥ツカイガ荒イワ……！」

実に不機嫌そうに言い放った。

「ココカラ往復スルノ、ドレダケ大変力ワカッテナイデシヨ！？
トツテモ疲れルノヨ！　イクラ緊急時ダカラッテ、一日デ戻レナン
テアンマリヨ……！」

ツンケンした物言いは、いつもエミリオに対しての言葉と違い、明確な意志が含まれている。明らかに覚えた言葉を繰り返しているのではなく、話しかけたリオーニと『会話』しているのだ。

リオーニはその様子に驚いた様子を見せず、ただ苦笑いを浮かべるに留めた。

フレイアとの付き合いは彼が十代の頃からだから結構長い。流石に彼女の気性は知り尽くしている。言いたい事を言う方だが、ちゃんと状況は認識しているはずだ。

実際、文句を言うだけ言って少しはすっきりしたのか、フレイアは少し口調と態度を穏やかなものに変えたと本題に入った。

「…上ノ許可ガ下リタワ。有事ノ際ハ、権限ヲ行使シテ良イソウヨ」
「ほう、もつとごねるかと思ったが」

通常なら上申してから短くても一日は審議にかかる。フレイアには今日中に、とは言ったものの、いざとなったら許可を待たずに動く気でいた。

その為に、今日はこの聖所を半日留守にして下準備をしてきたのだ。だが、こんなにも早く許可を下ろして来るとは、幸運ではあるが予想外だった。

それだけ今の状況が危険視されているのか、それとも。

「アタシモヨクワカラナイケド、イツモグチグチトウルサイ、アノヒゲ親父ガ不機嫌ソウダツタカラ、モット上ノ人ガ働キカケテクレタノカモヨ」

「…ヒゲ親父？」

一体誰だろう、と『偉い人』達の姿をそれぞれ思い返す。

髭を蓄えた人物は数名、その内で『いつもぐちぐちとうるさい』

人物と言うと。

「……。もしかしてフィヨル最高祀官じゃ……」

「アア、ウン。確カソンナ名前」

「お前、本人の前では絶対に言うなよ。焼き鳥にされて食われても知らないからな」

思わずげんなりとなつて忠告する。よりもよつて二番目に偉い人を『ヒゲ親父』呼ばわりするとは。

煮ても焼いても食えなさそうなフレイアだが、フィヨル最高祀官ならばそれくらいやってしまふに違いない。

それはともかく、フレイアの話が真実だとするとそれもまた少々問題がある気がする。フィヨル最高祀官より偉い人間となると一人しかない。

教会の奥、限られた人間しか入る事が許されない聖堂にこもり、

聖主の『託宣』を受ける神子みこと呼ばれる人物がそれだ。

だがその人には立場上、実質的な政治的権限がなく、こうした事に直接口を出して来る事自体、リオー二が知る限りでは今までになかった事だ。

逆に言えば、それだけ今の状況は『危険』という事かもしれないが。

（神子に己の意志はないという話だったけどなあ……）

聖主からの言葉を曲解なく受け入れるには、個があってはならない。人として不自然とは思いつつも、そのようなものなのだろうと漠然と思っていた。

一体どういう基準で神子を選ばれるのかは知らないが、どうやらそれは建前だったようだ。…当然と言えば当然なのだろうが。

今頃はさぞ、教会内部は騒ぎになっているに違いない。だが、ここから遠く離れた総本山の事は今はどうでも良い事だ。

必要としていたものも手に入った。状況次第だが、すぐには用がない。

リオー二は意識を切り替えると、今の状況を知らないフレイアに現時点での最大の問題を告げた。

「フレイア、どうやらチビが攫われたようだ」

「エエッ……！」

案の定、フレイアは驚きの声を上げた。

エミリオにとっては迷惑な話だろうが、フレイアはかなりエミリオを気に入っていて、だからこそちよっかいをかけていたのだ。

今回はおそらくフレイアの助力も必要となるに違いないが、何処か気まぐれな所がある彼女もエミリオが絡むのなら率先して協力してくれるに違いない。

「助け出すぞ」

同意を求めて言うと、フレイアはばさりと翼を広げて応える。

「当然ヨ！ ヨクモヨクモ、アタシノ玩具ヲッ……！」

（……『お気に入り』以下？）

鳥に玩具扱いされる少年に少々同情しつつ、リオーニは再び沈み行く太陽に目を戻した。階下ではディスティエルも準備に入っている。今回ばかりは彼女も黙ってはられないだろう。

…布陣は、整った。

イオス大陸有数の港町マリオーズに異変が起きるのは、これから数刻後の事である。

エミリオ少年の受難（3）

ざわざわと不特定多数の音がする。

声を抑えているせいかわわしている言葉は不明瞭だが、そこに籠っている『熱』は伝わって来る。

（…ええと……？）

何だろう、妙に頭がすつきりしない。というか、妙に後頭部が痛いような。

（痛いって…何で……）

二日酔いは治ったはずだ。それ以前に、二日酔いの頭痛はこういう痛みではなかった気がする。

もつと、こう…ぐわんぐわんと響くような感じで、今のような殴られたようなものでは。

（…殴られた？）

その瞬間、一気に意識がはつきりとした。

同時に開いた目の前に見えたのは、所々に苔らしきものが見える何処かカビ臭い石畳。

（何処だ、ここ　！？）

慌てて起き上がろうとするものの、それは叶わなかった。両手が使えない。どうやら、後ろでロープのようなもので縛られているらしい。

「な、んだよ…これ……っ」

混乱しつつも、必死に記憶を辿る。確かいつも通り、町へ買出しに出たはずだ。

デイスティエルが今夜は自分の好物である雛鳥のパイ包みを作ってくれるというので、それに必要な香草と雛鳥の肉を買って来ようと、バザールに向かったまでは覚えている。

時折、顔見知りと挨拶を交わしながら道を歩いて…そうだ、もう少しでバザールという地点の角を曲がった時に、いきなり後ろから

誰かに羽交い絞めにされて。

そこまで思い出した時、エミリオが目を覚ました事に気付いたのか、周囲のざわめきが小さなどよめきに変わった。

「おお、お目覚めになられたぞ！」

「まったく、いくらお暴れになったからって、いきなり殴る事ないじゃないのさ」

「そうだとも、そうだとも。大事な玉体にもしもの事があつたら、一体どうするつもりだったのだ」

「このまま目が覚めなかつたら、大変な事になっておつたわ」

「む…？ それで王を殴つた者はどうした？」

「『オレは何という無礼な事を！』と今にも自害しそうだったんでな。仕方がないから石化の呪いをかけて…ホレ、そこに」

「ああ、妙な石像がいつの間にか出来ていると思つたら……。しかし、それは止め方しては何か違う気がするんだが」

「仕方なからう。今は無駄に戦力を減らす訳には行かん」

などなど。口々に何やら言っているが、ぼそぼそとした咳きがほとんどでエミリオには理解不能だった。

聞こえてきた言葉の断片から判断するに、どうやら自分が暴れたので、強行手段で殴つたら意識を失つた、という事のようにだが。

落ちて置いて動けないなりに周囲を見回してみると、随分と暗くじめじめした所だった。微かに潮の臭いがするという事は、海辺に近い倉庫か何かだろうか。

火の気がないせいで、周囲にいるらしい人々の姿も影のようにしか見えない。

だが、その影の奇妙な歪さと、自分を拉致つているという事実でその正体は知れた。この十日ばかり自分に付きまとっていた、あの謎の宗教団体だろう。

(…ついに実行使、ってか？)

思い返せば、確かに初対面時に彼等は有無を言わさず何処かに連れて行こうとしていた。その後は付きまといこそすれ、実行使を

するような事もなかったので忘れていたけれども。

やっと諦めたかと思つたのに、よもや誘拐までやらかしてくれるとは。おそらく、昨日の謎の女性は彼等の仲間だったのだ。

一体、彼等が何故自分にそこまで執着するのかわからないが、これで彼等は『変質者』から『犯罪者』へレベルアップだ。

ばかな事したなあ、などとエミリオが呆れていると、影の一つが床に転がっているエミリオの方へ歩み寄ってきた。

「我等の同胞が乱暴な手段を使いまして申し訳ございません」

暗い上に地面に半ばうつ伏せの状態では、相手がどんな人物かはわからない。だが、聞こえてきた声は予想に反して、意外に紳士的だった。

「ご気分はいかがですか？」

「……最悪」

心配そうに尋ねられて、どう答えるべきかしばし悩んだものの正直に答えると、どよつとどよめきが周囲に走った。

「最悪ですと!？」

「何と言う事だ……!」

「手加減しないからだわ!! どうするのよ!？」

殴られたと思しき後頭部はズキズキするし(きつとこぶになっているに違いない)、後ろで縛られた手首も少し痛い。

石畳に寝かされたせいとか、単に不自然な体勢だからか、身体がギシギシ言っているし、何より胃が空腹を訴えていた。

それらを総合しての『最悪』だったのだが、何だか違う方向に誤解されているような。だが、わざわざそれを修正してやる程、親切な気持ちにはなれそうになかった。

「何が目的なんだよ。身代金を払う余裕なんて、うちにはないぞ」
言われた時は結構悲しかったものだが、この間ディスプレイが言っていた事は紛れもない事実だった。

生活費などは教会側から支給されるが、質素儉約を旨とする為、その額は必要最小限なものだ。

金額的にはまとまった額のように見えるが、その大部分が聖所の維持費に消える。

特にこのマリオゾの聖所は、元々歴史ある古いものだった上に、リオー二一人の時代にこれ以上とないレベルで荒れた事もあり、他の場所よりも消える金額は多いのだ。

…もしかすると聖父と聖女が一人ずつというのは、考えたくない事だが教会側の経費削減策の一環である可能性すらある。

しかも、リオー二曰く『ケチで融通のきかない』教会の経理担当者、教会に所属するリオー二とデイスティエルに分しか出してくれない為、教会に属さない上に育ち盛りのエミリオがいる分、彼等は結構切り詰めた生活をしているのだった。

「身代金……？」

しかし、てつきり金目当てかと思っていたが、返って来た言葉は予想外の言葉を聞いたような、不思議そうなものだった。

「身代金など、要求するつもりはございませんよ。王。それではまるで、誘拐犯ではありませんか」

「とんでもない。我等をその辺の犯罪者と一緒にされては困りますぞ」

「そうよそうよ！」

「……はい？」

やがて大真面目に返って来た言葉達に、エミリオは床に転がりつつ首を傾けるといふ器用な事をする羽目になった。

彼等の言い分が嘘偽りないものだとは仮定すると、この状況は誘拐ではないらしい。

では、今の拉致監禁状態は一体何だというのだろう。エミリオの語彙の中には、それに適する表現が見当たらなかった。

「誘拐じゃないんだったら、縛る必要なんてないはずじゃないか」

騙されるもんか、と言い返すと周囲はおろおろと動揺した。

「そ、それは……！」

「ようやくこちらに来て頂けたのに、逃げられたら…なあ？」

「つい、なあ」

「早く解くのだ！」

「申し訳ありません……！」

そして我が我がと人が押し寄せてくる。

どうやら縛ったロープを解いてくれるつもりらしいが、一斉に來られてはどうしようもない。というか、そのまま押し潰されそうで怖い。

「わわわ、こ、このままでいいから！ こっち來んな……！」

圧死しそうな恐怖から叫ぶと、彼等は面白いようにピタッと動きを止めた。

状況が状況でなければ、鈍いエミリオもその反応で彼等の目的が自分自身だと気付いたかもしれないが、彼はまだその現実に気付いていなかった。

「……ゆ、誘拐じゃないなら、どうしてオレをこんな所に連れて來たんだよ！」

虚勢を張って、あえて強気の発言をする。

誘拐犯なら下手に刺激をしてはならない気もするが、そうでもしなければ自分が保てそうになかった。

「……て言うか、何処だよ。ここは」

そう言えばというつもりで、ぼそりと呟くと、先程の質問よりも先にそちらに答えが返って來た。

「マリオゾの地下です」

「……地下？」

それで暗いのかと納得するものの、それはそれで疑問は増えた。マリオゾの地下に、このような人が集まれそうな程に広い場所があるなど聞いた事もない。

その疑問を汲み取ったのか、先程の紳士的な人物が親切にも解説してくれる。

「ここは千年以上前に存在した、ある王国によって作られた地下水路です」

「千年…以上前？ カレーズ？？」

「地上にあつた建造物は全て焼き払われてしまいましたが、このカ
レーズだけは残ったのですよ。この街はその後人間によって築か
れた街です。歴史に残っていない以上、ここの人間は存在すら氣付
いておらんでしょうな」

何処か誇らしげに語られる内容は、少々エミリオの理解を超える
ものだった。

言われてみると、確かに遠くで水が流れるような音がするので、
水路という事はわかるが、これが千年以上前のものだと言われても、
あまりに壮大過ぎてその重みがよくわからない。

だが、取り合えずここがマリオーゾの中で、何処か知らない場所
ではないのは確かだ。ほんの少しだけほっとする。

事態は何も変わっていない気がするが、五歳の時にここへ来てか
らというもの、町の外へ出た事がないのだ。地下であろうと、マリ
オーゾであるだけで心強かった。

…だが。

その後が続いた、くつくつと楽しげに笑いながらの男の言葉に、
エミリオは凍りつく事になった。

「もつとも、この町も今日限りで地上から消える事になりますかね」
「…！？」

ぎよつと目を見開き、苦勞して首を持ち上げ目の前の人物を見る。
闇の中に浮かび上がる奇形の影。その姿に、エミリオは初めて恐
怖した。

魔王覚醒（１）

今、目の前のこの人は何と言った？ 消える？ マリオ
ゾが……？

信じられない思いで目を向けるエミリオの前に、男がゆつくりと
跪き、その顔を覗きこむように顔を近付けて来る。

「…な、なんだよ……っ」

「光の歴史は今日終わる。それに立ち会える事、闇の徒とし
てこの上ない僥倖と存じますよ。我等が王よ」

「…王？」

相変わらず言っている事の意味はほとんどわからなかったが、そ
の単語だけが妙に頭に引つ掛かった。

そう言えば、彼等は初めて遭遇した時から自分をそう呼んでいた
気がする。今までは彼等の言葉を真剣に受け止めていなかった事も
あり、さして気にも留めていなかったが。

『王』という単語の意味は一つしか知らない。その国で一番偉い
人、という事だ。

（…もしかして、オレ、何処かの王様だとか？）

まさか、とは思うが、養い親であるディスティエルから、自分が
魔族によって何処かから攫われた来た子供である事は聞かされてい
る。

おそらく、この地上の何処かに本当の両親がいるだろう、という
話も。

気にならなかったと言えば嘘になる。だが、積極的に会いたいとい
う気持ちは不思議と湧かなかった。

物心つく前の話だし、平穏であると同時に何かしらと刺激の尽き
ないマリオーズでの暮らしに満足している。

ディスティエルやリオ二、それにフレイア、マリオーズの友人
達。彼等がいれば、実の親がいなくても平気だとも思っていた。

だけど。

「何であんた達は、オレの事…『王』って呼ぶんだ？」

「だけど…もし、自分の血に連なる人が、いるのだとしたら。」

「あんた達は、オレの何を知ってるんだよ……？」

無関心で、いられるはずがない。

ようやく彼等の言葉に対してまともに向き合ったエミリオに、周囲の魔族達はそれぞれに満足げな笑みを仮面の内で浮かべた。

彼等は闇の徒。かつては人間を惑わし、恐怖で支配した生き物。

外界の光が一切入らないこの闇の世界は、彼等の力を最大限に高める。その力は発する言葉にすらも常ならぬ力を与えた。

人を惑わせる、魔力を。

「全て知っておりますとも……」

「あなた様が何処で生まれたのかも」

「あなた様が何者かも」

「我々はずっと、あなた様が生まれる日を待ち望んでおったのですから」

囁きかけるその言葉は、本人でも意識していなかった『弱み』を的確に刺激する。

口々に紡がれる言葉は、呪文のように少しずつエミリオの精神を蝕んでゆく。

今までは戯言のようにしか聞こえていなかった言葉が、妙に現実味を帯びて聞こえた。

しゅるりと、手首を戒められていたロープが解かれる。けれどもう、エミリオはそこから逃げようという意識が薄れていた。

「…知りたいでしょう？」

止めのような問いかけ。

ゆっくりと身を起こしたエミリオの目からは、いつの間にか先程まであった勢いの良さと輝きが消えていた。

「……知りたい」

やがて答えた声を切っ掛けに、彼等は今まで自らの姿を覆い隠していた布と仮面を取り払った。

闇に浮かび上がるのは、数々の人間には有り得ない異形の影。

けれどエミリオは、それを目の当たりにしても驚きはしなかった。怖いとも思わないままに、闇を透かして彼等をぼんやりと見つめる。

「あなたは我等の王」

「闇の眷属の頂点に立つ者」

「この世界を再び、闇に染める者」

歌うように言葉が紡がれる度、身体の内からまるで呼応するように何かが滲み出してゆく。じわじわと、侵食して来る。これは、一体何だろう？

それは決して不快ではなかった。むしろその逆　快感すらも齎した。徐々に高揚してゆく感覚に対し、何故か意識は朦朧としてゆく。

「オレは……『王』……？」

「ええ、王です。我等、魔の者を支配する魔王、それがあなた様の本来の姿。……我々はずっと、この日を待ち望んでいたのですよ」

「魔、王……？」

それは何処かで聞いた単語だった。知っていると思った。誰かに話して聞かされた気もする。

何だっただろう？

誰が話してくれたんだった……？

そんな風に疑問を感じたのは、一瞬のこと。すぐにエミリオは疑問を感じた事すらも忘れてしまう。

何だかとても眠い。寝てしまえと、心の奥で誰かが囁いている。

眠れ。眠ッテシマエ　永遠二。

くらりと眩暈を感じて、頭を押さえた。

「あ…、れ……？」

平衡感覚が狂ったような感覚に包まれる。

正面を見ているはずなのに違う場所を見ているような。地面に座り込んでいるはずなのに、身体が浮かび上がっているような。

何だか変だ　　そんな風に思った瞬間、不意にざわりと背筋を悪寒が走った。それはすぐさま熱へと変わり、体中を駆け巡り始める。

「う、あ…あ、ああ……！？」

それはまるで、炎のようで。

キエロ！

身体の裡から放たれた暴力的な何かの奔流にエミリオは限界にまで目を見開く。

その熱は、瞬く間にエミリオの意識を焼き尽くし、真っ黒な闇の中に飲み込んだ。

「うわああああッ……！」

それはまさに絶叫。

苦痛とも恐怖ともつかない叫び声を上げながら、小さなその身体から、周囲の闇を切り裂くような赤い光が放たれる。けれどもそれは、光でありながら何処か禍々しい。

「おお……」

「め、目覚めた……？」

「魔王……！！」

「魔王だ……！」

魔族達の声に応えるようにゆらりと再び顔を持ち上げたそこに、もうかつての無邪気な笑顔はない。何かに取り憑かれたような瞳に、歪んだ笑みが浮かぶ。

そして。

ドン！！！！

突如激しい爆発音と共に、そこから火柱が上がった。

近くにいた魔族すらも巻き込み、それは瞬時に地下水路の天井を突き破ると、やがて大地を切り裂いて天の高みにまで昇る。

マリオゾの空が、一瞬にして夕暮れ時のように赤く染まった。

まだ宵の口　マリオゾの町はまだ眠ってはいない。天を貫く火柱を目撃した人々から、驚愕の声と悲鳴が次々に上がる。

火柱から火の粉が次から次へと周囲の建物に降り注ぎ、そこからまた火の手が上がった。やがてそれは、急に強まった風によりあつと言つ間にマリオゾ中に広まってゆく。

それが、魔王復活の産声だった。

「魔、魔王……？」

「王……」

一瞬にして大穴を開けた火柱の中央に立つエミリオに、恐る恐る魔族達が声をかける。

確かに魔王としての覚醒は彼等の待ち望んだものだったが、このような派手なものを望んでいた訳ではなく。

巻き添えを食っただけではなく、小さな身体から放たれる威圧感に彼等はその場に釘付けにされていた。

計画は完璧だったはずだ。

魔王の身の安全を確保する為にその身柄を捕獲し、可能ならば魔王としての力と意志を目覚めさせる。

それでも駄目だったなら、マリオゾの町を滅ぼす様を見せる事でその本質を思い出させるつもりだったが。

「魔王よ、お気を確かに！！」

必死に呼びかけるが、魔王は彼等の声に聞く耳を持たないように、うるさそうにその腕をなぎ払った。

ザンツ！！！

「うわああああー！」

「ぎゃあッー！」

うるさい蠅を追い払うような動作。しかしたったそれだけで、なぎ払った方向にいた魔族が吹き飛ばされる。来るとわかってても防げなかった。

あまりにも力の差があり過ぎたのだ。

「どうする、このままでは我等も……！！！」

「しかし、どうやって止めるのだ。相手は魔王だぞ……！？」

流石に身の危険を感じ、魔族達もおろおろとうろたえ始める。

魔王さえ復活すれば、何もかも良くなると思っていたのにどうだろう。むしろ、逆に滅ばされてしまいそうな勢いではないか。

確かに魔王覚醒に伴って今までになく力が満ち溢れてゆく感覚を彼等を感じていたが、それは現実を前に何の慰めにもならなかった。よく考えれば、彼等の頂点である魔王にそれよりも劣る力しか持たない彼等の歯が立つ訳がない。出来る事と言えば、魔王の力が及ばない場所を目指して、無力にも逃げ惑う事くらいだった。

「……くっ、退け！今は退くのだ……！」

「魔王はどうするのだ……！」

「今はどうする事も出来んよ！今の魔王様は己を失っておられる……！」

「何と言う事かえ……！！！」

そうこう言い合っている間にも、魔王は次の行動に移っていた。何処か焦点の定まらない目でぐるりと周囲を眺める。やがてその目は、先程自らが開けた天井への穴に向けられる。そこからは火柱によって赤く染まった空が見えた。

(…カエラナクチャ)

もはや『エミリオ』としての意識はなくなっていたが、最後まで心に引つ掛かっていた事は断片として残っていた。

ここは狭くて暗い。自分はどうして、こんな所にいるんだろう？

ここは、違う。

ここは 自分の居場所じゃない……！！

「…魔王様!？」

逃げながらも魔王の行動を目で追いかけていた魔族が、思わず声を上げる。

燃え盛る火柱はまだそこにある。しかし、その中にいた小柄な姿が忽然と消え失せていた。

魔王覚醒（2）

「消えた……？」

「何処へ！？」

「さ、捜せ！ 捜すのだ……！！」

逃亡から一転、魔族達は慌てふためいて魔王の姿を捜し求めた。魔王は覚醒したばかりである。おそらくまだ己の力を把握出来ていないとは思えない。

本能のままに破壊活動を起こすような事はあっても、意図して空間移動するような力の使い方は出来ないはずだ。何より、今の魔王に明確な目的地はないだろう。

そんな彼等の予測は正しかった。地下水路から姿を消した魔王は、程なく発見された。

マリオーゾを見下ろす、遙か上空。地上からではその姿がうまく捉えられないような場所に、重力に逆らって浮かんでいたのだ。

「あのような所に……！！」

いくら力ある魔族でも、自然の摂理に反する事はおいそれとは出来ない。空を飛ぶなど有翼の魔族でないと無理だし、ましてや中空に浮き続けるなど不可能だ。

それだけ『魔王』がこの世において異端の存在である事は間違いない。実際、魔族の王と位置付けられてはいるが、本質は魔族でも人でもないのだ。

今は人の少年の姿をしているが、それは単に周囲の状況に合わせて擬態しているに過ぎない。最初から魔族の中で育っていたなら、おそらく違う姿になっていただろう。

「誰か！ あそこまで行ける者はおらぬのか！」

「ばかを言うでないわ！ 仮に行けたとして、どうしろと？」

「うぬ……」

かろうじて魔王の姿を見つける事が出来たものの、だからと言っ

て暴走した魔王を前に、彼らに見守る事以外出来る事はなかった。そのまま物陰に隠れ、額を突き合わせるようにしてばそぼそと話し合う。

「一体、魔王様はあそこで何をなさるつもりなのだろう」

「今の所は動く様子はないが……」

「…もしや、この街を滅ぼそうとなさつておいでは？」

「何！？ いや、でも有り得るか……」

「皆殺しってこと？」

「空からならいかようにも攻撃出来る。流石は魔王だ」

「ちよつと待て。だとしたら、ここにいては我等も巻き添えを食らうのでは？」

「おお、そうじゃ！」

「人間どもがいくら死のうが一向に構わぬが、というかむしろ望む所じゃが、無差別に攻撃されては困るぞ！」

さあつと青褪める彼等を余所に、上空にいた魔王はついに行動を起こした。

その手を持ち上げ、何かを思い出そうとするかのように掌を見つめる。遠くからではその表情までは確認できないが、やがてその手には青白い光の球が生み出された。

それは純粋な力の結晶。人よりもそうした力に敏感な魔族には、その威力を理解出来た。子供の握りこぶし程のものだが、マリオーゾの町を半壊させるくらいの破壊力は秘めている。

魔王はその光をじつと見つめ、やがて無造作にそれを握った。

「いかん、来るぞ!？」

「皆の者、身を守れ……!!」

もはや逃げる猶予もない。魔王の力に対し、どれ程の効果があるかはわからないが、持てる力を全て出して障壁を張るしか彼等に残された道はなかった。

が。

まさに魔王がその光を解放しようとした時、彼等は異変を感じ取った。

「……!?!」

「な、なんだ……!?!? ち、力が、抜ける……!?!!」

「いやああああ、何よこれー!! 気持ち悪い!!」

そこから魔族達の悲鳴が上がる。

と言うのも、彼等が身を守る為に身の内で高めた魔力が貯めた端から消えてゆくのだ。まるで、地面に吸い取られるように。

次々に耐えきれずに膝を地につく。この状況で魔王が力を解放すれば、彼等に待つのは消滅しかない。

「く、くそつ、力が吸い取られ…… って、こ、これはまさか……!?!」

やがて一人の魔族が思い当たったように声を上げる。

ただでさえ絶体絶命の危機を前に青褪めていたその顔は、たちまち紙のように白くなる。

「ど、どうした?」

「これが何かわかる……のか!?! ええい、鬱陶^{うつとう}しい……!?!」

声を聞きつけた周囲の魔族が問いかけると、その魔族はこの世の終わりを目前にしているかのような表情で、ぽつりと呟いた。

「人間、だ……」

「は?」

「人間……って、まさか……」

それは魔王と自分達だけに目が向いていた魔族達が、初めてそれ以外の存在に意識を向けた瞬間だった。

そう、この街には彼等以外にもいたではないか。魔族ではない、むしろ敵対関係にある存在が。

「そついや、この町の人間どもはどうした? 先程から気配がないぞ?」

「知るか! 今はそれどころではない……これはだな ツー!!」

その瞬間、マリオージ中を走るあらゆる道から、白い光が放たれ

た。

魔王が生み出した火柱とは対照的な、清浄さを感じさせるその光に包まれた瞬間、力の弱い魔族から次々に消滅して行く。

悲鳴すらも上げる暇もない、完全なる消滅。抗う事すら許さない、魔王の力より一方的ですらあるそれは、その場にいた魔族達を飲み込んだ。

「やはり…教…会の……！」

その言葉を最後に、マリオーゾにいた魔族は全て消え去った。

その光は魔族達を飲み込んでなお、上空に浮かぶ魔王の元にまで伸び、驚いたように目を丸くしたその身体を拘束するように包み込む。

バシユッ！！

「……………ッ！！！！！」

光がその身体に触れた刹那、それに反応するように青黒い光が魔王の全身から放たれる。その衝撃は凄まじく、雷に打たれたように小さな身体が仰け反った。

驚愕か、痛みの為か　大きく見開かれたその瞳に、遙か地上にあるマリオーゾの街が映り込む。

繋がりあった光の道は、一つの模様を闇に描き出していた。上空から見て初めてわかるほどの規模のそれは、見る者が見れば何を意味するものかすぐにわかっただろう。

それは、聖主教会が魔族調伏に使用する退魔の法陣だった。

+ + +

「目標捕捉。拘束に成功した模様」

「地下に確認された魔族反応が消えました。マリオーゾに潜伏して

いた魔族は全て消滅したようです」

「やはり保有魔力が強過ぎる。この法陣でも、もって半刻です！」

「…これが『魔王』の力……！」

場所はマリオーゾ郊外。夕闇に紛れて、そんな緊迫した声が行き交う。

彼等の目に映るのは、光を放つ町とその光に絡め取られた小さな姿。肉眼ではその姿は距離があり過ぎて捉えられないものの、彼等は肌でそこにある強大な力を感じ取っていた。

「半刻もあれば十分だ。ともかくここに足止めをしる。絶対に逃がすな！」

背後から聞こえた声に、彼等が一斉に声をした方へ顔を向ける。

そこにいたのは、闇に溶け込む黒い服を身に着けた大柄な男。いつもは飄々とした表情が、今はまるで研ぎ澄まされた刃のような鋭さに変わっていた。

「リオー二総統！」

「後は俺とメリーがやる。お前達はこの法陣の維持だけに全力を尽くせ」

慣れた様子で命じるその姿には、普段の聖父姿にはなかった厳しさと言葉がある。その肩には極彩色の鳥　　フレイアの姿もあった。

「はっ！」

「了解しました！」

「頼むぞ」

リオー二の言葉に応える彼等は、力強く頷くと自らに課せられた仕事に向かう。

その服装はと言えば、エプロン姿であつたり、郵便配達人の服装であつたりと、妙に生活感のある姿だった。中には腰に包丁を下げたままの料理人や、編み物を手にした老婆までもいる。

それもそのはず、彼等はいく先程まではこのマリオーゾで普通に生活をしていた人々なのだ。

先程マリオーゾの地面に大穴を開けた火柱が出現するまで、それぞれの場所でそれぞれの生活を営んでいた彼等は、異変が起きると同時にこの地点へと向かった。

それはマリオーゾの聖所を預かる、リオー二やデイスティエルも同じだった。

今日の午前中にリオー二が出かけたのは、有事の際の指示を出す為だったのだ。まさかその日の内に異変が起ころうとは思っていなかったが、近い内にこのような事態が起これると予想していた。

「エミリオ……」

リオー二の後ろに控えていたデイスティエルの口から、今は魔王と化してしまった養い子の名が零れ落ちる。

もう彼女も、聖女の白い服を身に着けてはいなかった。

リオー二と同様、闇に溶け込むような黒い衣服。ただしこちらはリオー二よりも露出部分が多く、身動きの支障になるような布を省いた分、機動性をより高めた仕立てのようだった。

「大丈夫か、メリー」

「……はい。心配は無用です、リオー二聖父……いえ、リオー二総統官」
頷いた彼女は、物思いを振り切るかのように、ぎゅっと黒い皮手袋に包まれた手を握り締めた。元々表情に乏しい彼女だったが、今は触れると切れてしまいそうな程に鋭い空気をまとっている。

「血は繋がらずとも、あの子はこの私が育てた者。 最悪の場合、この手で」

何処か思いつめたような言葉に、リオー二は励ますように口を開いた。

「……信じる。きつとうまく行く」

「ソウヨ、アノ子ハ強い子ダワ。『魔王』ナンカニ負ケル訳ガナイデショ！」

フレイアまでもがそんな事を言い、デイスティエルは驚いたように軽く目を見開いた。やがてその顔に、僅かな余裕が生まれる。

握り締めていた拳を緩めると、デイスティエルは上空で光に囚わ

れている少年へ目を向けた。

（…そうだ。あの子が、負ける訳がない。信じよう）

思い出すのは、彼が自分に向けてくれた無邪気で明るい笑顔。

何より光が似合うあの子が、闇の王たる魔王と化してしまうはずがない……！

デイスティエルの瞳に前向きな光が宿った事を確認すると、リオ
ーニはマリオーゾの人々に向き直り厳かに宣言した。

「…古の託宣に従い、第七退魔師団『マリオーゾ』総統官リオーニの名において命じる。魔王復活を阻止せよ……！」

魔王覚醒（3）

始まりは聖主が魔王を倒し、世界に光が戻って数十年後。

聖主の『言葉』を唯一理解出来たとされる聖女マルグリーテが、その今際の際に言い残した言葉があった。

『聖主は神の元に戻ってなお、我等を見守っておられます。その御言葉に耳を傾けなさい。さすれば、光の世は永く続くでしょう』

それはそれまで生死不明とされていた聖主の死を暗示すると同時に、彼が神の使徒として神格化される切っ掛けになる言葉だった。

マルグリーテの死とその言葉により、それまでは単純に『救世主』としての聖主を敬い慕うだけの集団が、教会という形態を取り、イオス大陸に宗教として広まるようになったのだ。

当初は疑問視されていた『聖主の言葉』は、やがてそれを受け止める神子の存在により現実となる。

初代の神子はマルグリーテの養子だったと伝わっている。彼は聖主からの託宣を受け、当時まだ力を持っていた魔族の大規模な襲撃を予見し、その被害を最小限に食い止めた。

それ以後も神子の代は変われども、『託宣』は魔族だけでなく自然災害にまで及び、有事の際に真っ先に動ける事から、結果として聖主信仰の拡大化へと繋がっていった。

そして今から、数百年以上前。聖堂に籠っていた神子の下に、一つの託宣が下った。

…曰く。

『これより数百年の後、南の地にて太古の闇甦らん』

『闇』とは魔族を示す隠語。太古とつく事で、それが魔王復活を

意味するのだと解釈された。聖主の託宣はそれまで一度も違えた事のない予見。たちまち教会は大騒ぎとなった。

また、数百年後、という曖昧な表現も物議を醸した。

そんなにも遠い未来の事についての託宣は過去にない事だったからだ。

たとえ策を講じるにしても、自分達すら生きていない先の事を見通して考える事は至難であつたし、何より当の『魔王』がどれほどの力を持つのかもわからない。

すでに当時を直接知る者は生き残つてはおらず、また当時の記録も混乱時の為、正確だとは言い難い。

魔王に関して彼等が知るのは、かつて世界を支配していた事と、彼等が崇める聖主によって討たれたという『史実』のみ。

一番の謎は復活する暗示はあつても、それによって世界が滅ぶような兆候が何一つ示されていないという事だった。

そして更に百年余りが過ぎ 再び神子の元へ魔王に関する新たな託宣が下った。

『かつて栄華を極め、そして滅び去りし王国。人々が去り、水の流れのみ残りし場所にて闇は目覚める』

それは魔王が復活する場所を示すものとされ、彼等は密かにイオス大陸のみならず、南方と呼べる全ての場所を探索した。

それは途方もない労力を必要とするものだった。

何しろ世界はあまりに広く、しかも当の滅び去った王国がいつの時代のものかもわからなかったからだ。

彼等が知る歴史は、聖主により魔王が討たれて後の事のみ。それ以前の事になると、文献は一つもなく、まさに砂漠の砂から砂金一粒を探すようなものだった。

だが、彼等は諦めなかった。それはまさに、信仰のなせる技と言えただろう。

そして途方もない労力と時間を経て、イオス大陸の海辺に接する荒野に、かつての地下水路が発見された。そこがそうであるという確証は何一つない。けれども可能性はある。

彼等は話し合い、そこに町を築く事にした。それは実に数百年の月日に渡つての、壮大な計画によるものだった。

いきなり大人数で町を作れば、未だ滅んではない魔族に勘付かれるかもしれない。それによって万が一託宣が歪む事があつてはならない。

少しずつ、少しずつ。荒野を拓き、港を造り　　気の遠くなるような時間をかけて、その町は造られて行つた。

当然、町に暮らす人間も様々な職業の人間に身をやつした。最初は偽装に過ぎなかったが、年月が経つ内にその生活に慣れてゆく。周囲の町の人々も、よもやそこで暮らす住民が全て教会関係者だとは思わない。

時が経つにつれ世代は変わつて行つたものの、港町という形態の為か、外部の人間はほとんどそこに定住する事はなく、たとえそこに根を張つたとしても最終的には教会との関わりを持った。

気がつくとその町はイオス大陸の玄関口となり、大陸の流通を左右する程の有数の港町になっていた。

けれどもそれすらも、教会側の目論み通りだった。まだこの地が託宣の場所とは限らない。他大陸の情報を一早く手に入れる為にも、その町は港町でなければならなかった。

∴世界に存在する大陸は全部で六つ。

それぞれに對魔族の戦闘要員が配置されており、それぞれ第一退魔師団、第二退魔師団と名付けられている。

これらに関しては特に重要機密という訳ではなく、ある程度の階層の人々で興味のある者ならば存在を知っている。

だが、それは実際には七つ存在している事は知られていない。

教会でも最重要機密に属する七番目の退魔師団。その名は、そのまま彼等が存在する場所を示す名となつていた。

それが『マリオーズ』。

それは太古の言葉で『封印』を意味するという。

+ + +

軽く腕組みをしながら、リオーニは中空に浮かぶ『魔王』に目を向ける。

本来の住人でない旅行者達はすでに別の場所に避難させた。今、マリオーズの街は完全な無人。何かあっても犠牲は最小限で済むはずだ。

（さあて、ここからが頑張りどころだな）

聖父としての資格こそ有しているものの、実際は魔王復活を阻止する事を目的とされた第七の退魔師団、マリオーズの最高司令官こそが本来の顔。

ここに来るまではトップクラスの退魔師として各大陸を渡り歩いていたが、聖主教会の総本山があるせいもあるだろうが、イオス大陸では魔族出沒率は他より低い。指揮官としても随分と久しぶりの実戦だ。

「フレリア、メリーを手助けしてやってくれるか？」

戦闘開始を宣言した所で、リオーニは肩に止まった『相棒』へ尋ねかけた。

「エー？ マア、イイケド……」

渋々と言わんばかりのフレリアに、リオーニは真面目な顔で念押しした。

「頼むぞ。…俺が行きたい所だが、こここの奴等を実戦経験がない者が多いし、指揮官は必要だろう。それにこの場はメリーが行くのが適任だろうしな」

「リオーニ総統官、そのような気遣いは必要ありません」

気の進まない様子のフレリアに対し、ディスティエルもそんな事を言い出す。

元々、相性が良くない事がわかっているが、この非常事態にそんな事は言ってはられない。リオーニは厳しい表情のままディスティエルとフレイアを見据えた。

「氣遣いじゃない、メリー。これはこの場を任された大将としての判断だ。確かにお前は副総統だが、今まで人を指揮などした事はないだろう?」

「そ、それは、そうですが……」

リオーニの指摘にディスティエルがぐつと詰まる。

「そして指揮をするのに武器はいらん。ならば、必要とする者が使うのは理に適っていると思わないか? フレイア」

「…思ウケド……」

フレイアも悔しげに言葉を濁した。

普段ならどちらかと言うと言い負かす側の二人が、リオーニに一方的にやり込められている。もし、この場にエミリオがいたならさぞ目を疑った事だろう。

「なら決まりだ。百年物の法陣でも足止めしていられるのは時間の問題… つべこべ言わずにさっさと行け!!」

最後の容赦ない一喝に、ディスティエルとフレイアは返事もそこそこに、追いつてられるようにマリオーゾの町へ向かって駆け出した。

その背を見送ったリオーニは疲れたようにやれやれと肩を竦めると、すぐに表情を改める。

「総統! 西方に魔族の反応が!!」

「…やっぱり来たか。法陣がある間は近寄って来れないだろうが油断はするな」

おそらく魔王目当てに魔族がここに押し寄せて来るだろうと予測はしていた。

人がその復活を恐れているように、魔族は魔王復活を心底待ち続けていたはず。だが、やすやすと来させる心算は全くない。魔族に『魔王』を渡す訳には行かないのだ。

正直に言えば、『魔王』が復活するのならそれはそれで構わない。不謹慎だとは思うが、それが今のリオー二の本音だった。

実際、教会は魔族を討伐する使命を帯びてはいるものの、彼等を完全に撃ち滅ぼす事は認められていない。

『人』と『魔族』は表裏一体。お互いを映す鏡。

人が完全な善人であれないのは、魔族が自らの影として存在しているからだという。そして影がなくなれば、人もいつか滅ぶ。何故なら人は完全である『神』ではないから。

どちらも神の創造物。この世において、『魔族』は必要悪なのだ。もし魔王が復活するというのなら、それもまた必然だと言えるだろう。

（だが　チビが『魔王』になるのは認められない）

このまま彼を魔族に奪われれば、もう二度と『エミリオ』という少年に会う事はない。それだけは確定だった。

託宣が曖昧であつた事もあり、教会本部でも今まで魔王復活がどのようにして行われるのか数多く議論されたが、流石に魔王が人間の子供として育てられる可能性までは考えが至っていなかった。

『救世主』が何処の誰であつたか謎に包まれているように、『魔王』がいかに誕生するのか誰も知らない。

エミリオが攫われた事が判明した時も、エミリオ自身が魔王であるなど、リオー二もディスティエルも思っていなかった。

攫われたのは魔王復活の『器』にする為　あくまでも被害者でしかないと考えたのだ。

だからこそ、彼等はエミリオを取り戻す事に熱意を傾ける。

リオー二もディスティエルも、フレイアも。そして彼を知るマリオーゾの住人達も。誰もがエミリオが無事に戻る事を望んでいた。

（…頼むぞ、メリー、フレイア）

次々に飛び込む報告へ即座に指示を飛ばしながら、リオー二は祈るような気持ちで上空に縫い付けられた少年を見つめるのだった。

母と魔王（１）

マリオーズ上空で、魔王は不愉快になっていた。

地上から伸びる、白い光。全身に糸のように絡みつくそれが、身体の自由を奪っている。力任せに引き千切ろうとすれば、反発を起こすように青黒い稲妻が生じ、身体を痺れさせた。

鬱陶しい。

その煩わしさに顔を顰め、魔王は考えた。

どうしたらこれから自由になれるのか。無理に外すのを止め、改めてその糸の源を見る。

大地に描かれた巨大な法陣。どうやらこれは魔力そのものに反応する法陣らしい。試しに指先に魔力を放出してみると、たちまち稲妻が生じて相殺した。

魔力の発生源を感知し、相殺という形で魔力を無効化する

魔力が生命力とも言い換えられる魔族にはひとたまりもないだろう。魔族の王であるが魔族そのものではなく、通常の魔族など足元にも及ばない魔力を有する『魔王』だからこそ拘束程度で済んでいるのだ。

という事は、ここにある力を飽和させる程の魔力を出せばどうだろう。

規模こそ大きいが、所詮は人が作りあげたもの。こめられた力にも限りがあるはず。しかし、それは不可能な事ではないものの、無駄に疲労する事になりそうだ。

次に周囲を見る。この法陣を有効にしているのは、一見雑然としていて、実は規則的に描かれていた道だ。ではその道を崩してみたらどうだろう？

それなら魔力を無駄に使う必要はない。先程までいた地下水路にあった水。あれを操って水路自体を壊せば、その上にある建物や道は崩壊する。

これだけの規模の術ともなると、むしろそうしたものの方が効果
が大きい事もある。魔王は誰からも教えられずに、その事を知っ
ていた。

そうしよう。

早速実行に移そうと魔王が地下に意識を向けた時、地上から何か
が自分に向かって来るのを感じ取る。何だとそちらに目を向けると、
何か赤いものが視界に入った。

翼だ。鮮やかな赤い翼が、力強く羽ばたきながらこちらにやって
来る。

だが、それは鳥にしては変な形をしていた。遠目で見ると鳥より
は虫の方が近い。翼に対し、身体に当たる部分が細長く色も黒かつ
た。

それは瞬く間に距離を詰め、やがてそれが背に巨大な翼を生やし
た人間である事が判明する。

「…エミリオ……!!」

やがて届いた声は、何故かよく知っているような気がして
同時にその声の主に関わってはいけないような危機感を感じた。

「エミリオ、目を覚ましなさい!!」

おそらく普通の人間ならばとくに目が眩んでいる超高度にあり
ながら、声の主　　ディスティエルは恐れなど欠片も抱いていな
い様子で距離を詰めてくる。

余程肝が据わっているか、単にその高さに意識が行っていないか
どちらかだろう。

そのどちらでも魔王には無関係な事だが、向かって来るその相手
に対し、関わりたくない　　そう思うのは何故だろう。

相手は見る限り普通の人間だ。こちらが本気になれば、一瞬で消
し飛んでしまうような弱い存在なのに。

「エミリオ!!」

「……うるさい……ッ」

初めて聞くはずの女の声は、魔王の心に何故か波紋を広げる。ただでさえこの絡みつく光の糸でイライラしているのに。

聞きたくない。その声は、『何か』を呼び起こす。奥底に閉じ込めたはずのそれが、目を覚ます気配がする。それは自分にとって不要な部分で、このまま消えるはずの部分だった。

冗談ではない。自分は『魔王』だ。他の何者にも支配される事は許されない。たとえ、それが自分の一部であっても。

それ以前に、自分は『エミリオ』などではない。！！

「邪魔を、するなあああッ！！！」

「！！！」

力任せに腕をなぎ払った。その手から不可視の魔力が刃のように放たれる。

すかさず放出された魔力に反応して発生した稲妻が、魔王のみならず側にいたディスティエルにも向かって走った！

バシユンッ！

何かが蒸発するような激しい音と共に、眩しい光が放たれる。

魔王すらも余波で腕が痺れるほどの衝撃である。生身の人間ならばひとたまりもない。…そのはずだった。

「！！」

しかし光が収まったそこに、まだ彼女の姿はあった。流石の魔王も軽く目を見張る。

「……助かりました、フレイア」

『仕方ナイデシヨ！ アタシマデ消エル所ダッタシ、ツイデヨツイデー！ ソレニ…頼マレチャッタシネ』

驚く魔王の前で、ディスティエルが礼を述べた。鳥の姿を取っていない為、直接的な声ではなかったが、フレイアがいかに仕方がなくとばかりに憎まれ口を叩く。

先程の光は、フレイアがいかなる手段でか稲妻を消滅させた際に生じたものだったらしい。

今はデイスティエルに背にあり、彼女に飛行能力を与えているが、そもそもはその為の存在ではない。

時として武器に、時として盾に 時期に応じてその形態を変える生きた武具なのだ。もっともその事を知る者は教会に属する者でもごく少数しか存在しないのだが。

「わかっていきますよ。しかし…どうやら少し荒療治の必要がありそうですね……」

出来る事ならば、彼の身体に傷をつけたり苦痛を与えたりするような事は避けたかったのだけれども。そして何より、エミリオをこの手で育てる事を決めてから、自分は二度とあれを手にしないと心に誓ったのだ。

だが、最初から語りかける程度で『エミリオ』が戻るとは思っていない。長い年月をかけて作りあげられたこの法陣の効力も、魔王相手ではあと僅かももたないだろう。

手段を選んでいられる余裕はない。

デイスティエルは心を鬼にすると、その手を組み精神を集中させた。…そして。

「 我は汝を召喚す」

およそ十年ぶりに口にしたその言葉に、周囲の空気がピンと張りつめた。

「我が名はメリッサ。汝と契約を結びし主なり。来たれ、死神の使徒…『イグラドル』！」

「……！！」

ぞわり、と背筋を戦慄が走り抜け、魔王はそんな感覚を覚えた自分に驚いた。今のは何だろう。もしか『恐怖』だろうか？

まさか。

この自分がそんな感情を抱くなんて有り得ない。浮かんだ疑問を自分で否定し、目の前に浮かぶ聖女に改めて目を

向けると、デイスティエルの手には、先程までは確かになかったものがいつの間にか握られていた。

全体の色彩は灰色に近い鈍い銀。微かに纏う光は、今自分を絡め取っている光と同質のもの。すなわち、魔力を無効化する力を持つ事を示していた。

一見杖のようにも見えたが、細長く伸びた先には杖にはないものが冷たい輝きを放って存在している。

それは刃。緩やかな弧を描き、先が鋭く尖ったその姿は、明らかに鎌と呼べるもの。

繊細な細工が施されているので殺伐とした雰囲気はないが、魔王の目には禍々しく見えた。彼にはそれが何か本能的にわかったのだ。それは「闇」を刈り取る為の武器。

「魔王よ、警告です。今すぐ、その身体を解放しなさい」

かつて数多くの魔族を屠^{ほふ}った『死神の鎌』を構え、デイスティエルは魔王へ敵かに告げた。

+ + +

『チョ、チョット！ ソンナ物騒ナ物出シテドウスルツモリ！？』

背後からフレイアが声なき声で慌てる。

『イクラ何デモ、ソンナノデ攻撃シタラ…チビガ無傷デ済ム訳ナイジャナイ！！』

イグラドールは意志を持ち変幻自在のフレイアと違い、通常の武器でもある。魔族に特に有効ではあるが、人ですら傷つけられる威力を秘めていた。

しかし、鎌を構えたデイスティエルの返答は落ち着き払ったものだった。

「…口で言っただけ聞いてくれる状態だとしても？」

『ダカラッテ……！！』

「私とてエミリオを傷つけたい訳じゃありません」

言いながら久々に握った得物の具合を確かめるように、二三度振り回す。

随分久し振りだというのに、それはまるで身体の一部のように動いた。ヒュンツ、と鋭く空を切る音は、昔と一つも変わらない。

二度と振るわないと誓ったはずのこれ　　イグラドルを出したのは、これが魔族にとつて脅威になるとわかつての事だ。

実際、イグラドル召喚した途端、魔王の表情が幾分強張ったものになっていた。本人にその自覚があるのかまではわからないが、拒否反応のようなものを抱いているのは明らかだ。

エミリオと同じ顔でそのような表情は見なくなかったが、仕方がない。今、己の前にいるのは、闇の王たる魔王なのだから。甘く見ればこちらの命がない。

「…さあ、魔王。あなたが真の闇の王ならば、これがどのようなものかわかるはず。そこに囚われている状態で、この切っ先から逃れられはしないでしょう。…あなたを狩るつもりはありません。ただ、今あなたが支配しているその子を返して欲しいだけです」

そうすれば何もしない　　言外に訴える言葉に、魔王はどうしたものかと考えた。

確かに分はこちらが悪い。

あれを受けた所で魔族ではない自分が消滅する事はないが、それでも傷くらいは負うだろう。深手を負えば少々厄介な事になるに違いない。

まだ成長しきっていない上に、目覚めたばかりのこの器はおそらくとても脆い^{もろ}。だが、だからと言ってその要求を飲めるかと言えばまた別問題だった。

何しろ返せと言われても、この身体は元々自分の物だ。他の誰かの身体ではないのだから。

「…これは、オレの物だ……」

デイスティエルの要求は、半ば『死ぬ』と言っているようなものだ。

今の魔王に『エミリオ』だった時の意識も記憶もない。

自分が『魔王』と呼ばれるものであるという認識しかないそんな彼に、デイスティエルが何を望んでいるのかわかるはずもなかった。「何故、お前などに渡さなくてはならない……!!」

「!!」

理不尽さに魔王がその怒りを露にすると、放出された魔力に周囲の光が反応し、たちまちその場は先程までの比ではない青黒い稲妻に支配された。

母と魔王（2）

『…ヤバッ、退避スルワヨ！ 流石ニコレハ無理！！ 魔王ハコノ法陣ヲ力尽クデ破壊スル心算つもりダワ…！！』

デイスティエルディステイルの背で、フレイアが悲鳴をあげる。

これだけの規模の法陣である。しかも相手は魔王。その許容限界を超えた時、魔力と相殺し合った反動によって周辺にどれ程の余波を与えるかわかったものではない。

少なくとも世界地図上から『マリオゾ』という名の町が消え去るのは確実だろう。否、それだけで済むかどうか。

半ば本能的にその場を退避しようとしたその時、フレイアは何かがプツンと切れるような音を聞いた気がした。同時に嫌な予感が走る。

（…マ、マサカ……）

今すぐにでもこの場を離れたい、そんな焦りを感じていると、地獄の底から聞こえてきそうな声が極至近距離で紡がれた。

「『お前』、ですって……？」

それは正に一触即発の危うい空気が漂う眩き。それを耳にしたフレイアは、慌ててデイスティエルを制する。

『メ、メメメ、メリー！ 落着イテ！！ コンナ不安定ナ所デソ
ンナノ使ツチャ駄目ー！！』

しかし何かが切れてしまったデイスティエルに、彼女の悲痛の叫びは届かなかった。

「育てのとは言え、仮にも親に対しその言い草は何ですか
……」

怒号と共に、銀の一閃。

それは風の刃となり、瞬時に魔王の頭の横を恐ろしい速さで通り

抜けた。

「……ッ」

ぴりつとした痛みで魔王が反射的に頬へ手を伸ばすと、指先に赤い色がついた。

次いで何処か遠くで、派手な水しぶきが上がる音。今の一撃はマリオーゾを遥かに超えて、エンテ海にまで届いたらしい。

「フレイア！ 魔王の元へ行きなさい！！」

怒り心頭と言わんばかりの勢いでディスティエルが命じる。

『冗談じゃないワ！？ 無茶言ワナイデ！！』

「フレイアッ！！」

いつもの冷静さは何処へやら、形相すらも変わっているディスティエルに、だからこの女は苦手なのよ、とフレイアは心の中で泣き言を漏らした。

かつてリオーニが指導教官としてディスティエルについていた頃、数度その補助として組んだ事があるのだが、その頃からリオーニ以上に鳥使いが荒かったのだ。

流石に年齢に応じて少しは落ち着いたかと思えば、本質的な部分は変わっていないらしい。

その気になれば無理矢理にでもここを離れる事が出来るが、その事で自棄になった彼女が無差別に攻撃を飛ばし始めたらどうなる事か。

風圧だけでもあれだけの破壊力があるのだ。マリオーゾ周辺に控えてこちらに向かってくる魔族に対応している、リオーニ以下の聖職者達にまで被害が出かねない。

怒りに我を忘れても、そうした事は無意識の内にちゃんと認識していて、こちらがおいそれと断れないとわかった上で無茶を言うのだから性質が悪い。

今の一撃で逆鱗に触れたのか、こちらを見る魔王の目が据わっていた。

先程切れた右頬から滴る血とその目だけで、あの無邪気だった顔

が凶悪に見えるのだから不思議なものだ。

バチバチと一層激しくなる稲妻で、法陣の力が目に見えて減ってゆくのがわかる。これが消えてしまったら、恐らくもう機会はない。『モウツ、ワカタワヨ！ ヤレバイインデショ、ヤレバー！！』

そして、フレイアも自棄になった。立ち向かうにしても、逃げるにしても時間がない。行動を起こすなら今しかなかった。

使える力を全て使い、魔王に向かって飛ぶ。

イグラドールを構えたデイスティエルの意図が何処にあるかはわからないが、その命が狙いでない事を祈るしかない。

襲いかかる稲妻を弾き返ししながら、フレイアは飛ぶ。ダメージこそないが、デイスティエルをその衝撃から守る為に、その動きは速いとは言いがたいものだった。

だがその稲妻の嵐へ再び銀の光が走る。元々、この世界に属しない死神の鎌は荒れ狂う稲妻を切り裂き、道を切り開いた。

来る。

魔王は迫り来る刃から逃れる為、持てる魔力を可能な限り放出した。

その分、戻って来る衝撃は今までの非ではないが、この厄介なものから自由にならなければ、死神の鎌が襲ってくる。

「……う、ああああああっ！！！」

今まで以上の力が魔王周辺に放たれる。相殺によって生じる稲妻は先程の比ではない。フレイアでもその全てを避ける事は不可能だ。その穴をかくぐって遅い来る衝撃を、デイスティエルのイグラドールが切り裂く。

魔王まであと僅か、という距離で魔力の放出が止まった。

先程の放出は丁度、法陣の力を相殺するだけの強さを秘めていたらしい。ふつつ、と糸が切れるように、光が消え失せる。法陣が無

効化してしまったのだ。

（間二合ウカ！？）

同時に翼にかかる負荷がなくなり、フレイアは一気に速度を上げた。

魔王はすぐには動けないのか、荒い呼吸をつきながらその場に留まっている。

今のでかなりの力を消耗したはずだが、相手は魔王だ。拘束がなくなつた今、その力を妨げるものはない。

フレイアとディステイエルは、そのまま魔王の身体に体当たりするような勢いで風を裂いて突っ込んで行く。

その接近を察知してか、魔王が俯いていた顔をこちらに向ける。光が消えた為、その表情は見えないが、避けようとする素振りは見取れた。

「フレイア、このまま！！」

『ハイハイハイ、ワカッタワヨッ！！』

考えている余裕はない。このまま逃げられる訳には行かない事はフレイアも理解している。

このまま突っ込めという指示に従い、フレイアは更に速度を増した。まるで赤い矢のように、彼女達は魔王に突き進む。

そして。

「！？」

攻撃をしてくると身構えた魔王の意表を突いて、ディステイエルはその小さな身体を片腕で横抱きにするように捕まえた。

てつきりイグランドールで攻撃するとはかり思っていたフレイアもこれには驚いたが、そのまま速度を維持する。

「離せ……！！」

当然、捕まつたままにいる魔王ではない。怒りに満ちた形相で、ディステイエルを払い落とそうとする。

「離すものですか……！！」

対するディステイエルも負けずに腕に力をこめた。暴れる子供一

人押さえつけられずに、子育てなど出来るものかとばかりにがっしりと腰を抱え込む。

先程魔力を消耗しすぎたのか、それとも本来の肉体能力は変わらないのか。魔王の抵抗は年相応の子供のものと大差がない。

だが暴れる子供を押さえつけるには、場所が悪すぎた。足場のない空中という不安定な場所で、人二人（しかも片方は暴れている）を支えるのは流石のフレイアも至難の業だった。

『モ、モウ、無理イイイイ……！！！！』

フレイアが絶叫し、その翼が安定を欠く。

結果として魔王とディスティエル、そしてフレイアは、そのままもみ合う形で地面へと落下する。

ドオオオオオン……！！！！

落下の瞬間、激しい地響きと土煙が生じ、マリオーゾの外で成り行きを見守っていた人々は思わず顔を見合わせ、次いでさあっと青褪める。

今の音と衝撃では、普通なら生きていられるとは思えない。

リオーニですらも、あまりの事に言葉も出なかった。先程ディスティエルがイグラドルで攻撃を仕掛けた時も肝が冷えたが、今はその時の比ではない。

「リ、リオーニ総統……」

おそるおそるといった様子で、側にいた青年が硬直したリオーニに声をかける。

その声にはつと我に返ると、リオーニはすぐさまその場にいる者たちに指示を出し、数名を伴って二名と一羽が落下した地点へと向かった。

落下地点は彼等のいる場所の街を挟んで正反対。法陣が機能した事で街自体にどれだけ影響が出たかわからない以上、迂回して行くしかない。

（生きてろよ…チビ、メリー）

元々生物ではないフレイアは無事だろうが、その二人に関しては楽観的には考えられない。場合によっては最悪の事態も有り得る。

落下地点へと急ぎながら、今の彼に出来るのは彼等の無事を祈る事だけだった。

母と魔王（3）

現場は見事に地形が変わっていた。

その衝撃の大きさを示すように、木々は嵐が過ぎ去った後のようになぎ倒され、大地は大きく陥没している。普通なら生きているどころか、五体満足であるかもわからない状況である。

だから彼等は、落下地点と思われる場所でも人らしき姿を見た時はその目を疑い、次に見間違いないと理解した瞬間、我先にと駆けだしていた。

誰よりも先に走り出したのがリオニだった事は言うまでもない。土煙が邪魔し視界がはつきりしない中、その人影が動いた時は彼等は歓声をあげた。

生きている！！

これぞまさに神の奇跡だと誰しも思ったが、結局、彼等はその発見を純粹に喜び合う事は出来なかった。

というのも、もうもうと落ち着く気配のない土煙に咳き込みつつ、彼等が落下点に辿り着いた時、彼等が見たのは魔王に馬乗りになって、スパーンとその頬を叩く^{はた}デイスティエルの姿だった。

「……………」

「……………」

「……………」

後になればなるほど、沈黙が重くなる。

一同、声もかけれる事が出来ずに立ち尽くした。傍目では年端も行かない少年を折檻^{せうかん}しているかのようなだが、問題はそこではない。

あれだけの落下でありながら、二人に怪我らしい怪我がないとい

うのもすごいが、まさか魔族の王たる魔王を素手で殴るとは。

見守る彼等の存在に気付いていないのか、デイスティエルはぐつと魔王の胸倉を掴み、未だ収まる様子のない怒りに満ちた表情で一喝した。

「私は親に対して『お前』などと呼ぶような礼儀知らずに育てた覚えはありませんよ！！」

しかも怒鳴りつけた言葉がまた、魔王に対して言う言葉ではない。彼等はただ呆然と目の前のやり取りを見つめる事しか出来なかった。すでにデイスティエルの手にはイグランドールの姿はない。落下の直前に大地へ一撃を振るう事で落下の衝撃を和らげた後、その召喚を解いたのだ。

流石に骨の一本や二本は覚悟していたものの、フレイアが何とか踏ん張ってくれたらしい。デイスティエル自身は軽い打ち身程度で済んだ。

魔王に至ってはデイスティエルがしっかりと抱え込んでいた事も幸いしてかどうやら無傷のようだ。その事にほっと安堵する。

元々、デイスティエルの目的は魔王を傷つける事ではない。魔王から我が子を取り戻す事こそが目的だ。

たとえ魔王に支配されようと、デイスティエルにとって目の前にいるのは、『エミリオ』という少年でしかない。

血こそ繋がっていないなくても、我が子と思って育ててきた以上、立派な大人になるまで育てる事こそ『親』の使命だと信じていたし、まっすぐに育つエミリオの姿を誇らしく感じていたのだ。

だからこの場合、デイスティエルは聖女としてではなく、『母』としての自分を優先した。

基本的に聞き分けの良かったエミリオだけに、今まで殴りつけてまで叱り飛ばした事はない。手を出す必要がなかっただけでなく、血の繋がりがあある訳でもない自分にそこまでする権利はないと思っ

ていたからだ。

けれど　　デイスティエルはあえてその一線を越えた。

どうしたら魔王からエミリオを取り戻せるのかわからない今、形振りなど構ってはいられない。ただ、自分の声がエミリオに届く事を祈るばかりだった。

対してデイスティエルに殴られた魔王は一体何が起こったのかわからないという表情で、ぽかんとデイスティエルを見つめている。その頬が早くも赤く腫れつつあるが、気にならないらしい。

何が何やらなのはリオー二達もだった。うかつに声もかけられず、かと言って目の前にいるのが『魔王』である事を考えると気を抜く事も出来ない。

行動に困っていると、バサバサと羽音を立ててデイスティエルからようやく解放されたフレイアが飛んで来る。

「リオー二~~~~」

反射的に差し伸べた腕に止まった姿は、見る者に憐れさを誘う程にずたぼろだった。

「フレイア…何だか、その、大変だったみたいだな……」

「大変ダツタ、ジャナイワヨ!?　モウ二度ト嫌ダカラネ!!　メリーノ手伝イスルノ!!」

半泣きで訴えるフレイアをよしよし、と宥めつつ、^{まだ}リオー二は再びデイスティエルと魔王に目を戻す。

デイスティエルの説教はまだ続いていた。

「見なさい、この惨状を!!　あなた一人の為に、これだけの物が失われたのですよ!!」

びしつと指で指し示す先にある破壊されつくした周囲の様子を眺め、

いや、これはほとんどあなたの仕業だろう

リオー二以下、数名は心の中で突っ込んだ。

確かに魔王が法陣の支配から抜け出した後に全力を出していたなら、おそらくこの程度では済まなかったに違いないが、今の時点で

魔王による直接的な被害は最初の火柱による穴だけである。

魔王の魔力に法陣が反応して生じた稲妻によって、マリオーゾの街には相応の被害が出ている事が考えられたが、それでも完全に街自体が消滅する可能性があった事を考えれば被害は予想以上に小さいと言える。

伝説の武器の一つ、イグランドールの所持者がとんでもない破壊魔で、通った後には雑草も生えないという噂があった事を今さらながらにぼんやりと思いだす彼等だった。

その事実を知っていたリオーニですら、久々に目の当たりにした破壊つぷりに正直苦笑いしか浮かばない。

そんな呆れの混じった視線を受けてようやく彼等の存在に気付いたのか、それとも彼等の心の声でも読んだのか、デイスティエルがギロリと恐ろしい視線を向け、彼等は思わず身を竦めた。

そこにいる魔王よりもよっぽど恐ろしい。

当の魔王はまだぼんやりとしていた。衝撃のショックか、それとも先程法陣を破壊した事で虚脱状態になっているのか。

早くも赤く腫れた先程叩かれた頬（この辺は親切にも、切りつけた側とは逆の頬だった）を押さえ、その大きな瞳を^{まなじり}を釣り上げるデイスティエルに向けている。

それを良い事に、デイスティエルは掴んだ胸倉を引き寄せ、顔を近付ける。真っ直ぐにその目を見つめ、ドスの効いた迫力満点の声で言った。

「こんな時にどうしたらいいか、私はすでにあなたに教えているはずですね？」

十年前に立ち寄った辺境の村で倒した魔族が抱えていた赤子。

成り行きで育てる事になり、何とかなるだろうと自分に言い聞かせたが、自信などこれっぽっちもなかった。

デイスティエルに、母の記憶はない。あるのはろくでもない父との弱肉強食な日々ばかり。母の愛情を知らない己に、子供など本当

に育てられるのかと思つたものだ。

聖女になりたいと願ひ、魔族を屠る退魔師を嫌い、父の元を離れ入つた総本山で、デイスティエルは孤独だった。

人との関わり方を知らず、本音と建前の使い分けなどしない彼女はとかく無駄に敵を作りやすかつたのだ。

リオーニと出会い、少しはそうした事も改善されたが、最初に出來た偏見はなかなか消える事はなかつた。果たして心から笑つた事など、一体幾度あつただろう。

そんな自分が自然に笑えるようになったのは。

(エミリオ、歸つて来なさい)

ひよつとしたら無駄かもしれない。それでもデイスティエルは言葉を重ねる。

「さあ、エミリオ」

(私達は 血が繋がらなくとも、『家族』のようなものだった。そうでしょう?)

そんな彼女の言葉をリオーニ達も固唾を飲んで見守る。デイスティエルがどんな気持ちなのか、彼等なりに察した為だ。

だ。

「『ごめんなさい』は?」

魔王にそれを言うか!?

再び心の中で盛大に突つ込んだ彼等だった。まるで幼児に対するような態度なのが余計に理解に苦しむ。

おそらく、『エミリオ』ならば子供扱いするなと憤慨した事だろう。しかし、魔王はその言葉に対して怒り狂つたりはしなかつた。

沈黙する事、しばし。

やがてその口から、驚くべき言葉が零れ落ちたのだった。

「……ごめんなさい……」

「!!??」

驚いたのはリオ二達だけではなかった。

それはまるでディステイエル の迫力に負けてのものようだったが、紛う事ない謝罪の言葉。

憑き物が落ちたような顔で目を丸くしたディステイエルは、たっぷり数秒は黙り込み やがて震える声で尋ねた。

「エミリオ?」

「……」

魔王はその問いかけには答えなかった。正確には答える事が出来なかった、とも言う。

そのまま魔王は幾度か瞬きをしたかと思うと、突然力尽きたように意識を失い、パタリと倒れてしまったからだ。

慌ててその身体を抱き上げたディステイエルと、ようやく近寄る事が出来たりオー二達が何度も呼びかけるが、その目が開く事はなく。

しかし、脈は正常で呼吸も落ち着いている事もあり、最悪の事態は避けられたと彼等は結論付けた。

意識を手放したエミリオをリオ二が背負い、ひとまずその場から運び出す事になった。傷ついた右頬を布で拭いながら、普段の調子に戻ったディステイエルはほっとした顔でぼつりと呟く。

「お帰りなさい、エミリオ」

それは時と場合によつては非常に感動的な言葉ではあったものの、周囲の崩壊と先程までの様子を見てしまつては感動もへつたくれもない。

だが少々過激なこれもいわゆる母の愛が為した奇跡なのだろう、と彼等の後ろに続く人々は苦笑いを交わし、やれやれと肩を竦めた。

エピソード

翌日も、マリオーゾは晴天だった。

正しくは、マリオーゾだった場所、と表現すべきかもしれないが。

町の一部が完全に崩壊、そうでない所は半壊し、ついでに地面に大穴が開いてしまったところが、再び元のような姿に戻るには、相應の月日がかかるに違いなかった。

取り合えず一夜が明け、マリオーゾに向かってきていた魔族達を追いつめた彼等は、家が残っている者はそこへ、運悪く失ったしまった者は無事だった者の家などに世話になる事にしてひとまずの解散に落ち着いた。

マリオーゾ唯一の聖所はあの騒ぎの中でも奇跡的にほとんど被害がなく、リオー二達はおよそ半日振りに古巣へと戻る事が出来た。そこへ戻る間もリオー二の背で一度も目を覚まさなかったエミリオの状況は心配だったが、彼等は全員疲れ果てていた。

魔族を倒す事が本来の仕事とはいえ、魔族が弱体化している事もあり、ここまで大がかりな戦闘は滅多にあるものではない。

それぞれ自室で休息を取り、夕刻になって再び目を覚まして、やはりエミリオは起きる気配を見せなかった。

一日が過ぎ、二日が過ぎ　　流石にこれだけ目覚めないとなると心配になってくる。

どうしたものかと考え、医者に診せてもただ眠っているだけで、何処にも異常は見られない、まったくの健康そのものだという答えが返ってくるばかりで彼等は困惑した。

そして、いくら何でもこれ以上はと思った五日目。

こんこんと眠り続けていたエミリオがようやく目を覚ました。

再び目を覚ますのが魔王である可能性がない訳ではなく、リオー二もディスティエルもその枕元で気が気ではなかったのだが、目を

覚ましたエミリオの第一声と言えば。

「…何で二人してそんな所にいるのさ」

という、実に呑気かつ怪訝さを隠さないものだった。

ついでに左右の頬の傷や腫れの名残りに、これ以上にない程に疑問符を飛ばしたが、その辺は軽く無視する事にして。

いつも通りのエミリオの様子に一気に緊張が解け、安堵した彼等は困惑するエミリオを余所に、良かった良かったと喜んだのだが。

+ + +

「…覚えていない？」

「ええ、どうも魔王に支配されていた時だけではなく、魔族に攫われた前後からさっぱり記憶がないらしいみたいです」

やがて判明したその事実、二人は顔を見合わせる事になった。

取り合えず目覚めたのがエミリオであった事から、魔王復活は阻止された事になってはいたが、そうですかと簡単に片付けられるはずもない。

教会側からは、魔王の器とされたエミリオからその際の詳細をよく聞き出せ、という指令が来ていた。

今後の予防策を講じる為にも、確かに魔族がどのようにして魔王を復活させたのか知る必要性があった。何より、何故魔族がエミリオを器に選んだかが最大の謎だ。

少なくともその時点で、魔族側にはマリオゾの住人が全て教会関係者である事は知られていなかったはずで、誰が選ばれても構わなかったはずなのだ。

…未だ彼等は、エミリオ自身が魔王だったという可能性を完璧に見落としていた。

「どうしましょう」

「どうするたって…覚えていないもんはどうしようもないだろう」

「ですが、このままではエミリオは満足に外も出歩けなくなってしまう」

「…うーん、確かになあ……」

教会からは、マリオーゾに再び魔族が雪崩れ込む可能性があるとして、エミリオの身柄を要求する動きすらあるのだ。

総本山にエミリオを預ける事自体は、どうしても言いくるめる事が出来るかもしれないが、問題はそこで彼がどのような扱いを受けてしまうのか、という事だった。

全く覚えていないとなると、身に覚えのない事で行動の自由を奪われ、最悪一生閉じ込められてしまいかもしれない。

血の繋がりはないが、エミリオを実の子のように思っている二人には、それはとても耐え難い事だった。

だがここにいたとしても、同じような事が起こった時、また守る事が出来るかという点、断言出来ない。今回ののは、本当に準備と運が良かっただけに過ぎないのだから。

運悪くこの時期にマリオーゾに滞在していた旅人達へは、今後の道中の『魔除け』と称して昨夜の出来事に関する記憶を夢と思いこむよう暗示をかけてはいるが、崩壊した街までは誤魔化せない。

今後またエミリオが『魔王』に支配されるような事があれば、流石に『魔王』の存在を隠す事は難しいだろう。

教会だけでなく世界中の人々が敵に回ってしまつては、いかにマリオーゾの住人が望まなくてもその器ごと滅ばさざるを得なくなる。

「…一番いいのは、チビが自発的に教会に入る事か」

しばし考え込んだ後、リオーニが苦し紛れな様子で呟くと、ディスティエルも同じ考えに至つたらしく、そうですなと頷いた。

「無理に閉じ込めては、良い結果にはならないでしょう。…でも、自分で決めた事ならやり遂げる子です」

「だが…なあ。それが一番難しい手な気がする……」

エミリオが聖職者に興味がない事を知る二人は、重いため息をついた。

今まで自分達と同じ道を勧めなかったのは、自分達が正しくは『聖父・聖女』ではない事もだが、何よりこの自由なマリオーゾで育ったエミリオが、教会の規律の厳しい世界に合うとは思えなかったからだ。

かと言って、せっかく忘れていたのに全てを告げるのはあまりに酷な気がする。

誰が言えるだろう

お前は魔王に支配されていた、などと。

まず信じないだろうし笑い飛ばすくらいしそうだが、それが事実だと知ったら、いくらエミリオでもショックを受けるに違いない。再びしばし考え込んだ二人だったが、結局出てきた結論は一つしかなかった。

「仕方がない、何とか口車に乗せるしかなかろう。これもあいつの為だ」

「……ですね」

第七退魔師団『マリオーゾ』の総統官と副総統官は、意見の一致を見ると、それぞれ頷きあつた。作戦が決まれば、後は実行するのみである。

こういう時の彼等の連携の良さは、他に追従を許さない。

そんなやり取りを窓の外から見ていたフレイアは、恐らく訳がわからないままに、リオーニの口車に乗せられてしまつてあるうエミリオを思い、気の毒にと同情した。

+ + +

その後、リオーニの口車に乗せられて、望まぬ聖職者の道に進む事になってしまうエミリオは、紆余曲折の末に『伝説の聖父』として後世にまで名を残す事になる。

…もつともそれは、偉大な功績を残したとか歴史に名を刻むよう

な事をした訳ではなく、『彼が行く先々には必ず魔族（大抵、その地方での大物）が現れ、結果としてその地方が平和になる』という、実にありがたくない『魔族ホイホイ』としての名声だったのだが。彼は生涯、自分が『魔王』である事を知らないままであったという。

これは闇の王でありながら、清く正しい道を歩いた『正しい』魔王の物語。

めでたし、めでたし。

エピローグ（後書き）

こちらの作品はHPの五周年記念に書いた作品の加筆修正版です。シリアスな話を書く事が続いていたので、ひたすらノリの軽い、楽しい話を目指してみました。いかがだったでしょうか。

『正しい』は魔王と育て方の両方にかかります（笑）

ノリが軽い分さくつと終わると思ったのに、蓋を開けると普通に長篇レベルだった訳で。

ついでに、一番最初はすごくベタな話にしようと思っていたので、主人公も魔王じゃなくて勇者の方だったんですが。

気がつくと魔王が主人公で、しかも属性が聖だったという（笑）
宗像はやっぱり天の邪鬼みたいです。

本篇はここで終わりですが、削ったエピソードを使い、ちょっと頑張ってボーナストラックめいたものを書いてみました（正確には現在進行形）

少し未来的一幕。宜しければそちらもどうぞご覧下さい。

正しい魔王の使い方（１）

昔、むかし。

かつてこの世は恐ろしい魔王が支配していました。

魔王の下僕である魔族や魔物は、我が物顔で人々を蹂躪^{じゅうりゃん}し、たくさんさんの命が失われ、たくさんさんの不幸が生まれ、たくさんさんの嘆きが世に満ちていました。

けれどもある時、絶望の中にある人々に希望の光が齎^{もたら}されました。

『勇者』。

吟遊詩人達にはそう謳われ、さらには神格化までされる事となつた一人の人物によつて、魔王は倒され、その死により闇の時代は終止符が打たれ、魔族達は次第に弱体化して行きました。

今では最盛期の十分の一、もしくはそれ以下にまで落ちたそれ等
はもはや人の脅威ではありません。

人の力でも十分対抗できるようになった存在となり、いつしかその姿を見る事の方が稀になっていったのです。

+ + +

そんな昔話を思い出し、少女は心の内で『嘘つき』と呟いた。

グルルウウウ……

音に直すとそんな感じだろうか。

獣の唸り声に似て、それとも違う、薄気味悪い声。

それが、少女の足先から数十歩先にいる『獣のようなもの』の口

から零れ落ちる。

嘘つき、ともう一度。今度は口の中で呟く。

（姿を見る事の方が珍しくなったって話だったじゃない……）

かくかくと震える膝。

気を抜けば腰が抜けてその場に座りこんでしまいそう。そうなるのが嫌で、必死に足を踏ん張る。

通常の獣に遭遇した時も、下手に背を見せては危険だと父親から言われた事を思い出す。でも　それは『通常の』獣であった場合だ。

尾が三つもあり、鋭い牙が口からはみ出し、緑を帯びた体毛はまるで鋼のような奇妙な光沢がある。どう見ても動物ではない。

それは、『魔物』と呼ばれる闇の生き物だった。

昔話では魔王が死んでから弱体化し、人の手でも倒せるようになったという事だったが、それは相応の装備と戦闘能力があつての事だろう。

丸腰の十五にも満たない少女に一体何が出来るというのか。

「う、…うっ…っ」

怖い。

怖くて怖くて、涙が出る。

でも、泣いてしまつたら余計に相手の姿を見失う。零れ落ちる涙を拭う事も耐えて、ただ少女は目の前の獣を刺激しないように努めた。

こうして待っていればいつか助けが来る、などとは思わない。そこまで都合の良い夢を抱けるほど、子供ではない。けれど。

（誰か……）

ついに獣が動く。

ほんの一駆けであつと言う間に縮まる距離。血を想わせる真っ赤な目が何処か楽しげに見えて、少女の心は恐怖する。

（誰か、誰か、助けて…っ）

唾液に濡れた牙が目前に迫ったその時だった。

「はいはいはい、オイタは駄目だよー」

「!？」

何処かからやけに呑気な声がしたかと思うと、目の前にいたはずの獣の姿が魔法のように消えていた。

一体何が、と思う矢先、やけに離れた場所から、ギャン！ と獣のものと思われる悲鳴があがる。

「危なかったねー、でももう大丈夫だよ」

何が何やらわからずに立ちつくす少女の視界に、ひょいと何者かの顔が飛び込んでくる。

その思いがけない近さにびくりと反射的に身を離すと、その人物自分より少し年上の少年だった は目を丸くした。

「あれっ、ごめん。驚かせ」

ゴンッ

「~~~~ッ!！」

言葉途中で謎の鈍い音がしたかと思えば、赤錆色の髪をしたその少年が後頭部を押さえてしゃがみ込んだ。余程痛かったのだろう、その黒い瞳が涙で潤んでいる。

一体どうしたのかと思うっていると、そこに第三者の声が飛んでくる。

「リド、てめえ…、あれ程先走るなって言っただろうが……!」
苛立ちを隠さない男の声。

その声がしたと思うと、目の前の少年の肩がびくつと跳ねた。おそるおそる振りがえるのにつられてそちらに目を向け、少女は息を飲んだ。

（……っ、っわ……）

そこにいたのは怒りオーラを背に背負った一人の青年。しかし、

少女が息を飲んだのはその怒りに対してではない。

（お、『王子様』だ……！）

表現にすると実に陳腐だが、それが一番しっくりくる表現だった。金色の髪に、海みたいな青い瞳。すらりと均整のとれた肢体。不機嫌そうな表情というのに、それも絵になる、まさに乙女がイメージする絵に描いたような『王子様』そのものの人物がそこにいた。鄙びた田舎にはまずいない人種である。思わず見とれていると、『王子様』と目が合った。

「……！！」

じろじろ見ていた自分に気付き、反射的に視線をそらそうとする前に、横にいた少年が口を開く。

「仕方ないでしょ、待ってたらこの子が危なかったんだから」

その言葉で我に返る。そう言えば自分はいきなり先程死にかけていたのだ。

慌てて周囲を見回すと、随分と離れた所に先程の魔物らしい姿があった。一体何があったのか、ぐったりと地面に転がっている。

（し、死んで……？）

「残念ながら、まだ死んでないよ」

「！」

まるで思考を見透かしたような言葉に、目を戻すと少年が後頭部を擦りながら地面に転がっている何かを拾い上げる所だった。どうやら先程少年の後頭部を直撃したのはそれらしい。

それは　男が持つにはやけに細身な短剣だった。どちらかと言えば女性の護身用のものに近い。ただ、そこには女性が持つ物とは異なり装飾らしきものは一切ない。

「いくら鞘があるからって、人の頭に刃物を投げるなんてひどいやぶつくさと文句を言いながら短剣を拾い上げた少年に対し、それを見事としか言えないコントロールで投げつけた相手は鼻先で笑った。

「それくらい避けやがれ。魔物相手に遊べるなら余裕のはずだろ。」

退魔師のくせして情けねえな」

「そういうエミリオこそ、もうちょっと口の悪さを治したら？　一応聖職者なんだしさ」

「うるせえ、一応は余計だ」

ぎゃいぎゃいと言い争いながらも、少年は短剣の鞘を抜きはらい、まるで少女を庇うように前に出る。青年も気がつくとすぐ側に来ていた。

完全に状況に置いて行かれている少女へ、少年は安心させるように微笑んだ。

「もう大丈夫だよ。あれはぼくが片付けるから」

まるで大した事のないように気軽に言い放つ。驚く彼女に、青年がいまさらのように口調を改めて口を開いた。

「心配は無用です。こう見えて、これは魔族の天敵ですから」

とどめとばかりににこりと笑う。　おそらく先程までのガラの悪さを見ていなかったら騙されたであろう、完璧な笑顔だった。

「人を物扱いしないですよ！　大体、この魔物がこんな人里近くまで来たのは、絶対にエミリオのせいだからね」

むっとした様子で少年が噛みつく。

「何だと？」

「自分が魔族に好かれやすい体質なの、いい加減に自覚になって」

青年はさらに文句をつけようとしたようだったが、会話はそこで途切れた。

目を回していたらしき魔族がのそりと起き上ったからだ。ぞくり、と背中を悪寒が走り、少女は無意識に自分を抱き締めていた。

なんだろう　　先程までとは何だか様子が違うように感じるのは。

一人で対峙していた時も怖かった。けれど今は　　まるでもつと怖いものを前にしているような恐怖を感じる。同じはずなのに、まったく違う生き物がそこにいるような。

そんな少女の様子に気付いてか、青年　　エミリオという名前

らしい　　の手が励ますように肩を包む。

「大丈夫。すぐに終わります」

何の根拠もないその言葉と、肩から伝わる温もりに、恐怖が僅かに薄れる。

無意識に向けた視線に、エミリオは微笑み

「それまで少し、おやすみ」

そんな言葉が聞こえたと思った矢先、少女の意識はぶつりと途切れた。

正しい魔王の使い方(2)

「…お見事。相変わらず上手いねえ」

ぱちぱちと手を叩く少年を、意識を手放した少女を抱きあげながら、エミリオがジロリと睨みつける。

「こんなものが得意でも自慢にならねえだろうが」

「うん、それはそうだけどさ」

相手の意識を奪う　暗示の応用だが、相手が警戒心を抱いていたらこうもあっさりとはかからない。

黙って笑っていれば理想の『王子様』そのものの外見なお陰なのか、老若男女問わずエミリオのそれはもはや達人レベルだ。

「流石に女の子の前で魔物かつさばく所を見せる訳にはいかないし、どうしようかなって思ってたんだよねー。いつもながら助かるよ」

のほほんとした笑顔で呑気に言い放たれる言葉は、随分と物騒だ。その身も蓋もない表現に顔を顰めながら、エミリオは一步下がる。

「いいからとつと片付けろ。お前の仕事だろ」

「はい」

へらりと笑い、こちらを警戒するように見ている魔物へと対峙するその背に声がかかる。

「…リドル」

「ん？」

「いや…なんでもない」

明らかになんでもないとは言えない様子だが、何が言いたいのかわからなく察して少年　リドルは小さく笑う。

「大丈夫だって。エミリオが『魔族ホイホイ』でも…ぼくがいる限り、滅多な事にはならないから」

誰が『ホイホイ』だ、と背後から不機嫌そうに飛んでくる声に肩を竦めて見せる。

彼が行く先々には必ず魔物が現れる。それは噂ではなく、限りな

く真実だった。魔物だけではない　場合によっては、それなりに力のある魔族までも姿を見せるのだ。

決して口にする事はないが、エミリオがそれを気にしている事をリドルは知っている。

普段は傲岸不遜で、とても聖職者とは思えない言動をするが、実はなんだかんだとお人好しな彼は周囲にその被害が及ぶ事を恐れているのだ。

性に合わない聖職者の道を選んだのもそのせいだし、彼が一点に留まらず、聖主の教えを伝道するという名目で各地を放浪するのもその為だ。

そして　自身に魔族に対して無力である事を恥じている。そして最終的に代わりに戦う事になる自分に対し、申し訳ないと思っているらしい。

（本当にばかだなあ、エミリオは）

『真実』を知るリドルは心の中で苦笑する。

そんな事を思う必要なんてないのに。実際の所、リドルがエミリオに半ば無理矢理同行しているのは、自分の都合による所が大きいのだ。その理由を話す事は出来ないけれども。

手にした短剣を軽く振る。その瞬間、その刃がするりと伸びた。それだけではない、心なしか刃も厚みが増している。

それでも魔物相手に振うにはいささか心もとない大きさだが、この剣の本質にはなんら影響しない。

「全部、片付けてあげるよ」

ごくごく軽い口調で言われた言葉に、背後でエミリオがため息をついたのが聞こえた。

「……後で泣くくせに」

ぼそりと付け加えられた言葉に思わず苦笑が漏れた。

だって仕方がない。たとえ相手が魔族でも、魔物でも、それは生き物だ。命があるものだ。

それを一方的に奪う行為に、自分はいつまでも慣れる事はない。

苦しくて、耐えきれなくて、心が壊れそうになるのを防ぐ為に、勝手に涙が流れるのだ。

「エミリオだって言ったじゃない。ぼくが魔族の『天敵』だって。それに」

一瞬だけ向けた視線は、エミリオのそれと合う。

真っ直ぐに向けられたそれは、これから起こる出来事を全て見届けるのだろう。その瞳に笑ってみせて、駆けだすと同時にリドルは言った。

「これがぼくの『役目』だからね！」

+ + +

初めまして、エミリオ。

それが初対面の挨拶。

今から五年ほど前、そんな事を言って突然目の前に現れた赤錆頭の少年は、それから一方的に自分に付きまといている。

ぼくの名前はリドルって言うんだ。これからよろしくね！

『これからよろしくね』という言葉は、結局の所、『これから（ストーリーカーの如く付きまとうけど）よろしくね』という意味だったらしい。

終点などない、放浪の旅。世界を渡り歩きたい、という子供の頃の夢は結局そんな違った形で叶った訳だが、こんな余計なオマケがついてくる予定はなかった。

正直何を考えているのかわからないし、鬱陶しいし、その目的も未だにわからない。

そもそも同行を許した記憶もないのに、いつの間にか当たり前の

ようについて来る彼の事を、エミリオはどう扱っていいのか、いまいち図りかねていた。

リドルの事について知っている事は数えるほど。

名前以外なら教会関係者（しかも魔族討伐を専門とする退魔師）らしいということ、『リドル』という名前が表している通り天涯孤独であるらしいこと（『リドル』とは『男の子』という意味で、孤児につけられる一般的な名前である）、辛いものが苦手という程度しか知らない。

こちらから尋ねた事がないというのもあるが、何となく必要以上に踏み込んではいけないような気がしてならないのだ。

たとえば結構な実力者と思われるのに教会内でも無名らしいのは何故なのかとか。

初対面だったはずなのに、どうして自分を知っていたのかとか。

初めて訪れたと言う割に、やたらその地方について詳しいのは何故なのかとか。

どうしてその外見が会った時と変わらないのか、とか。

考え出すときりがないほど、ひたすら謎めいた存在だ。

特に最後の疑問はそもそも『人』なのかという疑問に繋がりがねないので、あえて考えないようにしていたりする。

何気なく腕に抱え上げた少女を見下ろした。布越しに伝わる体温はそれが生きている事を示す。自分より少し高めの子供体温に触れていると、そんな状況ではないのに何故か落ち着く。

そう言えばもう一つ知っている事があった。

（…アイツ、体温低いんだよな）

短剣と細剣の中間のような半端な姿になった剣を片手に魔物に向かう背を眺め、そんなどうでもいい事を考える。

『魔族ホイホイ』。

そんな不名誉というか、いっそ恥ずかしい呼び名がついてしまっ

た自分の行く先々には、認めたくない事だけでも、今日の前にいるような小物を含めて闇に属する生き物がよく現れる。

まだ教会に入る以前、イオス大陸の港町で暮らしていた頃は気付いてなかったのだが、そういう体質らしい。

最初にその話を告げられた時は、当然ながら信じられなかった。

だが、教会での生活に飽き飽きし、脱走を決意して飛び出して間もなく、すぐにそれが嘘ではなかった事を思い知る事になった。

南へと向かう街道を進んでいた時に熊のような魔物に襲われ、まさに絶対絶命の危機に陥ったエミリオを助けてくれたのが　　リドルだった。

今でも覚えている。

大人の男より二回りは大きな魔物が、目の前で真つ二つになった瞬間を。

頭から返り血を浴びた凄惨な姿で、何事もなかったかのようにさわやかな挨拶をしてきたそのイキモノを人と認識するのはかなり難しかった。

あまりのエグさに、呼吸すら忘れ、必死に吐き氣と戦ったものがある。

それと同じような光景が、また繰り広げられようとしていた。他の退魔師を知らないのも何とも言えないのだが、リドルの戦い方は正直あまり美しいとは言えない。

倒すと言うよりも　　何というか、屠殺に近い。

首を撥ね、肉を切り裂き、生き物の形だったものがただの肉片になり、周辺は魔族の血に染まる。

体液が赤くない魔族ならともかく、人と同様に赤い場合は視覚的にかなりきついものがある。もうちょっとまともな戦い方がありそうなものなのだが、門外漢だけでなく『守られる』立場である己に文句をつける余地はない。

出会って間もない頃は、何度も夢に見てうなされたものだ。その頃と違い、今はそれを目をそらさずに見届けようと思う。

魔族を呼びよせる体質なくせに、自分には魔族を倒す能力がない。最初の脱走に失敗したエミリオはその事実を受け止めると、今度は真面目に教会での勤めに励むようになった。

伝道を許される聖父として資格を持てば、わざわざ脱走せずとも自分の意志で好きな場所へ行ける（しかも教会の保障付きで）という事に気付いたからである。

そう　一人で、何処にでも。

裏返せば『万が一』の事が起こった時、下手に周りを巻き込まずに済む。

そう思ったのに　気がつくと横に、赤い頭がある。呑気にへらへらと笑って、『大丈夫だよ』と言う。

全部、片付けてあげるよ。

そうしてその言葉の通り、現れた魔物や魔族を倒してしまう。その後で一人落ち込んで、時に泣く事もあるくせに。

本当は嫌なのだろうと思うから、迷惑だと突き放し、邪魔だと邪険に扱ってみたりもした。嫌な事を我慢してまで、守りたいとは思わない。

なのに、リドルは構わず付きまとい、そして己の手を汚す。自分は退魔師だから、これが役目なんだと口癖のように言いながら。

だからエミリオはどう言っても無駄なら、せめてきちんと見届ける事にした。エグかろうか、トラウマになろうか、それ位しか自分出来る事はないから。

正しい魔王の使い方（3）

今も耳に残る、言葉。

哀れな事だ。

他の誰からも、そんな事を言われた事はなかった。

そんな……心からの同情と憐れみを込めた言葉を。

例え誰かに言われる事があるにしても、その人物から与えられるとは思ってもいなかった。

言葉を交わす事があっても、互いの存在を否定し合うような不毛なものになるのではないかと思っていたのに。

傀儡^{こわい}に心はいるまいに。

本当にその通りだと思った。

そんなもの、なければ良かった。そうしたらきつと、こんな思いを抱く事はなかっただろう。

自分が倒さなければならぬ相手に対して、『殺したくない』だなんて。

+ + +

先程蹴り飛ばして距離が出来たとは言え、相手が魔物である限り十分な間合いとは言いいれない。

リドルが動いた事に警戒の色を強め、魔物は威嚇^{いかく}するように低い唸り声を上げる。おそらく通常の人間ならば、それを耳にただけ

で腰を抜かした事だろう。

魔族や魔物の声音は人の可聴域を超えた音も多く、その性質を逆に利用して快い声音で人を幻惑するような種族もいるが、基本的に耳障りでに不快感を伴う場合が多い。

目の前の獣は明らかに後者だ。

ざわりと周囲の大気が動いたような感覚に、リドルはその目を^{すが}眺める。

錯覚ではない。目に見えない『力』が、魔物の身体に集まって行く。少女と対峙していた頃より、心なしかその体躯が一回り大きく見えるのは見間違いではなかった。

(《共振》)

こうした獣に近い魔物は、群れる事で互いの魔力を高めあい、力を増幅し合う性質を持つ事がある。

それを《共振》といい、同族の危機を察知した時が最もその狂暴性と攻撃力が増すと、各地に散らばる退魔師達から報告されている。その現象が今まさに起こっているのだ。

(…ごめんね)

リドルは心の中で小さく謝罪し、そのまま予備動作もなく手にした短刀を一閃させた。

刃の長さ的には魔物には到底届かないはずの一撃。けれど何かを察知したのか、魔物はその場を飛び退く。

次の瞬間、魔物がいた地点の大地がざくりと切り裂かれ、土煙があがった。

リドルの武器は特別製だ。直接攻撃を当てずとも、相手を傷つける事が出来る。ただし 魔族か魔物を相手にしている場合に限って、と制約がつくが。

一見その一撃は肉を切り裂く為のように見えるが、実際は違う。

その内、血肉に宿る魔力を滅消する能力を持つ。

魔力は魔族達にとって生命力そのものだ。それを奪われれば死滅するより他はない。

魔力を感知する事でそれは武器としての性能を発揮するが、近くに魔族がいなければ普通の短剣と変わらない。いや、どちらかと言うとなまくらな部類に入るだろう。

逆を言えば、相手が人間などであった場合は通常の武器以下の威力しか持たない。ただ魔物を殺す為の、魔族を滅ぼす為にだけ存在する 武器。

初撃は威嚇の意味合いが強い。こちらの武器の力を知らしめる事で、相手を牽制させる事が目的だ。

これで退いてくれれば そんな密かな願い空しく、魔物の瞳の色が変化した。

どろりと濁った緑から、鮮やかなオレンジへ。魔物がリドルを完全に排除すべき敵とみなしたのだ。

『主』を害する可能性があるモノとして。

そう、仲間が近くにいる訳でもないのに《共振》が起こっているのも、リドルを敵とみなすのも、そもそもこの魔物が単体でこんな所に姿を見せたのも、たった一点に集約される。

『魔族ホイホイ』 そう噂されるエミリオがこの場にいるからだ。

そのふざけた呼び名は、実際の所、非常に核心をついている。誰が言い出したかは知らないが、上手い事を言っただとリドルは密かに感心していた。

リドルは鋭く吐息をつき、再び距離を取り直す。さりげなく背後のエミリオと少女を庇えるように間に立てば、益々不快げに魔物が吠えた。

魔物からしてみれば、リドルの方がここから排除すべき存在なのだ。おそらく、少女に至っては関心もないだろう。

（お前はただ、『魔王』を守ろうとしてるだけなのにね）
言葉にはせず、やはり心の内で語りかける。そうした所で結果は

変わらないとわかってはいても、そうせずにはいられない。

それは当事者自身すら知らない秘密。それを守る為にリドルはここにいる。

闇の生き物の頂点にして、闇の世界の王たる『魔王』。闇に属する生き物にとって、その存在は何よりも絶対的なものとして優先される。

『魔王』あつての魔族。その存在は魔族や魔物の能力を活性化させ、人の心を、世界の在り様を、負の方向へと傾ける。

存在一つで、世界は簡単にひっくり返る。そんな途方もない存在が、エミリオその人なのだ。

相手が魔物で良かったと密かに思う。身勝手な事は承知の上だが、こちらとしては余計な口を利く魔族を相手にする時が、いろんな意味で一番戦いづらい。

エミリオは自分がそうである事を知らない。自身が普通の人間だと疑いもしていない。そんな彼に、自身への疑いを抱かせるような発言をしかねない相手だと慎重にならざるを得ない。

…どちらかと言えば、こちらが悪役なのだと自覚しているからこそ。

とても身勝手で、とても個人的な理由で、彼に同行しているからこそ。

「悪いけど、『エミリオ』は渡さないよ」

ぼつりと呟き、リドルは地を蹴った。

驚くほど重さを感じさせない速さで一気に距離を縮める。魔物も鋭い牙を剥きだして応戦の姿勢を見せた。

…ッガ!!

牙が受け止めた鈍い音が手元で響き、衝撃が腕へと走る。

刃ごとへし折らんばかりにぎりぎりど魔物が顎に力を込めてくる。おそらくそれが普通の武器ならば折れるのは時間の問題だったたる

う。リドル自身、どちらかというと小柄で体格的に不利と言えた。

けれど、受け止めている武器も普通でないように、その使い手も普通ではなかった。

「悪いとは思うけど…これが僕の役目なんだ」

薄く笑ったその顔は何処か冷めきっていた。つい先程までとはまるで別人のよう。何処か作りものめいた表情がそこにある。

「『魔王』は復活させない」

断言する言葉は鋭く。

「エミリオが『エミリオ』である内は、絶対にそっちには渡さない…！」

黒い瞳が不可思議な光を帯びて。それはここではない何処か遠くを見つめるかのように眇^{すが}められる。

…忘れられない言葉がある。

忘れられない、瞬間がある。

あの時、自分は正しい意味で『感情』を得た。初めて、自分を創ったものを恨んだ。初めて自分を嫌悪した。

初めて 何かを喪いたくないと願った。

その願いは、叶うはずもない願いだったけれど……。

ぶんっ！

その細腕は想像を覆す力を発揮し、刃に噛みついた魔物を振り飛ばす。

再びあがる、苦痛の声。手加減などしなかった。中途半端に手加減した所で、相手の苦痛を長引かせるだけだ。

一瞬だけリドルは背後に視線を向けた。目を反らす事なくこちらを見つめる瞳に、思わず苦笑いする。

(…後で怒られるんだろうなあ)

戦い方がひどすぎると、また叱られるのだろう。けれど仕方がない。

困った事に完全にそこにある魔力を『食らい尽くす』まで、彼の得物は元のなまくらに戻ってくれないのだ。

次の瞬間、その顔から再び表情が消え去る。

振りがぶるは、魔物を屠る為の一振り。大地に打ちつけられ、すぐに体勢を整えられずにいるそこを。

「…おやすみ」

感情のこもらない平坦な言葉と共に風の刃が一閃した。

正しい魔王の使い方（4）

ざばあっ！

「わっ、冷たっ！！　ちよっと待ってよ、せめてこ、心の準備……！！」

「うるせえ、男なら逃げんな！！」

どばしゃっ！

「ぎゃー！！　ひ、人でなし！！」

問答無用とばかりに頭から続けざまに冷たい水をかけられ、リドルは今にも死にそうな声をあげた。

季節的には過ごしやすい気候でも川の水はやっぱり冷たい。それを何の予告もなく頭からかけられ、全身ずぶ濡れにされては文句の一つも出ておかしくはないだろう。

しかしそんな非難もなんのその、人でなしと言われた当人は無言で三杯目の水を汲み上げ、につこりと笑う。

顔自体は笑ってはいるが、目が笑っていないという器用な表情で。

「うつ…、エミリオさんひどい。仮にも聖職者なのに、血の穢れを被う為とはいえ、頭から水をかけるなんて……」

さめざめと涙ながらに訴えてみるものの、エミリオは聞く耳を持たずに情け容赦なく三杯目の水をうなだれるリドルに勢いよくかける。

「ぶはっ、ちょ、本気でひどくない！？　い、今の鼻に入りかけたし……！！」

「黙れ。お前にはこれで十分だ」

本気で涙目になるリドルに、エミリオは聞く耳を持たない。自覚

がなくても、リドルには時にエミリオが血も涙もない『魔王』に思える。

もつともこんな乱暴な手段をエミリオが取るのも、いつもの事だったりするのだが。夏場ならおそらく問答無用に川に蹴り落とされている。

…魔族や一般人相手ならほぼ無敵を誇るリドルだが、エミリオの攻撃は来るとわかっていても完全には避けきれない。油断していると今のようにもろに食らう。

伝道を目的とする聖父は単独行動が基本である為、全員が体術を基本とした護身術を身に着けてはいる。…が、エミリオのそれは、暗示同様達人レベルだったりするのだった。

おそらくそもそもが『人類の敵』である事が影響しているのだろうが、リドルとは逆に魔族以外にはほぼ無敵なのだ。

幸か不幸か、リドルを叱り飛ばす時以外にその手腕を発揮する場面がない為、本人にその自覚はないのだが。

視線を足元に向ければ、そこには薄赤い水たまり。

例によつて盛大に魔物の返り血を浴びた結果だが、これだけ水を浴びても完全には落ち切っていない。

こういう事態になる度に、次回はもうちょっと考えて攻撃しろと説教されるのだが、一向に改善されないとなればエミリオが怒るのも当然だろう。

（元々、沸点低いしね）

聞こえたらますます容赦ない水の洗礼を浴びかねない事を心の内だけで思い（流石にそこまで命知らずではない）、リドルはぶるぶると動物のように頭を振って水気を飛ばす。

寒い。

足元から這い上がってくる震えに耐えつつ、リドルはぎゅっと服の裾を絞る。盛大に水をかけられたお陰で、絞った所から薄汚れた水が滴り落ちる。

その程度で水気がなくなるはずもないが、放置するよりはマシだ

ろ。そんな様子を横目で眺め、エミリオは小さくため息をついた。

「リド。お前、なんでいつもそうなんだ？」

「…え？」

問われた言葉に怒りは無い。むしろ何処か呆れを含んでいる。

驚いて顔を上げれば、エミリオの青い瞳が真っ直ぐに向けられていた。

「エミリオ？」

「見逃すという選択肢だってあるんじゃないのか？ …毎回、律儀に倒す必要が何処にあるんだ」

言われた内容を理解し、リドルは心の中で息を飲む。

いつか言われるのではないかと密かに思っていた言葉だった。

実際、魔族を倒す必要性は何処にもない。教会の教えでも人に害を及ぼす可能性がなければ、狩る必要はないと説かれている。

何故なら、魔族は世界にとって『必要』な存在だから。

一般的にはその認識はないが、魔族も人も、あらゆる生き物がお互いに影響し合っている。対とも言える魔族が減れば減るほど、実は世界は『闇』側に傾く。

すなわち、今の平安が消える日が近づく、という事を意味する。

現に魔族が弱体化した事で人の手でもそれなりに撃退出来るようになった結果、魔族が減り 人の心は長い平和で傲慢になった。

その証拠に、『魔王』が生まれている。本来ならとくに、光の時代は終わりを迎えていたのだ。

今回は確かに少女の命の危険があった訳だが（なお、件の少女はすでにエミリオによって近くの村へ送り届けられている）、最初に蹴り飛ばした時点で魔物が目を回している間に逃げるという選択肢だってあったのだ。

言動はとても聖父には思えないが、聖職者である事に変わりはない。

いのか、エミリオの言葉は至極真つ当だった。

「それとも、魔族に…個人的な恨みでも……」

やがて言いづらそうに続いた言葉に、リドルは慌てて首を振った。
「それはない!!」

思わずといった調子の言葉に嘘はない。その様子に、エミリオは少しだけほつとしたように表情を緩めた。

「魔族に恨みなんてないよ」

「じゃあ何故、俺に付いて来る？」

「だ、だってエミリオは魔族が襲ってきたら撃退出来ないじゃないか。だから……」

「倒してくれ、とか守ってくれなんて、俺は頼んだ覚えがないぞ」

「う…、それは、そうだけど……」

心底困ったようにリドルは言い淀み　やがて、唇を拗ねたように尖らせるとぼそりと呟いた。

「…だって、エミリオと一緒にいると楽しいんだもん」

予想外の言葉にエミリオの思考は凍りついた。

「魔族を代わりに撃退するって、一緒にいる理由に丁度良かったし……。確かにエミリオはさ、『魔族ホイホイ』の上に人でなしだし、いつも怒ってばかりの癖に一般人の前じゃ『王子様』の二重人格だし、聖職者の癖に信仰心ないし、人としてどうかと思うけど」

「マテコラ」

ここぞとばかりに言いたい放題のリドルに、我に返ったエミリオのこめかみにうつすらと青筋が浮かび上がる。それに気付きつつも、リドルはこれだけだと思っっている言葉を告げた。

「…でも、ぼくにとっては初めての『友達』だから」

虚を突かれたのか、エミリオが目丸くする。

けれどそれはリドルのたくさんある隠し事の中でも、唯一胸を張って言える事だった。…気恥ずかしいから、出来れば本人には言い

たくなかったのだけでも。

「だから、怪我なんてして欲しくないし、出来るだけ元気で長生きしてもらいたい。その為にぼくに出来る事は、近寄ってくる魔族から守る事だけなんだ」

それは真実だけれども、『何故魔族を倒すのか』という理由には足りない。

いつもならささずそこを突っ込んでくるであろうエミリオが、しかし今回は間抜けな顔で呆然とリドルを見つめている。

一体何がそこまで衝撃を与えたのか謎だが、先程の自分の言葉は結構な破壊力があつたらしい。そこまで驚かれると正直傷付くのだが。

魔族を倒す事 それが魔族の『天敵』として生まれた自分の存在意義で。

それ以外に出来る事を思いつけなくて。

（エミリオを『魔王』にしたくないって、きっと我が儘なんだろうな）

それでも、誕生した魔王が未だに『人』として生きている事には、何か意味があるのだと思いたかった。

永く、永く繰り返された世界の摂理の、おそらく初めての『例外』。

初めての 打算や恩義やそうしたものがない、対等な『友達』。

傀儡こわいに心はいるまいに。

一番古い記憶にある、憐れむように微笑んだ顔を思い出す。

その通りだと思ったその時の自分は、まだ何もわかっていなかった。今はそんな事はないと言いつ返せる。

心がなければ、一緒にいて楽しいとか嬉しいなんて感情を知る事はなかったはずだから。

（失くしたくないんだよ）

頭ごなしに怒られる事も、飾らない言葉も、くだらない事で笑い合う事も、エミリオに会うまでは知らない事だった。

一緒にいるだけで、知らない事が増えて行く。

…いつか、エミリオは『魔王』になるのだろ。誰もが恐れ、魔族に傳かすかれる存在になるのだろ。実際、本人に記憶はなくても一度『魔王』としては覚醒しているのだ。

そうなった時、何処まで『エミリオ』であつた頃の記憶や体験が残るか定かではない。その事を思うと怖くて堪らない。

エミリオが『魔王』になった瞬間、魔族の天敵である自分は彼に剣を向けなければなくなる。『友達』と戦わなければなくなる。

自分が魔族を倒す事で、その日が一日でも伸びるなら。最初の理由はそれだった。けれど今は違う。

忘れられたくない。

変わらないで欲しい。いつまでもこうして、呑気に旅をしていたい。

エミリオがどう思っているか知らないが、それがリドルの正直な気持ちだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1649o/>

正しい魔王の育て方

2011年3月21日16時28分発行